彼こそこれを承認する第一人にあらずや、素より天賦の鬼才を有する彼に於ては往くとして可ならざるはなからんも、若し此の叔父にして在さず、在すともその犧牲と献身とによりて、抑も當初の奬勵と機會とを與へられざりせば、彼の地位境遇は必然狹小限局の範圍を脱せずして、單に村内第一流の雄辯家として僅に鄕黨の間に持囃されたに過ぎなかつたらう。吞吐豐麗にして鏗鏘たる、朗々暢々、他者をして天來の樂附を奏するかと思はしむる雄辯は、世人の自由に聽くべくもなくして了つたであらうことを。

今尙元氣鑛鑠たる老叔父が、彼を訪ずれて萬感油出するを禁じ得なかつた。そして彼は自らこの事に就て述懷を述べてゐる。

『余の親愛なる老叔父は、その平素目して大英雄となすグラットストン翁の嘗て住んだことのある官舍に來つて滯留することを、一代の面目となすだらう。その場所に因む種々の聯想は、永く自らを感奮し、自らを感奮するに至るべき好個の記憶となるであらう、』と。

第十二　鑛山王久原房之助氏の奮鬪努力

我が國に於ける鑛業、特に銅の採掘精錬は近年益々世界に雄飛し、その經營者たる、古河、藤田、住友、三井の如きは、鐵中の錚々たるものであるが、此の間に在つて、新進氣鋭、一代の雄略を抱いて、今や將に我が鑛業界に於て乾坤を呑吐せんとするの概あるは、久原鑛業株式會社である。

僅に十年にして、已に三井、古河、住友等の王國を凌駕し、隆々たる勢威は、實に旭日の天に冲するが如く、經濟的方面に於て、世界的經綸を藏するが如き久原鑛業は、徒に祖先の遺業を守株し、島國根性に支配さるゝ我が國の實業家のために、萬丈の氣焰を吐くものではないか、其の一大鑛山王たる久原房之助氏が異日我が國のモルガン、カーネギーとなつて、三井、三菱をして後に瞠若たらしむるに至るや否やは遽に斷定することが出來ないが、氏の稼行せる日立鑛山は前記の諸銅山王を凌いで銅山王の名は、今や古河家を去つて、久原氏其の人に依つて代表せられてゐるといふてもよい位であるから、此の點より云へば、氏の如きは、明治の子のために萬丈の氣焰をあげてゐるものと云ふべきである。

新進氣鋭一代の雄略を懷く

久原氏の容貌を見れば婦人の如く、其の聲また婦人の如くで、五尺の短身の何處に彼の如き大抱負が潜んで居るかと怪まれるほどである。此の點は、彼の英國の英傑セシルローズを偲ばせるものがある。氏がその事業の手を漁業に延ばし、船舶に延ばし、更に南洋のゴム栽培等に及び、着々として經綸の歩を進めつゝある所を見れば、決して英のセシルローズに劣らぬものあるを見るに至ることゝ思ふ。

今日立志傳中に載せらるゝほどの成功者は悉く之れ貧家の子弟、成功傳即貧兒傳、立志傳即貧兒傳であるが、獨り久原氏が富豪の家に生れたにも拘らず、勤勉努力、その體力を練り、精神を鍛へ、以て今日の成功を得たのは、貧兒即成功論より言へば、正に左道異端、特殊異常の事に屬し、獨り明治ッ子のために氣焰を吐けるのみならず、又富豪紈袴子弟のために萬丈の大氣燄をあげてゐるものと云つて宜しい。

案ずるに、世間一般の縉紳、富豪の家が、豕子不肖の子弟を出す所以のものは、浮世の觀樂人生の榮華乃至衣食の末に至るまで、欲して居ざるなく、思ふて成らざるなく、又心志を苦しめ、精神を鍛錬するの必要なきを感ずるが故で、若しも彼等にしてその富に溺るゝことなく、富貴に處して貧賤の行をなし、心志を苦しめ、精神を鍛錬することを忘れなかつたならば、必ずしも、賣家と唐櫃で書くの愚を成さずも濟むのである。久原氏が、年少にして此の點に着目したのは、流石に後日名を成す人だけあつて、平凡者流の群を嶄然として拔いてゐたのである。

意を決して森村組の倉番人

久原氏は明治二年を以て、山口縣の萩に生れた、氏の父は故藤田傳三郎氏の仲兄久原庄三郎で、父や叔父が富豪であつた割には、少時から辛苦を嘗め盡してゐる。如何に氏の血管に實業家たるべき血が流れてゐたとは言へ、若し世の普通の富豪の如く、平々凡々のお坊つちやん育ちであつたならば、到底今日の如く實業界に覇を稱することは出來なかつたであらう。

久原氏は少年の頃から、福澤先生の慶應義塾に入學せしめられてゐつたが、當人は非常に福澤先生を尊信して、先生の說は始終感服して聽いてゐたが、福澤先生は其の頃、日本の將來は外國貿易を盛にして國家を富ますの外はないと云つて、何時も外國貿易といふと森村翁の話をされた。その事が氏の腦に泌み込んでゐて、學校卒業後は、一身を外國貿易のために捧ぐる決心を爲し、自分の傳ずる森村氏の所へ行つて丁稚となり、一生懸命に見習をしやうと決心した。

で、慶應義塾を出ると、早速森村氏に面會して森村組に採用されんことを乞ふた。その時森村翁は『御希望は至極御尤なるも、安樂に生活して世路の辛酸を味はざる人は私方に必要はありません』と膠もなく斷られた。此に於て氏は神戸に赴き、支店の廣瀨氏に一身を托せんとしたけれども、翁の御斷りを喰つた氏は此處でも謝絕され、更に上京して、根氣よく再三再四翁を訪ひ、採用方を只管乞ふた處が、翁は『さらば倉番人足ならば雇入れてもよい』といふ。久原氏の偉い所は此處である。此の答を聞くと、快諾一番『結構です』とその翌日から金槌を腰にして働くことになつた。

當時氏の着物は木綿の筒袖で羽織も着ず、五分刈のクリ〳〵頭で、一見した處では、他の者よりは一段衣服が粗末な位に思はれた。森村翁は初めて見た時に氏の心懸を看破して感心したといふ。店に入つて後も、食べる物も店の者と同じで、一回の辨當代が六錢位のとこであるから、お菜には個

煮が一摘位しか入つてゐない、三食ともそんな風である。それで人足、荷造などの仕事を厭ふ色もなくやつて、埃だらけの中に飛び込んで、朝から晩まで休むことなく、孜々としてやつてゐた。外國貿易と云へば、大抵机に向つてペンを走らせて居ればよいものゝやうに考へて來る人が多い。さういふ人に人足や、荷造などをさせると、外國貿易の見習に來たのに、人足などに使はれて堪るものではないと云つて、吃驚して直ぐに斷つて歸つて了ふ。殊に學校卒業生にはさういふやうな、人が多い。それにも拘らず、久原氏は、右のやうに人足もすれば、荷造りもして孜々として働くので一同唯だ感心し、敬服するの外はなかつたといふ。

進て鑛山革進の難局に當る

然るにその後、氏は、藤田組に於て經營せる小坂鑛山の危機に際して、之が復興發展を寄託さるゝに至つたが、藤田家の同族、富豪の子弟、新智識を修養したる身を以て、その昔森村商店にあつた時と同一の筆法、同一の態度を以て、先づ採鑛精錬の現業員となつて、鑛山事務實習に努めた、氏は此の時、何も好んで下級の事務員になる必要はなかつた。欲すれば直ちに相當の地位も與へられたであらうに、自ら好んで斯かる卑職に就いた事は、反つて氏の素志が直に其の事業の實際に習熟しやうとしたに在ることが窺はれる。此の點は尋常凡傭の徒と最も異なる所で、物に對して直ちに自ら其心隨を攫まうとする氏の熱心を知ることが出來る。此の熱心は即ち成功の本で、成功と僥倖の異なる所は、正に此に存するのである。

其の當時に於ける小坂鑛山は、殆んど廢墟の如きもので、鑛脈も正に絶えんとして、收支到底償はず、藤田組の鑛山業は正に一蹉跌を來さんとしてゐた。當時何人も、もうあの鑛山も望みがない復活の事などは思ひよらないと諦めて居た時、唯一人失望しない人があつた、即ちそれは久原氏である。氏は鑛夫と同じく鶴嘴を手に持つた。そして黑暗々たる地下に、滿腔の熱誠を込めて打込んだ鶴嘴は遂に新なる鑛脈に掘り當てたのである。氏は此の如くにして秋田山中の鑛山に沒頭することゝ十三年、經營法にも技術にも精通するに至つた氏は、漸次進んで其の所長となつた、その事業に對する執着力は各方面に現はれて、遂に電氣分解銅の新學理を應用して、殆んど廢山の外なかりし小坂をして、東洋一の鑛山たるに至らしめた。實に此小坂鑛山の十三年間は氏のために他日雄飛の素地を爲さしめたもので君の名と手腕とが初めて世に知らるゝに至つたのも此の時である。

然し、年中雪に埋もれて、濛々と立ち昇る煙の行方ばかりを眺めてゐたのでは仕方がない、何か獨力で創めなければ仕方がないと考へ、突如として雪深い山を下りたのは、明治三十八年の師走であつた、當時の藤田組の親分傳三郎翁も氏の去るのを惜しんだけれども仕方がない。『どうも長い間色々御苦勞でした、これは甚だ少しばかりですが、是迄勤めてくれた慰勞です』と差出されたのを闕いて見ると、住友の切手、金五十萬圓也と書いてあつた。

氏は五十萬圓の金を手にするや、最早自己修養のみの時期にあらず。宜しく其の得たる經驗と手腕とを傾けて畢生の事業に傾倒すべき時である と感じ、約一年餘に亘つて全國行脚の途に上つた。行脚と云へば閑人のやうであるが、志は地下にあるあらゆる鑛山の實地見學と探査を試みた後、幾多の鑛山師が皆匙を投じた日立鑛山を有望と認め、廢鑛同樣の同鑛山を精々二十萬か三十萬で、買收した、曩に同鑛山のために手を燒いた鑛山師や競爭者等は、無謀にも程があると云つて氏を嘲笑つた。然し一度有望であると信じた氏の心は、泰山鳴動するとも寸移だもしない。採掘一年、技師に至る迄到底見込がないと再び匙を投げた。併し氏は、小坂に於ける十三年の實地經驗と、行脚中に得た幾多の見學とに依つて、見込みがあるとして着手した此事業を放棄するに忍びなかつた。既に幾多の人が見込なしとして棄てた山を見込む以上、何處かに一道の望みがあつて、それだけの覺悟と決心とは初めから在つたのである。

全國鑛山の實地見學と踏査

技師達が匙を投げても、氏一人だけは有望なりとの信念が終始一貫變らない。切に此の決意を兼に打明けん、不屈不撓採掘を續けた。果して氏の先見は誤らず、果然一道の新鑛脈が鶴嘴の一端に依つて開かれた。氏は仰いで天に謝し、久原鑛業株式會社を興して新式製錬法を用ひ、あらゆる最新式の經營法を用ひて之が經營に從事した。かくて會社は一躍して東洋有數の會社となり得る所の利益は年に三百萬圓を算するに至り、終に今日の盛大を爲すに至つたのである。氏は單に日立の鑛山を守ることをのみせず、海外へも盛んに計畫の手を出して、今後益々奮鬪の生涯を續けんとしてゐる。

第十三　海運界の飛將山下龜三郎氏の活躍振

幼な心に燃える大海の憧憬

歐洲大戰が勃發して以來、造船、海運、貿易等苟くも海に關係のある事業の活躍發展は實に目醒ましいばかりである。此の好機會に乘じて、舊來の三大汽船會社外に在つてメキ〳〵と頭を擡げ、新進氣鋭の營業振りは恰かも陸上に於ける久原と對比すべきものがあり、數千萬の富を擁して、海運界に大活躍を示してゐるのは山下汽船株式會社である。而して其の社長たる山下龜三郎氏の前半生を顧みれば、その獲たる富が決して一朝一夕のものでなく、多年の辛酸の苦、奮鬪の涙、今日に至つて始めて得られたもので氏の經歷は實に奮鬪傳中の尤なるものである。

山下氏は、愛媛縣北宇和郡喜佐方村の庄屋の二男に生れた。彼の山陽の山と南海の山と相接して、青螺呼べば將に應へんとする瀬戸内海の明眉なる風光を前に控へた處に呱々の聲を擧げた。此の太平洋の海を承くる内海の懷に育つた氏が、今日獨力を以て海洋の一王國を建設せんとしつゝあるの

も、蓋し運命の然らしむる所ではあるまいか、庄屋とは云へ、權利のない二男坊に生れた氏は、幾度か麥の冷飯に熱き涙を灑ぎ、幼な心にも將來を思ふ奮勵の情禁じ難く、暇ある毎に、一碧鏡の如き海の端に立つて思ひを遠く馳せるのが常であつた。かういふ時、此の未來ある少年の胸に浮んだのは繪であらうか、詩であらうか、否、女性的なる瀬戸内海の風光を化して繪を生み、詩を生むには此の少年は餘りに鬱勃たる心を持つてゐた。此の少年は、美はしい鏡の面に一脈の白波を生じて千波萬波洶湧する男性的の希望と光明とを握取し把握したのである。海上の浮城が黑煙を吐いて、東に西に徂徠するのを見るとき、此の少年の心は希望に燃えて其の若い血は胸裡に躍つた。彼は此に志を立てゝ瓢然として鄕里を去つたのである。

入學試驗の失敗が發奮動機

男兒成功せずんば、再び鄕關の地を踏まずとの堅き決心を持して鄕里を飛び出した氏は僅か十五圓の金を懷にして、先づ京都に腰を落着けた。京都は名にし負ふ舊日本の都、山紫水明の此の地は、嵐山の春に高雄の秋に人の心を嗾らずには居らない、氏は此の地に在つて暫く育英に從事した。舊都の風光や人情は、多少とも氏の心を惹かぬではなかつた。然し氏の心には、人を敎ふるよりも、先づ自ら社會の活學を學ばんとするの念頻りなるものがあつた。また當時十五圓の俸給は決して尠少なるものではなかつた。然し氏は之れに甘んじて、留まるが如き、溜水的の人ではない、洋々として晝夜を分たずに流る大河の如き氣象を持つた氏は、此の活氣のない、女性的な、靜的な、老人的な土地は、青春の血燃ゆる吾が功名の舞臺ではない。志を成すは正に東都にあらねばならぬと再びとして生馬の目を拔く東都に姿を現はした。

東都に姿を現はした氏は、先づ法學を修めて處世の基礎を固むべく、明治法律學校に學び、そこに一年ばかり居た後、更に赤門に入つて登龍の門を見出さうとしたが、好漢不幸にして失敗した、否之れが却づて幸福となつて今日の氏を生み出したのかもしれない。此の時、幸にして赤門に入ることが出來たとしても、氏が果して今日の學界に重きを置く人と成り得たかどうかは疑問である。『禍福は綯へる縄の如しで』天は失敗の鞭を以て此の青年が虛學に向ふことを戒めたのかもしれぬ。之れは實に氏に取つて、一時喪心の種であつたと共に、一轉機を劃する發奮の動機であつた。

紙店小僧より石炭商會經營

人生世に處する豈獨り學術にあらんや。今後の世は虛學の世ではない、虛業の世ではない、寧ろ活社會の活經驗を得て、實學實業に從事すべきであると、此に飜然節を折つて書冊を投じ、大倉紙店の一小僧に住み込み、●●●●●宮川保全氏等の下に前垂がけで、朝は早くから夜は晩くまで、寸分の暇もなく一生懸命になつて働き、三五年は忽ち夢の間に過ぎたけれども、此の方面に多くの光明を見出すことは出來なかつた。而して、海を思ひ、海を戀ふるの情は、依然として氏の胸中を離れなかつた。『矢張り俺はどう

しても海に關係した事業に奮鬪するのが成功の道かもしれぬ。」と、堅く決心し東京を去つて横濱に赴き、同地の池田石炭商店に入つて眞黑になつて働いた。主人の爲め、また己のために、影日向なくあらん限りの奮鬪努力を盡して働いた結果、初めは手代で入店したのであつたが、終には共同經營となり、一時失敗の憂目は見たが、百折屈せず、多少の餘財を殘したのを幸に、東北に於ける炭山の實地踏査に出掛け、幸に一炭坑を探し當て、獨力此に横濱石炭商會を經營するに至つた、時に年三十、氏の今日の基礎は初めて此に築かれたので、百萬圓の山下石炭株式會社の地盤は此の時に定まつたのである。

一勝一敗終始一貫奮鬪努力

人生の行路に於いて、一勝一敗のあるは正に免れ難いことである。此の難關を切り拔けてこそ、始めて山下氏の如き成功を得るのである。獨力横濱石炭商會を經營するに至つた氏は、本店支店を東京神戸に設け事業は次第に擴張して、汽船二艘の船主となるに至つた。少年の頃、靜かなる瀬戸内海の碧波を碎いて走る汽船に思を寄せた氏の前に、始めて海の世界が開けたわけである。而して幸運は更に氏を見舞つた。明治三十七年、東洋の風雲は動いて、日露兩國の大戰を卷き起した。その結果、炭價は暴騰し、船舶は不足を告ぐるやうになつたのであるから、氏の得意や思ふべしである。往年、伊豫の一海村より、十五圓の端た金を懷中にして飛び出して來た少年、今は百萬の巨利を博して、石炭と船舶に於て始めて世人の注目を受くるやうな實業家の仲間入りをすることが出來た。然し、一勝の蔭には一敗の潜んでゐる。當時、戰爭終局後の海運界は、次第に氏の幸運を奪ひ去り一時は巨額の負債に苦しめられて、殆んと破產の止むなきまでに立至つた。

今に見ろ、三井、三菱を十寄せても追付かぬ身上にして見せると、止まる所を知らぬ青年の血氣、調子に乘つて、小樽木材其の他の事業に手を出したのが一生の誤りで、マンマと失敗し、百五十萬といふ借金を背負つて、二進も三進も行かぬ身の苦しさ、事業を共にしてゐた平沼延次郎（平沼專藏氏の養子）氏が耶馬溪に飛び込んで死んだのも此の時で、山下氏も幾度か刃物を咽喉に擬したこともあつた。されど、思ひ返して見れば、故郷には老父母があると深く思案の末、一命を取止めたのは、氏の運が强かつたのである。當時氏は、銀行を踏み倒したとか、色々の批難を受けたけれども、敢然として毀譽褒貶の前に立ち、今まで住み馴れた宏壯な横濱の家を人手に渡し己は其の上の小やかなる家を借りて、精限り根限りの奮鬪を續けた、大抵の男ならば、横濱で失敗した以上、其處を逃げ出して、他の業に轉ずるのが常であるけれども、氏は頑强にも横濱に踏み止まり、昔の榮華を語る宏壯なる家屋の傍を通りながら、依然として船舶業を續けてゐた。此の意地張りと押しの强い所が山下氏の身上で、やがて今日の成功を生んだ所以である。

かく一沈一浮の間に努力を續けてゐるうちに、終に好機會は到來した、即ち去る大正三年に至つて

好機は到來せり世界大戰爭

空前の世界大戰は勃發し、炭價も昂騰し、海運界は熱沸し、山下汽船會社は、社外船中の首位を占むるに至り、五千萬以上の巨利を占め、二十餘隻八萬噸の汽船を操縱するに至つたのである。而も氏は、日露戰爭後の反動に鑑み、石炭部を分離して一百萬圓の株式會社とし、多年自分の手足となつて働いてくれた部下にその株を頒ち、併せて戰後の經營に努力してゐるのである。山下氏は、奮鬪努力止る所を知らぬ活動家であると共に、情誼に厚い人である。氏の社に使はるゝものは、皆氏のためには、犬馬の勞を辭せざる人物ばかりで、氏も亦部下を遇することの厚いのは人の知る所である。殊に故郷なる伊豫の吉田町に、獨力を以て實科高等女學校を設けて育英に從事し、其の各敎師の母校たる女子職業學校に五千圓を寄附し、又現に各專門學校生徒十五名に學資を給して居るが、その關係は恰かも父子の如き溫かきものがある。山下氏の成功は決して今日に止まるものでないことは勿論、今後に於て、其の眞價は益々發揮せられるであらう。

第四章　獨立自營逆境突破論

第一　澁澤榮一男の獨立自營論

惟ふに獨立自營といふ言葉には二樣の意義があらう。其の一は社會を相手にして考へた場合と、他の一は自己のみを主として考へた場合とである。如何なる場合に於ても依賴心を出すことは善くない。何事にも獨立的精神、自營自治の心を持たなくてはならぬのは勿論である。けれども第一の場合の如く社會國家

獨立自營主義に二意義あり

といふものを向ふに置いて、極端なる獨立自營の心を持つてゆくのは如何いふものであらうか。斯かる場合から推究すると、彼の福澤諭吉先生の唱へられた獨立自尊といふが如きは、或は餘り主觀的に過ぎて居りはせぬかと思ふ。余は『人生觀』中にも論じた如く人は此の世に處するに方り、總て其の心を客觀的に持たなくてはならぬ。主觀的にのみ此の世の中を見るならば、其の人一人の爲にはなるかも知れぬが、遂に國家社會といふものを如何ともすることが出來なくなる。但し人は老若男女の別なく、總て君子賢人ばかりであるとすれば、此の主觀的主義も弊はないであらうが、若し世人が聖賢でなくて自己以外を顧みるの必要はないといふ結論に歸着するならば、所謂『奪はずんば飽かず』といふまでになつて仕舞ふであらう。人心が果して左樣なつたとすれば、その極端なる結果は恩人も忘れ、知人も捨て、愛する者をも去つて恬然たるに至り、遂には反抗、侮辱、罵詈、嫉妬といふやうな有らゆる醜惡なる行爲は遺憾なく羅列されるであらうと思ふ。故に余は、人生に處するの道は單一なる『自我』とか『己』とかばかりではいかぬ、これを客觀的に見ることの安全なるを思ふ者である。即ち自己は出來る限り其の智能を磨き、世に立つて人の世話にならぬは勿論

國家社會の爲に盡すことを主としなくてはならぬものだと思ふ。孔子は『身體髮膚これを父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり。身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯すは孝の終なり』と訓へられて居るが、これも仔細に考察すれば名を後世に揚ぐるは獨り一身の爲のみならず必ず國家社會の爲になるので、矢張客觀的人生觀を意味したものと謂つてよからう。

社會國家と個人の獨立自營

余は客觀的の人生觀を立つるものである、故に獨立自營といふことも主觀的には見度くない、即ち社會に對して自己を見る場合は、何處迄も社會と自己との調和を考へなくてはならぬ。國家社會は如何ならうとも自分さへ利益すればよいとか、自己に有利なる方法の爲には、他人に如何なる損害を與へようとも顧みぬとかいふが如きは余の斷じて與せざる所である。然し乍ら自己の精神、或は社會から全然引き放したる自己に對しては、飽くまで獨立自營の心を養はなくてはならぬ。西哲の金言中に『人は自己の額の汗に依りて生活するものなり』『天は自ら助くるものを助く』などあるのは、極めて短語ではあるが個中の消息を言ひ盡したものだと想ふ。

自分の事は自分でやる覺悟

凡て人たる者が各自に働いて生活を立てるならば、其の人一人の幸福たるのみならず、社會も亦甚だ平和にして幸福なるものとなるであらう。自ら努力奮勉する者に對しては、天も必ず幸福を與へるとは此の意味を謂うたもので、假令天が幸福を與へずとも、斯かる種類の人は自ら幸福を招致するのである。故に人は獨立的精神を持ち、一切の依賴心を放擲し、自營して出るの覺悟を懷くことは、自己一人に取つては缺くべからざる要件であるけれども此の心掛は一寸誤解され易い獨立自營の意味を、『他人の世話にならずに、自分のことは一切自分一人でやつて出よ』といふだけのことに解釋すれば難はないが、動もすればそれを曲解して、獨立自營とは『我あるのみ』とか『天上天下唯我獨尊』とかいふやうに考へ惑ふものもある。どうも日本人の間には斯ういふ思想が有り勝ちのやうに思はれる。西洋の學說にも數百年前には左樣いふ個人思想が有つたとのことで、殊に英國の如き此の個人主義が强く流行した。爾後、漸次にその學說が日本にも傳來したらしい。けれども斯の如きは假令先進國たる西洋の學說でもこれを做ふことは面白くない。東洋人たる吾々は、矢張孔子の『己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す』との旨意に從ふ方が穩當なる行爲であらうと思ふ。況や西洋の學說も現時はこれと同一傾向を帶びて居ると云ふに至つては、尙更道理は玆に存在することを知るに難からぬではないか。

西洋に於る獨立自營の意味

獨立自營に關する說は、西洋に於てすら今日では最早『吾あるのみ』といふ解釋ではなくなつて居る。即ち人たる者は弱い心を出してはいかぬ飽迄他人の世話にならずに獨立獨行せよといふ意味で、社會には自己一人あればよいといふ主義と

は大に相違して居る。換言すれば一身を修むる上には大に心掛けなければならぬといふ訓誡であるが、社會に立つ上に用ひてはならぬことである。更に言ひ換ふれば、自己本位を排しての獨立自營的精神それが何人にも歡迎さるゝ所の行であるのだ。然るに茲に注目すべきことは、動もすれば自己本位とか個人主義でやつた方が、國家社會は敏速なる進歩を見ることが出來ると論ずる者がある意味如何といふに、個人主義ならば個人と個人との競爭が起る、競爭には進歩が伴ふものである。自己本位とても矢張其の通りであるといふのであるが、これは一方の長所ばかり見て短所を忘れた議論だから、余は左樣云ふ説に左袒することは出來ない。社會といふものがあり、國家といふものが成立して居ればこそ、富貴榮達も望まれるのであるけれども、若しこれが全く自己本位のみであるならば、社會の秩序、國家の安寧は攪亂されて、人は相擊ち相爭はねばならぬこととなる。故に社會に交り、國家に盡す上には是非共自己本位を排し、獨立自營を棄てなければならぬと思ふ。

家庭生活に於ける獨立自營

さて孰々獨立自營の意義に就いて考慮するに、何事も自己のことは自己一身に考へこれを處理して出るのが獨立で、又自己の定めたる方針に依つて生活を續けてゆくのが自營であらうと思ふ。然るにこれを今日の家族制度から論ずれば、此の思想は絶對的に家庭なぞに行ふことは出來ない樣に思はれる。如何となれば其の家族中、小供等が各自に獨立自營の觀念を抱き、親の世話にはならぬ、自分の事は自分に處してゆくといふ風になるならば一家の中で家長の命令が利かなくなる。家長の命令の行はれぬ時は、即ち家族制度破壞の時ではないか。此の意味から推考するに、日本の風習としては、其の子供が學校を出る頃までは家長が萬事指圖をするのが當然だと思ふ。其の指圖といふても、學才と資力と乃至境遇とに因つて相違あることは勿論であるが、現代の有樣では學校を出た後に初めて世に立つ考を起すのが普通である、先づそれ迄は家長の指圖は免れぬ所であらう。日本人の獨立自治はそれから後のことでよい。惟ふに西洋でも小供時代は矢張日本と同一であらうが、日本人は妻子を持つやうになつてからも親と同棲する風習があるから、惡くすると依賴心が失せ切らぬやうなこともある。それは西洋人と全く反對の現象である。故に日本人は、殊に一人前して世に處する時代に到達したら、親や近親の保護の有無に拘らず、獨立自營の觀念を抱くことに心掛くることが肝要である。

時代の進歩と獨立自營主義

由來東洋の習慣として、王者が國を治むる如く、家長は其の一族を治めて居る。此處は自治獨立的精神の旺盛なる西洋人に比して大に相違ある點で、此の因習の久しき遂に東洋人をして他に依賴するの觀念を多からしむるに至つたと思ふ、彼の福澤先生が獨立自尊の説を唱へて以來、獨立心とか自營心とかいふものが日本人の口の端に上ることが多くなつたが、慧眼なる福澤先生が早くより此の思想を日本へ輸入して、舊來の惡習慣を矯

めんとしたのは、蓋し時に取つての好手段であつたに相違ない。但し其の手段は善かつたに相違ないけれども、福澤先生の說には未だ飽き足らざる者があつた。先生の說は彼の西洋の自由思想、個人主義を日本へ傳へたるものであつたから東洋舊來の陋習を革新する爲には効果が有つたに相違ないけれども、其の餘弊無きをも保せぬと思ふ。併し今日行はるゝ獨立自營の思想は其の時代のものより大に進歩して居るから、前段縷說せるが如き邪路に入ることなしに、其の缺陷は明かに改め得らるることゝ思ふ。

獨立自營の精神が自己一人に取つて必要なることは、上述せる所に由つて充分に了解されたことゝ思ふ。若し民は聖主賢君の治に依賴して自ら奮勵することを忘れ、子弟は家長の誘導敎育に一任して自己の本分を盡すことを閑却に附するならば、自然と各自が智を磨く必要も無くなり其の働を減ずるやうになる。それでは人たるの本分に反く故に子弟は或る年齡時期に達するまで親の補助を受けても、それから先は何處迄も自己を立て通す心掛即ち獨立自營の精神を懷かねばならぬ。彼の他人の力に縋るが如きは自己を失ふの甚だしきものであるから、人は如何にもして他人の厄介にならぬだけの觀念を持たねばならぬ。論語を通覽するに、東洋の習慣に獨立自營といふが如きことの薄かつた爲か、的確にそれに對する敎訓は殆どないが、人に依賴して其の助力を得ることは惡い者との意味は述べてある。『君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す』なぞとあつて、自己の事を行ふに飽くまで勉強しなくてはならぬとの意味を訓へたことは、他にも其の例が澤山にある。けれども『獨立自營』といふ意味を主として說いたものは一つもない。大學なぞも治める者の方のことばかり叮嚀に述べてあつて、被治者の方のことを云ふて無いのは、矢張東洋人の依賴心の依つて來た所以を窺ふの資料とも言つてよからうか。併し舊來の敎訓中に其のことが有るにせよ無いにせよ今日の時代から見れば、己一身に取つての獨立自營は大に必要である。自己に弱い心を出し、他人に依賴せんとする心を矯める爲には、最も都合よき敎訓であると思ふ。二十世紀の東洋人は宜しく此の新意義の敎訓を、其の道德中に加へ、以て其行の完からんことを期せられ度い。

第二　福澤諭吉翁の獨立自尊主義論

衣食住は人生獨立の根底也

人には自重自尊の心がなければならぬ。即ち自分には是れ丈の智德を備へて世にも愧かしからざる故に自分の身は尊きものなりと自ら信じ重ずるの趣意で獨立心の由て生ずる本源なれば、百般の人事に通じて須臾も離るべからざる一大義である。然れども獨立の心を抱きながら獨立する所以の方便を得ざれば、其心常に淋しくして、人生の苦痛これより大なるはない。何を獨立の方便と云ふかといへば、衣食住のもの即ち是である。天道は人を殺さず、正直に勉強さへすれば世を渡ること易しといふけれども

又一方より見れば利を好むは古今普通の人情にして萬人が萬人恰かも申合せたるが如く、苟も利の在る所に群集する、其群集の中に割込みて、吾れも亦共に一部分の利を求めんとす、之を名づけて競爭といふ。至極殺風景にして君子の心に樂しからざる次第なれども、左りとて衣食は天より降らず地より湧かず木石ならざる身を以て家に居り世に處し他人の厄介を免れて獨立の義を全うせんには此競爭場裡に營々辛苦せなければならぬ。人間の行路また難しといふ可しだ。左れば此の獨立心をして眞に獨立の實を得せしむるものは有形の財物で、此の財物を得るの法は極めて艱難なりといへば之を得んことを勉むると同時に之を費すの法に就ても亦考ふる所なければならぬ。是に於てか、客嗇と儉約と二者の區別如何の問題を生ずる。慈悲の情に乏しく廉耻の心を失ひ道理の界を逸して財を貪るものを客と名づけ、一身一家の生計を密にして外面の邊幅を張らざるものを儉と云ふ。誠に簡單明白なる區別にして苟も士君子の心あらんには客ならんと欲するも得べからざる次第なれば、

體面維持も分相應にすべし

獨立の主義を完うせんとならば、客嗇を避くると共に節儉の旨を忘れてはならぬ。家計を綿密にして省くべきの浪費を省くは錢を客しむのではない。獨立の根本を厚くする爲めである。

一夕の豪遊に千金を抛ち、冠婚葬祭の式に外觀を張り、以て鄕黨朋友の耳目を驚かす如き愉快は、即ち愉快にして家計の許す限りは此種の愉快を買ふも亦人情の當然である。けれども家の裡面の不如意を包んで分外の財を散じ、或は前途の實際に望む可らざる望を空想して未得の錢を既得に數へ暫時の融通と稱して、他人の金を借用し、其理由を問へば、一身一家の體面を維持する爲めに止むを得ざるの費用なりと云ふが如きは、その理由とするに足らざるものである。思ふに體面維持とは不外聞を避くるの義にして不外聞とは世間の風聞に傳へて面白からずとの意味ならんなれども、斯く無理なる散財し無理なる借用して、鄕黨朋友の耳目を欺きながら後日に至り、其の朋友に相談して哀を乞ひ、借用の返濟を促がされて申譯に窮するが如き、不外聞の大なるものではないか、元來富豪大家の人々が大に散財して、間接直接に世の中を賑はすは、誠に願はしき事ではあるけれども內實の小身者にてありながら、大家を學ばんとして學び得ざれば即ち不外聞と稱し、世間の風聞如何を恐れて、分外の無理を犯すが如きは、自信自重の大義を忘るゝもので風聞の奴隷と云ふべきである。滔々たる凡俗世界を眺むるに、彼の少年書生輩が、兎角金錢を濫用して人に厭はれ、又は政府の官吏實業界の紳士と稱する輩が、家計不取締の慘狀に陷りて、終身節を屈し、心にも思はぬ事を行ふて、竊に不愉快を嘆ずる者多きも、本はと云へば、人生獨立の實手段を等閑に附し、浮世の小不外聞を恐れて一身の大不外聞を忘れたるが故である。處世の勇氣に乏しき奴輩と云ふべきものである。

獨立自尊主義の修身要領

凡そ人は何人と雖も、自主自立即ち獨立自存を目的とせなければならぬ

獨立自存とは心身の獨立を全うし自ら其身を尊重して人の人たる品位を辱しめざることを謂ふもので、余の所謂『獨立自尊』と稱するものである。（編者曰く、茲には彼の有名なる福澤翁の所謂『獨立自尊主義の修身要領』なるものを掲げて其の獨立自尊主義の說明に代ふ）

□獨立自尊主義の修身要領（福澤諭吉翁述）

(一) 人は人たる品位を進め智德を研き益々其光輝を發揚するを以て本分と爲さゝる可からず、我邦の男女は獨立自尊主義を以て修身處世の要領と爲し之を服膺して人たる本分を全うす可きなり。

(二) 心身の獨立を全うして自ら其身を尊重して人の人たる品位を辱しめざるもの之を獨立自尊の人と云ふ

(三) 自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は自勞自活の人たらざる可からず。

(四) 身體を大切にし健康を保つは人間生々の道に缺く可からざるの要務なり、常に心身を快活にして苟めにも健康を害するの不養生を戒む可し。

(五) 天壽を全うするは人の本分を盡すものなり、原因事情の如何を問はず自ら生命を害するは獨立自尊の旨に反する背理卑怯の行爲にして最も戒む可き所なり。

(六) 敢爲、活潑、敢忍、不屈の精神を以てするに非ざれば獨立自尊の主義を實にするを得ず、人は進取確守の勇氣を缺く可らず。

(七) 獨立自尊の人は一身の進退方向を他に依賴せずして自ら思慮判斷するの智力を具へざる可からず。

(八) 男尊女卑は野蠻の陋習なり、文明の男女は同等同位互に相敬愛して各その獨立自尊を全たからしむ可し。

(九) 結婚は人生の重大事なれば配偶の撰擇は最も愼重ならざる可らず、一夫一婦終身同室相敬愛して互に獨立自尊を犯さゞるは人倫の始なり。

(一〇) 一夫一婦の間に生まるゝ子女は其父母の他に父母なく其子女は他に子女なし、親子の愛は眞純の親愛にして之を傷けざるは一家幸福の基なり。

(一一) 子女も亦獨立自尊の人なれ共、其幼時に在ては父母これが教養の責に任ぜざる可からず。子女たるものは父母の訓誨に從て孜々勉强成長の後獨立自尊の男女として世に立つの素養を成す可きものなり。

(一二) 獨立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも、自から學問を勉め知識を開發し德性を修養するの心掛を怠る可からず。

(一三) 一家より數家次第に相集りて社會の組織を成す、健全なる社會の基は一人一家の獨立自尊に在りと知る可し。

(一四) 社會共存の道は人々自から權利を護り幸福を求むると同時に、他人の權利幸福を自尊して、苟も之を犯すことなく以て自他の獨立自尊を傷けざるに在り。

(一五) 怨を構へ仇を報ずるは野蠻の陋習にして卑劣の行爲なり、恥辱を雪き名譽を全うするは須らく公明の手段を擇む可し

(一六) 人は自から從事する所の業務に忠實ならざる可からず、其大小輕重に論なく、苟くも責任を怠るものは獨立自尊の人に非ざるなり。

(一七) 人に交るには信を以てす可し、己れ人を信じて人も亦己れを信ず、人々相信して始めて自他の獨立自尊を實にするを得べし。

(一八) 禮儀作法は敬愛の意を表する人間交際上の要具なれば苟めにも之を怠にす可からず、只その過不及なきを要するのみ。

(一九) 己れを愛するの情を擴めて他人に及ぼし其疾苦を輕減し其福利を增進して人間の美德なり。

(二〇) 博愛の情は同類の人間に對するに止まる可からず、禽獸を虐待し又は無益の殺生を爲すが如きは人の戒む可き所なり。

(二一) 文藝の嗜みは人の品性を高くし精神を娛ましめ之を大にすれば社會の平和を助け人生の幸福を增すものなれば亦是れ人間要務の一なりと知る可し。

(二二) 國あれば必ず政府あり、政府は政令を行ひ軍備を設け、一國男女を保護して其身體、生命、財產、名譽、自由を侵害せしめざるを爲す、是を以て國民は軍事に服し國費を負擔するの義務あり。

(二三) 軍事に服し國費を負擔すれば國の立法に參與し國費の用途を監督するは國民の權利にして又其義務なり。

(二四) 日本國民は男女を問はず國の獨立自尊を維持するが爲めに生命財產を賭して敵國と戰ふの義務あるを忘る可からず。

(二五) 國法に遵奉するは國民たるものゝ義務なり、單に之を遵奉するに止まらず進で其執行を幫助し社會の秩序安寧を維持するの義務あるものとす。

(二六) 地球上立國の數少なからずして各々其宗教言語習俗を殊にすと雖も其國人は等しく是れ同類の人間なれば之と交るには苟も輕重厚薄の別ある可からず、獨り自から尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するものなり。

(二七) 吾々今代の人民は先代前人より繼承したる社會の文明福利を增進して之を子孫後世に傳ふるの義務を盡さゞる可からず。

(二八) 人の世に生まるゝ智愚强弱の差なきを得ず、智强の數を增し愚弱の數を減ずるは教育の力にあり、教育は即ち人に獨立自尊の道を教へて之を躬行實踐するの工風を啓くものなり。

(二九) 吾黨の男女は自から此要領を服膺するのみならず、廣く之を社會一般に及ぼし天下萬衆と共に相率ゐて幸福の域に進むを期するものなり。

人間の天職と幸不幸の岐路

人々がこの世に處するに就て、その一生を幸福に暮らすか、不幸に暮すかの岐るゝ所以を考ふるに、たゞ一言にしてこれを盡し得る。人間の一般理想と、その人の個人性と、その境遇とが相合する所に身を處したる人の生涯は必ず幸福である。之に反して、その人の職業と理想と慾望とのこの三者が相合せざる人の生涯は必ず不幸である。人生に艱難苦痛の多い事は、畢竟、この三者の一致したる所に身を處することを過まつたもの〻多いといふ事に歸着する。

一体人間の本性は社會的のものであつて、夢の如くに生活し、夢の如くに消えて行くことは斷じて人生の意義ではない。何等かの痕跡をこの世に留むべき天職を以て生れて居る。切言すれば天の我を生せし所以のものは決して偶然ではない。必ず社會有用の人物となつて何等かの貢献をなすべき天職を載いて生れて居る。故に『我は如何なる痕跡をこの世に留むべきか』と各自に我身を振り顧つて見れば、何人にも特種の天職は必ずある。その人の趣味・或はその特長は即ち、その人が社會に貢献すべき大なる天職の暗示に外ならぬ。故にその趣味、特長の向ふ所に從つて切瑳砥厲すれば、如何なる人でも痕跡を此の世に留むる所の大なる天職を完うする事が出來る、これ我が此の世に生存する當然の任務ではないか。

毅然たる自營自任の見識

この道理が分れば、やがて何人にも毅然として自營自任の見識が起る。自ら抑制し奮勵する克己の念、遂げずんば止まざる剛毅の氣性が湧いて來る。如何なる艱苦も障碍も毫も苦痛と感じないのみならず、刻苦そのものが愉快になつて來る。故に其人の生涯はその境遇の如何を論せず幸福である。若し之に反した場合には、その境遇の如何に拘はらずその生涯は苦痛でなければならん。

元來予の性質として、唯だ自分の力を信賴して獨立獨行し、世に媚びず、己れを曲げず、善良なる國民として正しく社會に起ち、自己の意見を恃立して之を發表し實行する事が最も愉快を感ずるところであつて、己れを曲げて人に屈從する事は生來の短處である。故に予の最初の志望は儒者、殊に筆や言論を以て天下の事を横議する所の儒者として身を立てたいといふ考であつた。所が封建の制度は頽れて世態は變り、從つて考も色々變つたが、今日衆議院議員の職をもつて專ら言論を以て世に處するに快味を感ずるのは、蓋し予の如き性格のものに頗る當を得たるものある爲めと思ふ

幕末士族の生活難母の苦心

予の家は代々舊幕の旗本で、予の生れた頃は天下尚ほ未だ泰平無事、四海波穩かな時であつたが、然るにその當時江戸士族の生活狀態の慘憺たる事は實に酷いものであつた。何れも聊かの扶持を貰つて生計を立てゝ

居たものであるが、その扶持と云ふのが、德川初期に當てがはれたまゝを襲いたものであるから、次第に物價騰貴して來た幕末に到つては、滔々たる士族が生活難に苦められたのも、蓋し當然の事と云はねばならぬ。

今日ならば如何に薄給者でも、その妻が煙草屋を營んで家賃を補ふとか、筆墨雜貨を商うて米代をとると云ふ便法もあるが、その當時では士族が商人を輕蔑する事は實に甚だしかつたから、いかに饑餓するも內職に商賣は出來ない、器用な士族は武藝又は文事を以て青年子弟に敎へて、その謝儀を以て生計の足しとしたけれども、それの出來ないものは、止むを得ず傘を張るか提灯を張るかして辛ふじて饑餓を凌いだ。幕府の旗本も、大名の臣下も、一人として傘提灯の內職をしない者はない位であつたが、この一事によつて當時の士族の生活難の一班を察する事が出來やう。

予の一家もまた同樣にこの生活難に困められた。祿は僅かに二十俵の二人扶持、辛ふじて夫婦暮しの收入で一家六人の生計を立てなければならなかつた。けれども予の母が身體も丈夫であつたが元來が男優りの氣性で、骨身も惜まず働いて吾等四人の兄弟を育てあげられた。凡て子供の時にみじめな生活業をとらするのは、その天眞の性情を完うせしむる所以でないといふのが母の主義であつて、自身には弊衣粗食を極め、晝夜もいとはず傘も張り、提灯も張り、その上工賃洗濯などして一家の生計を立てる事に力めたもので、我々兄弟の者に內職の手傳を命ずるやうな事は決してなかつたのみならず、日々四人の兄弟に髮を結ひ袴を着けさして、道場または學塾に通學せしめられた。

一家の流離と余の立志奮起

武藝か學問か、二つの道のいづれかを選んで身を立つるのが、當時士族の一般の習ひであつたが、予の兄は武の方をとつた。予は學問の方を以て起たんと志し、水戸學派の碩儒芳野金陵氏の門に入つて專ら漢籍を學んだ、予が十六歲の時德川幕府は瓦解した。一家の扶持も奪ひ上げられ、剩え薩長の橫暴甚だしく幕臣は擧げて逆賊の汚名を蒙つて、終に一家流離の悲慘に陷るに至つた。予は憤懣に堪えず、慨然敗軍の汚名を雪がんと決心し、一家流離の窮厄を顧みず沼津の兵學校に入つた。この兵學校は幕府の遺臣のみの集つたもので、專ら武を錬り學を勵み、他日大いに成すところあらんと誓つた志士の一團であつた。

然るに時勢は刻々に變轉して、維新の大業は潮の如く澎湃として進む。終に慷慨悲憤の志士も恨を呑んで大勢と共に移らざるを得なくなつた。茲に於てか予は飄然として東京に出て來た。化學者にならうと云ふ目的をもつて大學南校に入つた。この時の考は國家の文明は化學の進步に倚らなければならぬと云ふので、專ら化學を修めた、けれども更に海外留學を思ひ立つて、資金を作る爲に橫濱に行つた。橫濱に於て暫らく每日新聞社の飜譯係を務めたが、之れ予が橫濱に身を據えるに至る抑もの因緣となつた。

古の英雄豪傑を思ふて奮勵

一家流離の悲慘に陷つて以來、沼津の兵學校に居る時もまた東京に出て來て大學南校に居る時も、隨分酷い境遇にあつた。けれども余は如何なる艱難に居る場合にも、常に古の英雄豪傑の閲歷を思ひ合はして、それに依つてすべての苦痛を我慢した、近くは平田篤胤、高野長英、蒲生君平などの生涯、殊に予をして感奮激勵する手本とはなつた。自分が現在苦しみ惱んで居る時に、より多くの艱難に堪へ、一層激しい迫害を凌いで行つた賢哲偉人の行跡を考ふれば何んな勇氣も起る、何んな辛抱も出來る。故に予は今日までに色々な逆運にも出遭つたけれどもその爲めに失望するとか、行き詰つたといふ感じを抱いて、世の中を悲觀する如き事は斷じてなかつた。

一体我々が社會に生存して居る以上は、社會の爲めに己の最善をつくすのが當然の務めであつて、社會はまたそれに對して相當の報酬を捧ぐる事が至當である。個人と社會とが斯くの如くに持ち合つて行つて茲に初めて幸福と平和と進歩とを期する事が出來る、然るに世には往々耕さず紡むがず而かも安樂に一生を送る者がある。世間では之れを仕合せな人と云つて居るが實は世の厄介物に過ぎない。又少し働いて多くの幸福を得るものがある。之れも世間では仕合せものといつてゐるけれども、實は同じく厄介物といはなくてはならない。働いたゝけの報酬を得て、それに依つて生涯を送る事が當然であつて、それが普通の人間の世渡りである。所が大いに働いて唯だ僅かな報酬を得て一生を終はるものがある。或は少しの報酬も得ず却つて非常な迫害を蒙つて一生を終はるものがある。賢哲偉人の生涯が多くは之れである。

見よ、すべて世間の多くの紛紜は一つとして報酬論より起つて居ないものはないではないか。自分が働いたゝけの報酬を得る人とか、或は少く働いて多くの報酬を得やうとするとか、是等報酬の如何が因となつて有ゆる紛紜は起つて居るけれども、古の賢哲偉人がその一生を通じて社會人類の爲に非常な辛慘苦闘を嘗め盡したにもかゝはらず、社會はそれに對して、何等の報酬をしないばかりでなく、却つて之を虐待し、迫害を加へる。然るに賢哲偉人はそれに對して毫も不平を鳴らさず、苦痛を叫ばず、その迫害に甘んじて一生を送つた事を考へ合すれば、我々が聊かの勞力に對して多少報酬が足りないからと云つて、不平など云はるべきでない。況んや少く働いて多くの報酬を貪らうといふが如き淺ましい了簡が何うして起さるゝか。

予は常にこの考へを以て有ゆる苦境に處して來た。故に予の爲に闇黑に向つて光明を投げ込んで與れるものは古英雄の傳記である。今日でも予は好んで歴史を讀む。宛も藝術を好む人が、その美に接して激しく打たるゝ如く、予は古來の英雄傳を讀んでその偉大なる人格に接する毎に激しく感動させらるゝ。殊に希臘羅馬の古英雄又は史記などに現はれた偉人物の事績、それが各々社會の上に如何なる原因結果の關係を持つてゐるかに就て靜かに觀察する時などは、一種敬虔の念に打たれて

得も云はれぬ快感を覺えるのである。

第四　藤山雷太氏の一貫主義說

青年の最快事
長崎土地問題

予は元來政治家になるつもりで慶應義塾に入つて居つた。之を卒業して間もなく鄕里に歸つて縣會議員になり、副議長に推薦せられた。之れが丁度明治二十二年、二十三の歳である。此の時に予は、その當時の自分の心に非常に愉快と思つた事を遣つた。その後予は實業界に這入つて、始終波瀾の中にばかり頭を突込んで來たものだから、何時も〳〵苦鬪つゞきで、之れは愉快だと思ふやうな事に出會つた事はないが、唯その當時長崎居留地の爲めに骨を折つて、都合善く遣りとげた事ばかりは、實に空前の愉快を感じた。

と云ふのは恁ういふ次第である。長崎居留地は、幕府時代に外人と取り結んだ制度を、維新後も其儘に踏襲して居たので、非常な不都合を感じて居た。土地所有權の如きも、事實上の權利は外人に握られて居る。即ち百年間とか、或は無期間の貸渡しになつて居て、外國人同志は貸借を自由にやつて居るが、所有主はそれに何とも手がつけられない。地租等段々高くなつて來て、迚も地代と引合はないから、地代を上げやうと交渉しても人は到底聽き入れて呉れない、折角土地を持ちながら、所有主にはその地面を使ふ事も出來ず、然らば外に賣らうとしても地代と地租とが引合はないから誰も買ひ手はなし、この爲に、地主は實に一方ならず困つて居た。そこで地代を引き上ぐるか所有權を回復するか、政府に買ひ上げて貰ふか、此の三問題に就て色々と交渉を重ねたものであるが、誰れが遣つて見ても成功しない。鳩山さんが初めて辯護士となつた時にも、餘程骨を折つたけれども何れも成功しない。それを予が到々立派に遣り上げたのであるから、實に言ふにいはれぬ愉快を感じたと云ふ次第である。

予はその交渉總代に選ばれて東京に來た。先づ外務省と交渉を開いて、この地所は政府で買ひ上ぐべきものだと主張した。時の大臣が大隈伯で、幸に鳩山さんが取り調べ局長で善く事情が分つて居たから、非常に都合が良い。到頭政府で買ひ上げやうといふ事に成りは成つたが、金がないから當分は六ケ敷いとの話。けれども物はやりかゝつた時にやつて仕舞ゝて置かなくては、どういふ變事の起らぬとも限らぬから、何とか方法が立たぬ物かと思つて居るうちに、丁度宜い事には、米國から維新前に馬關砲擊の事件で取つて居つた償金を返へして來た。その金額は七十萬圓ばかりで、その條件として、成るべく外國の便利になること、居留地の施設を完備する事の爲めに使つて貰ひたいと云ふことである。之はモツケの幸だといつて、直ちに其の金の中から六十萬圓程出して貰つて、とう〳〵居留地全部を買ひ上げて貰つた。

若しその時に自分で一儲けをしやうといふ野心があれば蔭で手を廻はしてこの居留地の幾分でも買ひ占めて置けば十萬二十萬一つかみにする事は何でもない事であつたが、そんな野心は亳頭なく、唯だ郷里の人に喜ばるゝが嬉しい一心で早速その金を受取つて長崎に歸つた。果して予を迎ひに五十幾人の地主の喜びは非常なもので、とても浮ぶ目途はないと斷念して居つたものがマンマと復活したものだから、予はこの人等から非常な感謝を受けた、まだ二十三歳の年で、何の經驗もない丸で初陣の身で、恁んな面倒な事件を遣り遂げたのだから、衷心實に愉快を感じたのであつた。

職工の大反抗と大改革斷行

この翌年が國會開設で、予が年來の志望は政治家であるから此の國會には是非代議士となつて出やうといふ目算であつた。所が如何せん、年がまだ二十三で代議士となる資格がない。殘念でたまらないが仕方がないそれから予は縣會議員のまゝ東京に出て來て居つた。之れと云ふ仕事もせずにぶら〳〵してゐる矢先き、丁度中上川彦次郎君が『君も縣會議員では仕方があるまい、いつそ今から實業界に入つて働いて見ないか』と勸められたので、予は愈々實業界に入る氣を起したのである。

此の時三井銀行に抵當課を新設したので、予はその課長に招かれた。所がその整理の結果、芝浦製作所が三井のものになつて、予は新たにその方を受け持つ事になつた。以前芝浦製作所は、主に海軍省の御用を務めて居つたが、予は之を電氣工場に一變せしむる考で、内部の規則や職工技師等の手當の方法までもスッカリ改革した、所が大變なストライキが起つた。職工、技師、職員、全部六百餘人のものが非常な勢で反抗を起した。それといふのは色々な事情があつて、第一は舊主人に對する情誼が基となつて居る。尚ほその他には、規則改正の結果、姑息の手段は斷然と禁じて、すべて公正主義をとる事を標榜した、例へば今迄の職員などは給金が少い割合には隠金が多い、新規則では給金は一體に多くしたけれどもそんな不正な事は一切嚴禁した。斯樣な事情が基となつて、遂に大ストライキを起したのであるが、けれども遣りかゝつた事は中途で退かぬのが余の主義であるから、此の大ストライキに對つて飽くまでも改革を斷行した。無能なる者は如何なる地位に居つても、遠慮なくドシ〳〵免職さして、その代り手腕のあるものは、十分用ゐる方針をとつて、非常な意氣込で到頭きまりをつけた。

電車創業と當時の紛紜事情

予は其の後東京市内に電氣鐵道を布かうといふ考を起して、まだ福澤先生が達者な時であつたから、直ぐに芝浦製作所の技師長垣田傳五郎君、福澤捨次郎君と、自分と三人連名の上で出願した。それが明治二十五年の事であつた。

『やらう』といふ意見であつたから、予の考では芝浦製作所の方で、その機械は全部引き受けて、雙方立派に遣りとぐるつもりであつた。所が兩宮さんが同時に同じ願書を出して居られる。暫くして星亨君の方からも亦一通出した。同じ

願書が同時に三通出て居る譯である。丁度樺山さんが內務大臣の時で、何れに許可しやうもなく暫くごたついたが、到頭後に星さんが遞信大臣になつたものだから。三派合同で、兩宮さんが社長自分が專務取締役で成立したのが前の市街鐵道である。

所が後に品川上野間の馬車鐵道が電氣鐵道に變る事になつて、交通整理の必要上、之れと市街鐵道を合併しやうと云ふ議論が起つた。內務大臣が兒玉さんで府知事の千家さんと澁澤さんと立會の上兩社合併の相談があつた、その時予の意見では條件次第では合併しても宜いといふので、牟田口、中野兩氏も異議はない。唯だ兩宮さんが時機尙早非合併說で、之れから議論が分れて、合併するといふ、せぬといふ非常なさわぎになつた。その果ては今日の鐵道會社であるけれども、之れになるまでには一通りの混亂ではなかつた。

予が難事に當る一貫の主義

尙ほこの事件の前後、予の關係したる難關は色々あるが、多くは改革事件に當つたから面倒な事や紛亂の間を始終通つて來た。而してこれらの實驗より得たること、及び之等の事件に處する予が一貫の精神を云へば、人は何事に當るも薄志弱行が一番いけない、一個の信念の出來るまでは、大いに考慮を廻らし大いに躊躇し、人の意見もなるべく廣く聽くやうにしなければならないが、その結果一度決心が据つて遣りかゝつた以上は、世間から何といはれやうと、如何なる障碍が降りかゝつて來やうと、一切構はずに斷々乎として決行しなくてはならんと思ふ。世間には往々にして、事は成るべく圓滿主義でやれ、成るべく言ひ度い事も言はずに不得要領主義が却つて事を遲する捷徑ぢやといふ人もあるが、予はこれには贊成が出來ない。世に立つ以上には敵も出來るだらう。障碍も起るであらう。一度事に當つて遂行せんとするならば、其敵や障碍に向つて突進する覺悟と勇氣がなくてはならぬ。予は未だ過去を語る身分ではないけれども、今日までの經驗でいへば、事にあたるにはこの方法が一番可い。圓滿主義曖昧主義は蓋し現代の弊ではないかと思ふのである。唯だ明瞭なる思考力と、眞實なる意志と奮鬪の勇氣とが事に當たるものゝ唯一の資格であつて、大事をなさんとするものはこれでなくては駄目だと確信して居る。

第五章　現代名士の逆境突破振

第一　森村市左衛門男の逆境時代

赤裸一貫から叩上た奮鬪者

男爵森村市左衛門翁は赤裸一貫から叩きあげた奮鬪力戰の人である。その家は代々武器や馬具や袋物などを商ふ一商店で、今の京橋の大根河岸に住んでゐたが、翁が十三歳の時、先づ家を出て或る商家に丁稚奉公にやられたけれども、十六歳の時、病氣になつて再び家に歸り父の業を勵むことになつた、森村翁と

云へば、我が海外貿易界の元勳で、混沌時代の卒先者であることは何人も知る所であるが、如何にして此人がその馬具商から一轉して貿易商になつたか、之には面白い話がある。それは嘉永年間のこと、彼の米艦の渡來に對し幕府は始めて使節を米國に遣はすことになつた。その選に當つた人は新見豐前守といふ人で、かねて翁の嚴父と懇意なところから一切の調度は悉く翁の家に命ぜられたその中には日本の貨幣は米國に通用せぬといふので、幕府の御金藏より小判や一分銀を取出して横濱に運搬し、そこで亞米利加が一兩で引換へたのであるが、翁は亦嚴父と共にその實況を知つて、その黄金を以て粗惡なメキシコ銀貨と交換する實狀を目擊するに到つて、衷心慨然たらざるを得なかつたのである。かくの如くして國家唯一の財寶をドシ〳〵外國へ流出せしむるやうでは、日本の前途も甚だ覺束ないと思つたのである。之が抑々翁をして外國直取引を思ひ立たしめた最初の動機であつた。

然るに當時翁の家は武器馬具の御用の關係から土州家の庇陰を蒙むること厚く、自然翁は同藩の先輩細川潤次郎や乾退助（今の板垣伯）などに近接する機會を得、西洋の事情や世界の大勢をきくことが出來たので、益々海外貿易の希望を起してゐた矢先、曩に使節として米國へ行つた新見といふ人が歸つて來、此人から更に委しく聞くに及んで、最早神飛び肉躍るの感、いよ〳〵怠らなくなつたのであつた。

彼は我國外國貿易の卒先者

れ、自分にも、福澤翁は勿論、苟も外國の事情に通ずる人なれば、力めて訪うてその談話を聞くやうにしてゐた。而して又一方家業の武器馬具に就いても、他人の追隨し得ぬ熱心を持つて居た。それ故。幕府の末、造兵式改革の際、幕府は外國人を聘して之に當らしめたが、翁はかねて馬鞍改良に就て意見を持つてゐたので、一日騎兵奉行の深尾某を訪ひ、

『凡そ兵器は皆自國に於いて製造するを要す。一旦事あるに際して緩急の用に應ずる能はざればなり、今や我れに騎兵の制あり、豈馬鞍の製造もなからざるべからず、されどわが從來の馬具にては到底實用に適すべからず。余に聊か腹案あり、幸に採用あらば、余は喜んで其任に當るべし』

と献言した。後首尾よく採用されたので、それから翁は苦心の結果、一の新發明馬鞍を作つた。蓋し之が洋式騎兵馬鞍の嚆矢であつた。

外國貿易の手始と翁の奮闘

平常福澤翁に就いて文明開化の理義を聞いても居り、且つ元來負けん氣の氣象で、何事に就いても他力を頼まぬといふのが翁が處世の第一方針であつただから御用商人的の營業は心中甚だ屑しとせず、機會だにあら

ば斷然廢止せんと決心して居たが、其の内に胸中燃ゆるが如き海外貿易の準備も畧々整うたところで愈々之を斷行することにした、それは明治七年である。實弟豐氏は福澤塾を卒業したので、翁はその翌年を以て豐氏を米國に遣り、同地の商業學校に學ばしめ、その卒業を俟つて、初めて紐育に一小店を開き、雜貨輸出の業を營むことになつたけれども、未だ資本薄弱にして萬事意の如くならず、翁は自ら草鞋脚絆で各產地に到り仕入れに孳々汲々とし、一方には外國向きに何がよいかを察し、職工を督勵しつゝ雜貨の改良を計り、眞に苦心慘憺たるものである。

今にその當時の雜談話しが出る。阪地で仕入れの折などは、天秤棒に大風呂敷を肩にして市中を叫すり廻り、貨物が集まればその風呂敷へ包み擔いで宿屋へ戻り、今度は自ら之を荷造りし、又自ら車を推して埠頭に到り、更に自ら船積み迄して、之を米國へ送つたものである。今は名古屋の森村組製產部を紐帶してゐる大倉孫兵衛氏なども、當時翁と難義を共にした人で、貨物を乘せた大八車の前後を兩人で推し挽き、泌汗を流し乍ら新橋驛へ運んだなど、思ひ出せば夢の如く、到底今人の想像も行かぬ力戰苦鬪をして來たのである。

開業當時の惡戰苦鬪と勝利

京橋袂で馬具の商であつた素町人の生れであるが、精神は立派なもので凜乎として拔くべからざる自信の中に、國家といふ心念が籠つてゐるので、遣ることなすこと一點の虛僞がない、之が他の學ぶことの出來ぬ翁の特色で、今日の大業を成した所以である。

翁が正直一點張に闘しては、種々の面白い話しもあるが、それは畧し、兎に角翁が最初に海外貿易を初めた頃は今日の如き運輸、銀行、通信等の機關もなく、小資本でやるには非常に困難な時であつた。明治十三年頃からはボツ〳〵同業者も現はれ來たが、如何にも資本に困るところから、彼等は政府から保護金數十萬圓を仰ぐことにした。然るに彼等は之を賴んで輸出品の善惡、向き不向きを問はず、資金に任せて見込も立たぬ貨物をドシ〳〵濫出したので、果てはその始末方にも窮し競賣するやうな結果に終つた、その結果は當然市場を攪亂することになり、同業者一般に多大の大迷惑を來した。此際にも翁は元來の獨立獨行を楯として毫も保護を請はず、奮闘刻苦、倒れて後止むの決心を以て進んだが、一時は實に孤城落日、今にも閉店すべき悲境に陷つたのである。而もその萬難を排して蹈み止まつた大勇氣、大忍耐に到つては眞に敬服するに足るものがある。

北條早雲の機略を商略とす

翁が人を使ふの道も亦頗る敬服すべきるので、かの北條早雲が曾つて侍臣をして孫吳の兵書を講せしめ、『英雄の心を繫ぐに在り』といふに到るや、ハタと掌を拍ち、もう宜しいと大悟する所あり、之から國を取り城を奪ふ毎に、悉く之を將士に頒ち與へたので、當時戰國の猛將勇士は雲の如く早雲の配下に集まつたといふことであるが、森村翁が史を繙くごとに、いつでも深く感するのは此一節であつた、『余は

城を奪ひ國を取るんではないが、利益があつたならば、悉く之を平等に配下に分配しやう』といふ堅い決心は之に依つて釀された。之が翁の一生を支配する商略上唯一の秘訣で、之に依つて配下を御し、互に協心戮力殆んど一家の如き關係を保ち、所謂共和的家風を作り成したのである。即ち翁は『英雄の心を繋ぐにあり』の筆法を『配下の心を繋ぐにあり』に應用し、儲ければ儲けるに從つて之を配下に分配したのである。森村組であれ、森村銀行であれ、頭取は頭取、支配人は支配人、事務員は事務員と、それ〴〵割據的風が少しもないのは、之が爲である。

翁はまた平生通勤番頭の留守宅を訪問し其お袋や女房に向ひ『お前さんの内の人の御蔭で店も漸々繁昌する樣になりました。』と慇懃に挨拶し、且つ心付をもして歸るといふ風である。それで奉公人は皆その恩に感じて、寢るにも御主人の方へは足を向けぬといふ風になつた。西南の役に店の爲に非常な働きをした番頭があつたが、若い中の事として酒のために終に命を失つた。翁もそれまでは隨分酒を飲んだが、之を見て大いに悟ると同時に、その遺族を引取り、子供は慶應義塾内の幼稚舍に入れ一家の生計總てを扶助してやつて居る。一旦店を失敗引退した者でも、病氣又は災厄に遭つたといふやうな事を聞くと、直ぐに之を救ふのが常である。

翁は實に艱難を嘗めつくして來た人で、安政二年二月の火事で燒け、やつとのことで普請が出來上ると今度は、其年の有名な大地震で五郎兵衛

火事では燒れ
地震では潰れ

町の新宅は丸潰れとなり、僅かに身を以て免れたといふやうなこともあつた。新築の折には些か餘裕もあつたが、今度こそは全くの無一物となつた、且つ此大地震の爲に江戸市中一般に災害を蒙らざるはないので、親類緣者に泣きつく餘地もなかつたのである。翁は此際奮然身を下して、銀座四丁目へ露店を出し、紙煙草入の商ひを初めたものである。何しろ安政の大地震で上下一般に大恐慌が來た折柄で、忙殺さるゝは大工左官のみである。翁が紙煙草入に眼をつけたのは、此景氣のよかるべき大工左官を相手にするつもりであつたのである。

何分當時翁の家族は七人であつた、それだけの生計を繋ぐのであるから、此境遇では實に並大體のことではない。極月寒風肌を劈く雪の夜も、綿入一枚で露店を張り、數百文を得ては米を買ひ、以て漸く家族の生活を維持するだけであつた。漸く息をつけるやうになつたのは、翌年の春で、追々家業の馬具袋物などを繕ぐやうになつた。此機逸すべからずと、翁は寢食を忘れて勉强すると同時に專心貯蓄したので、二年後には大根河岸へ二間々口、奥行四間の二階建の普請をすることが出來た。その時分のことだから、四十兩でそれだけのものが出來たといふことではあるが、當時又大道商人から、四十兩殘す迄働上げる堅忍奮鬪には思ひやるに餘りある、翁は今日でも近親や子供に語る『大地震後の借金はなか〳〵拔けず、日夜苦勞に苦勞を重ねたが、或大晦日に之れを皆濟した時の心持といつたら、今も忘れられない、借金拂ひした殘りが、天保錢二枚で、之で松飾りやお供ひ

を買ひ、勇み込んで歸宅し、自分で松飾りを釘づけした心持は、殆んど四海を呑んだやうであつた』と。

かくして幾多の困厄窮境に遭ひ終に今日の森村組の成功を見るに到つた次第であるが、森村組の歴史に於て、特筆大書して其の苦勞を犒はねばならぬのは翁が實弟豊氏である。

森村組の兩翼 双輪たる人物

氏は前にもいつた如く明治七年孤劍身を挺して萬里の異域に一商店『日の出コンパニー』を開き、外國人と直接貿易の衝に當り、市左衛門翁と内外相應じて、拮据鞅掌二十有餘年間一日の如くであつた。市左衛門翁の所謂『英雄を繫ぐに在り』の秘訣よりして、素より勇將猛士には乏しくない。外にあつては現在紐育森村組の主任たる村井保固氏の如く、内にあつては大倉孫兵衛氏の如き、兩翼として、双輪として森村組を誘掖し、擁護したる功勞は實に大なるものであるが、肉身の兄弟が内外に在つて經營慘憺、相呼應したその實効は、實に今日の森村組を成さしむるに最大の力であつたことを見脫すことが出來ない。

豊氏は眞に貞實、耐忍、精勵、敏腕なる點に於て、舍兄と共に絶倫の望を懷いたものである。實に氏が去る三十二年を以て此世を去つた事は日本の爲に痛惜すべきことであつた。享年四十八であつた。其死去は實に市左衛門氏にとつて、殆んど兩の腕を失つたかの感があつたに相違ない。此人の後を繼いだ人は村井保固氏である。保固氏に亦堅忍不拔、森村翁と共に奮鬪力戰することに勞を惜まなかつた。保固氏も矢張慶應の出身であるが、在學中尾崎學堂氏と同窓で、殊に交りが深かつた。然るに卒業の後一日學堂氏が保固氏を森村組に訪ふたところ、彼は宛も今荷造の最中であつた。學堂は之を見て去り、犬養木堂氏に向つて『村井は墮落して人足となつた』と歎息したといふ話が殘つてゐる。村井氏の決心の固いことは實にかくの如くで森村組米國支店にあること二十有餘年勵精則苦一日の如く、豊氏逝いて以來は專ら此人の手に凡ての取引がなされたのである。

第二　安田善次郎翁の漸進的健鬪振

大閥記を讀んで大に發奮す

不世出の才ありと雖も、秩序と順序とを逐うて進むは眞の偉人である。翁は越中富山の前田家の藩士で、極く小身な家に生れた、そして父は律義一遍の人であつたから常に小供等に教訓するに『生命を保つだけの事は禽獸でもする、苟も人間と生れた以上は相當な事をしなければならぬ。夫れには勤勉貯蓄が最も必要である』と云つた。併し小身者で祿高も僅少であつたから、別に内職として大根や午蒡やを造り撓まず倦まず精を出して居たが、家族は八人もあつて中々生活が困難である。氏は十歳位から鋤鍬執つて父の手助けをしながらも、心細く思つてか、たゝ斯うして暮らす許りでなく、何か安心な

方法で渡世をして行く法はあるまいかと幼き胸を頻りに痛めた。

そこで當時一枚の寫本料が三文で、三十三枚書いて百文、即ち今日の一錢位にしかならない仕事を一生懸命にやつて、自分の小遣は勿論妹にも幾分かづゝを分けてやり、少しでも家計の足しになるやうにと心を碎いて、錢儲けの外に又寫しながら勉強するのを樂みとして居たが、或時大閤記を寫してフト秀吉の人物に非常に感じ、俄に奮發心を起した。尾張中村の百姓の倅が遂に關白になるまで漕ぎ著けたのは、勿論空前絶後の大英雄に違ひはないが、あれだけの地位を得るに到るまでの順序は、決して一攫千金的のものでなく、秩序あり階段あり、總て順序を逐うて來たと云ふ點が痛く感動を與へたのである。

翁の十六歳の頃、大阪の町人で前田家の銀主があつて、其町人の手代が城下へ來り用事が濟んで歸る時に、前田家の御勘定奉行が其者を城下外れまで見送つた。昔は奉行などゝ云ふと大變威張つたもので、小身者などが途中で出逢つたなら、どんな雨雪の中でも下駄を脱いで土下座をせねばならないのであつた。然るに其奉行とも云はるゝ者が、日頃見下げて居る素町人をわざ〳〵と、見送つて行く、是れ云ふまでもなく金の威光であると、此時金の力の偉大なることを痛切に感じたのであつた。

それから金を貯めなくては駄目だと考へ、同時に又如何にしても千兩の分限者にならねば置かぬと決心した。しかし是れは中々容易な業でない。此目的を果すためには如何な手段を取るのが最も捷徑であるかと、樣々に考へて見た結果、遂に商人でなくては駄目だと悟り、將來商人で一生を送らうと云ふ決心をしたのである。それには田舍に居ては舞臺が狹くて自由にゆかぬ。是れは一番江戸へ出るに限ると思ひ込んだ、併しその時分には諸所に關所があつて、其上親が不承知だから仕方がない。よし山道傳ひにでも江戸まで出ようと決心し、とうとう安政元年十月に家を飛び出した、その家を踏出す時に

金の威力ある を痛切に感ず

三箇條の誓ひを立てた。

第一　子供の頃より嗜んだ飲酒を五年間禁ずる事。

第二　勤儉貯金を勵行し、幸に目的を遂するに至るも一生身分不相應の事を爲すまじき事。

第三　他力を賴む可からず。虚言を吐く可からず。他人に迷惑を掛く可からず。

さて、出て見ると初旅ではあり、山又山と分け入つて路も無ければ方角も分からぬ處に迷ひ入り、二日目には最早進退谷まつて生命賭けと云ふやうな目に逢ふた、ソコデ殘念ながら三日目に悄然として家に歸つて、そして兩親の前に逐一白狀して、今度は公然の願ひをしたけれども、痛く叱られて拏みは却けられた、時に翁は十七歳、父は四十三歳の時であつた。其の後三年目に又家を飛び出して、飛彈の山中から信州の松本へ出で、三里も五里も人に逢はないやうな所を走

つて江戸に着いた。其の時の旅費は、二分と八百即ち今日の五十八錢位の金であつた。

それから玩具卸商の店に住込んで、毎日大きな籠を脊負うて江戸市中を歩き廻り、三年間辛抱して地理人情に通じたから、四年目に海苔鰹節兩替店へ住み替へた。其處でも又三年間辛抱して、都合六年の經驗を積んだのである。其間に是は善いと思つた事は必ず實行する。唯だ見聞に止めて置かずに必ず自ら試みる。『貴賤貧富の岐るゝ所は實に此の一點に在り。此の心懸を有する者は必ず出世し然らざるものは皆中凡で終る。』と、此の心を以て働き、此の心を以て仕へたから、主人にも可愛がられて、暇を取る時なぞは中々惜んで許されなかつた位である。

五十五兩で開業嫁取の條件

暇を取る時に貰つた賞與と日頃の貯金とを合せ、尙ほ其上に着物や雜具を賣拂つて五十五兩をまとめ、此金を以て人形町通りの乘物町で間口二間の店を開いた、家族は年期小僧と雇婆と自分との三人で、舊主人の方から品を借受けて同じ商賣をした。それから毎朝四時に自分が先に起きて向三軒兩隣の前を掃き水を汲み竈の下を焚き附けて、それから婆さんや小僧を起した、萬事さう云ふ具合に勉强をして、客に對しては出來るだけ安く、同じ値ならば成丈け品の良いのを擇つて渡す樣にしたから、忽ち大評判となつて態々遠方から買ひに來るやうになつた。

店が段々繁昌するに連れて、妻を娶つてはと勸められた、其時に一の條件を持出した。曰く『まだ稼がねばならぬ身の上だから、嫁に來たら直ぐ雇婆さんの代りをすること、自分の不在の時は自分に代つてお客を大切にすること、着物は當分木綿物の外着てはならぬこと、此の三ケ條を承知なれば貰ふとのこと、先方もそれを納得して嫁に來た。

勤儉誠實の結果は安田銀行

慶應二年に店を小舟町に移して、暦に兩替を營んだ、それも又狹くなつたから、毎日四十八文宛を積金して家屋新築の用に備へた。折から維新の騷動で浪士の狼藉に遇ふて多大の損耗を蒙つた、けれども尙ほ屈せず家道を進むる中、幕府より江戸中の重立ちたる兩替店に古金の引換方を命じた。けれども當時幕府は已に衰運の極點に達して居た時のことだから、誰一人も其命に應ずるものがなかつた。然るに翁獨り大膽に之を引受けて百方盡力し、其職を全ふして數萬兩の利益を得た。

明治九年遂に彼の四十八文宛を積みたる金を以て立派な店を新築した。時に歳三十九であつた。是より第三銀行を創立して其頭取となり、又第四十一銀行を起し、後ち從來の商店を改めて安田銀行としたのである。勤儉、正實とを以て身を起した翁は、常に人に語つて曰く

『余は當初の目的と方針とを變更せず、何うか斯うか現在の地位まで漕ぎ著けたが、また生涯の旅行、則ち千里の行程を一歩々々歩いて居る積である。秀吉の如き不世出の才を抱いて居ても、一足飛びに關白になれたのではない。況んや凡人の吾々は一層の秩序、階段を經なければならぬ』と

この抱負、この心懸を離さない、成功を希望するの士は宜しく服膺すべきである。

第三　澁澤榮一男の奮闘經歷

藍買少年後は實業界大立物

今から六十七八年前に埼玉縣大里郡八基村、其の當時は榛澤郡血洗村と云ふ處の近邊を脚袢股引掛けで朝早くから、『藍を買ひましやう藍を賣つて下さい』と熱心に藍を買つてあるく少年があつた。この見る影もない一介の藍買少年が後に日本の實業界の大立物となり、男爵とまで成らうとは誰れも思はなかつたであらう。今でこそ男爵澁澤榮一と言へば誰れ知らぬ者はない。然しその昔は實に斯樣な藍買少年であつたと云ふ事は多く知る人があるまい、今頃の青年で將來實業界に大いに手腕を振つて見やうと願ふ程の者は皆一樣に澁澤々々と澁澤男は理想の的となつて居る樣であるが然し澁澤男は偶然に偉くなつたのでない。又生れながらの華族でないことは勿論である。みな志を立てゝ世と奮闘した結果である。世の中には結果ばかりを見てその原因には一切頓着なく其の結果を得たい〳〵と煩悶し急る人がある、然し蒔かぬ種は生えない。大いに伸びんとすれば先づ大に屈しなければならぬ。天正の頃武藏國榛澤郡血洗村に足利氏の流れで澁澤隼人といふ人があつた、これが澁澤家の祖先である。澁澤男の祖父樣は市郎右衛門と云ひ其の人に二人の娘があつて、長女の榮と云ふ方に同族の澁澤宗助の三男美雅を婿として貰ひ受けた、そして此の二人の間に天保十一年二月十三日に男兒を設けられたのが即ち澁澤榮一男である。

幼年にして能く經書を讀む

此の父親といふ人は至つて謹嚴な人であり、又詩歌俳句などを弄ぶと云ふ風流があつた、その上經書に通じて居られたので、男は六歳の頃から時から難しい漢文を敎はつたわけである八歳の頃からは男の從兄の尾高淳忠と云ふ人に就いて日本外史、十八史略などは無論の事孝經、小學、左傳、詩經、書經、國史略などを學ばれた。この尾高といふ人は其の近邊では有名な漢學者であつたばかりでなく一ト角の見識のあつた人と見えて男を敎育するのに四書五經などの難しい文章の講義をしたところで解るものではないと云つて成るべく澤山の書物を讀ませ識らず知らずのうちに其の意味を知らせるやうにした。それ故九歳や十歳で斯くも澤山な書物を讀む事も出來たのであるが亦之がため男の讀書力もいつの間にか出來たそれ故十一歳の頃には大抵の漢書は一人で讀めるやうになつた。さうなると最早經書の素讀ばかりでは面白くない、何か面白いものはないかと頻りに本箱をさがして居ると里見八犬傳、三國誌といふやうなものが見あたつた。之れは面白さうだといふので讀み出した。讀み出すと止められない。止められない筈である。三國誌は曹操、劉備、諸葛亮、關羽等三國鼎立時代の支那の英雄豪傑の

事を書いたものであるし、八犬傳は云ふまでもない。これを讀んだ男は其の當時自分でも密かに天下の豪傑を以て氣どつて居つた。後に百姓でありながら天下の志士と交つて尊王攘夷の爲に狂奔したのも此等の稗史野乘の感化に因る事が少くない。男がその頃如何に讀書に熱心であつたかを知るに就て面白い話がある。

新年の晴衣の儘溝泥に落つ

男が十二歳の春を迎へた時である。新年の廻禮に行くと云ふので晴着を着て家を出た、其の頃は例の三國史を讀み耽つて居つた時分のことであるから、書物は何時も離した事がない、その日も相變らず懷に入れて出かけた。うらゝかに照る初日の中を例の三國史を讀みながら田舍の畦道を行くと段々興が乘つて來て、後には覺えず知らず歩いて居た。すると忽ちヅシンと男は道端の溝の中に落ち込んだ。よく誰にもある事であるが、何か考へ事をしたり、遠方のものばかりを見て歩るいて居ると忽ち溝の中に落ち込んで目の玉のとび出る程驚く事がある。澁澤男も書物にばかり氣をとられて足元がお留守になつて居つたのであつたそしてお正月の晴着をメチャ〳〵にして歸つて來た。すると男の父はこの有樣を見て『勉强する時には一心に勉强せい。道を歩む時には確り踏みしめて歩け』と言はれたと云ふ事である。斯樣に男は讀書に熱心であつたがそれなら何時までもこの好きな學問をする事が出來たであらうか元來澁澤家の家業は農業本位で傍ら蠶を養ひ藍を作つてそれを賣買して居つたので、祖父の代には

藍買の商略大人を驚かしむ

至つて貧しかつたさうである。それを美雅といふ人が大變な勤勉家で質素儉約を旨とし一意家業の隆盛に努められた。中さばその頃が家運挽回の大切な時であつた、それ故何時までも子供に學問ばかりさせておく理には行かぬ。或る日父親が男を呼んで、

『お前も最早や十四にもなつたのだから何時までも學問ばかりさせて置く理にはいかぬ、是れからは一つ百姓や商賣に身を入れて家業を助けて貰はねばならぬ』と言はれた。丁度その頃澁澤家では藍を買ひ集めて藍玉を製造して信州、上州、秩父邊の紺屋に送つたのである、そして節期になると一々その掛け取りに廻はるやうになつて居つた。それで其年も父君は此等の地方に掛け取りに行かねばならなかつたその時男を呼んで、

『私は之れから信州邊に掛取りに行くので留守中藍の買入れは祖父に依賴して置いたからお前も家業の爲めに隨いて歩け』と云ひ渡して出て行つた。

男はそれから祖父に從つて藍買ひに行く事となつた。一日矢島村と云ふ處にいつて祖父の藍買ひをするのを見て居つたが、

『あゝ自分ももう十四にもなつて一人で藍買が出來ない。それが爲めに年寄りの祖父を煩はさなければならんとは情無い事だ』

こう思ふともう悶〳〵しては居られないと氣がついた。同時に一人でやつて見やうと云ふ決心をした。そこでこの決心を祖父に告げて無理に一人で買ひ付けに歩かせて貰ふ事にした。さて一人でやる事にはなつたが何がさて鳶口鬙の子供の藍買ひの事であるから里の人達は輕侮にばかりした。

『何がこの小僧に藍の善惡が解るかい。』

と云ふ風に侮つてかゝつた、ところが男は藍を出させては種々なことを云ふ。これは肥料の施り方がたらんとか、これは莖の切り樣が拙いとか一々批評してはそれ相當の値段を付ける。里の人は驚いた。

『小供だゝ思つてりや藍買は大人だ』

と云ふ評判になつた。しかも機敏に立ち廻つて買ひ付けをやつたので殆んど一人で買ひ占めてしまつた、その年は藍の出來が惡くて藍買商人はなか〳〵骨が折れた年であつたから、後に父が掛け取り先から歸つて來て藍の買占めがうまく行つたのを非常に喜ばれると同時に男の商才の非凡なのに驚かれたと云ふ事である。

男が商賣の初舞臺にこれ丈の手柄を現はしたと云ふのも決して偶然ではなかつた、讀書に熱心な男が一度び書物を捨てゝ商賣に移れば亦同じ熱心を商賣に注ぐ、これから藍買ひをやるんだと思ふと藍の事については何事に限らず注意して居る。それ故人の知らない間に大抵な事は解へて居つたから一人でやれると云ふ決心も出來、また之をやつて成功する事も出來たのである。經驗も智識もないものが無暗に獨立して商賣をやるといふ事は實業上最も忌むべき事である。將來實業で身を立てやうと思ふ者はその末だ獨立しない前に人から敎はる迄もなく自ら進んで其道に關する事は何事に限らず注意して置き、いざ獨立するとなれば立派に技倆を現はす程の熱心がなかつたなら遂に何事も成す事は出來ないであらう。男の立志傳中で最も學ぶべき點は此處にある。

代官の無法に發奮士分志願

斯樣に男は十四位の頃から既に一人前の藍買ひとして熱心に家業を助けて居つたが茲に男の精神上に大變化を來すべき一事實が起つた。安政三年男が十七歳の時である、その土地の代官所から御用金の事に就て男の父に出頭するやうにとの御沙汰があつた、處が相惡父に差支があつたので男が代理として其他二三の人々と出頭した、御用金の事と云ふのは其頃大名の惡風習として用度がたりなくなると代官に命じて領内の金持の百姓町人から御用金だと云つて粗稅の外に取り立たものである。之れは其頃幕府の權力が衰へて政治が行屆かなかつた處から各大名は勝手な政治をやつて人民を苦しめて居つた。男の領主もまた其一人であつた。そして男の内からは既に二千圓といふ金が上納されてあつた。

さて澁澤男外一同打ち揃つて出頭いたして見ると、代官は威儀嚴然として何某には何百兩何兵衛は幾らと御用金の高を告げ男には五百兩上納の御請をせよと申し渡しになつた。何しろその頃

の代官といへば無暗と威張散したもので、その意にでも逆ふものならどんな事をするかも知れない、一同は異議なく御請をした。處が男　人は御請を致さない。『私は父の代理でござれば御即答を申し上げる事は出來ません。御上命の程は確と父に申し傳へまするが御請の義は何れ父から申し上ぐるでございませう』といつて御請をしない、代官はヂロ〳〵と男を眺めて居つたが『一体其の方は何才になるか』と訊ねた。『當年十七才に相成ります』『さうか十七才と申せば最早子供でもあるまい、まして其の方の父が代理として立てる程なれば萬事その方に任せる考へであらう。餘の者も既に心好く御請をした以上その方も直ちに御請をしたがよからう』と飽くまで御請をさせようと致した。『何と仰せられても手前は代理のもので外樣の皆一家の主人でゐられるのと違ふから何れ御請は父から至急申し上ぐることにいたすで御座いませう』と云つて何うしても御請をしない、すると代官は立腹しそうに『僅かばかりの金を御請するのに十七にもなつた其の方が一丁見で御請が出來ぬとはさて〳〵腑甲斐ない奴ぢや』

と嘲弄致した。然し男は遂に御請をしないで引き下つたが、歸る途々代官の傲慢な、まるで金貸が借金でも取り立てるかのやうな申し分が癪に障つてならなかつた。そして御即答申し上げ兼ねると云へば嘲弄する嘲弄せられてまた一の言葉をも返す事の出來ない百姓の身は辛いものだと思つた。此の暴虐な役人の爲めに塵芥の樣に取り扱はれた無念が動機となつて後日百姓の身を脱して士分になりたいと望むやうになり、ペルリ來航に際しては無能なる幕府を倒さずんば止まずと勢卷くやうになつたのである。男は家に歸つて此の事を父君に告げて斯樣な理不盡な金は出すには及ぶまいと云つたが父親は百姓の悲しさ致し方がないと云つて上納されたと云ふ事である。

鎖國の迷夢破れ海内騒然

かれこれしてゐる内に嘉永六年米國の提督ペルリが伊豆の下田に來て我國に貿易を求めて以來、日本國内はまるで長夜の眠りから醒めたものゝ樣に、或は攘夷と云ひ、開港と云ひ、又或は尊王と云ひ、佐幕と云つて騒然として湧くが如き有樣となつて來た、丁度其頃長崎の士で多賀屋勇と云ふもの、宇都の宮の廣田精一などと云ふ士が血洗村に詩文の事で遊びに來て居つたが男も詩文の事で接するやうになつたので自然これらの者から時勢の急なる事を聞いてそゞろに憂國の血を湧かした。志を伸ばすのは此の秋だと彼等は大いに同志を語つた。同志と云ふのは男の漢學の師匠尾高淳忠、其弟の長七郎及び同族澁澤喜作など〳〵云ふ面々である。其の内此尾高長七郎といふ人は至つて剛膽な人で劍術もまたなか〳〵達者であつた、天下の變をきくや逸早く江戸に出た。そして當時名高かつた下谷練屏小路の儒者海保章之助と云ふ人の塾に入つて傍らお玉が池の千葉の道場に通つて時機の至るを伺つてゐた、此の時男も如何かして志を得たい。それには何うしても江戸に出るより外はないといふ考へたから、それとなく父君に江戸に遣つて戴きたいと願つたけれども、家業を餘所にする事は許されな

かつたが、唯だ春先二月頃農事の閑な間だけ許してやるとの事であつたから、早速江戸に向つて出發した、それが男の二十二歳の時で文久元年の事であつた。

江戸出府天下の志士と結ぶ

かくして志を立てゝ江戸に出たのが男の出世の門出となつて居るのである。若しこの時依然として血洗村に溜まり天下の形勢に頓着なく家業にのみ從事して居たならば、恐らくは今日の澁澤男とはなれなかつたであらう。江戸に出た男は早速尾高長七郎を訪ねて、其の紹介によつて海保の塾に入り同じく千葉の道場に通ふ事となつた、何がさて當時平民の分際で何事かなさうと云ふ意氣込みがあるのであるから何事に限らず注意を拂ふ事を怠らない。劍道には勿論熱心であつた。そして海保の塾、千葉の道場に通ふもので有爲の士と見ればこれと交はり之を語つた。大事を成さうと思へば何うしても廣く天下の志士人傑に交はらねばならぬと云ふ考へである。當時志あるものは自ら同氣相求むると云ふ傾きがあつたから間もなく眞田範之助、佐藤繼助、竹内綏太郎、横川勇太郎、中村三平等といふ同志の面々が出來た。

然らば斯樣に同志を募つて何をしようと云ふのであらうか。之れには非常な企てがあつた。先づ攘夷の勅命を逡巡決行し衆ねて居る幕府の腐甲斐なさを憤つて我等同志の士が先づ立つて天下の耳目を一新しよう。即ち一方攘夷の勅命を貫徹し我が國民の武威を彼等異國の民に示すと同時に、一方には權力衰へて何事をも成し得ない無能の幕府を倒して尊王攘夷の先き駈けをやらうと云ふのである。

斯樣な考へを持つて居たものは其當時男一味の同志ばかりではない。苟も國を憂ふるの士は擧つて此の幕末の政治外交を如何にしたらよいかと云ふ事に就ては家を忘れ身を捨てゝ國家の爲に盡した然しそれは皆政治に關係のある大名の家來や幕府の士ばかりで少くとも侍でないものは一人もなかつた。然るに男は一人血洗村の百姓である而接幕府の政治に關係があると云ふでもなく大名の家來と云ふでもない、昨日までは實に鋤鍬を持つた一個の平民にすぎなかつたのである。しかも卒先して天下の耳目を聳動しやうと云ふのであるから其の意氣の盛んなる。その企ての大膽なる、實に驚くべきものがあつた擧竟男は其の身は平民であつても其魂は稜々たる武士であつたのである。

同志尾高長七郎の急を救ふ

斯樣にして之等一味の同志は常に時機の至るのを待つて居つた。處が文久二年正月十五日の事である。安藤對馬守が登城の途中坂下門外で浪士河野建三等の爲に要擊せられて對馬守は辛じて遁れたが、これが爲め幕府は頻りに其の同志の檢擧を始めた。男等の同志のうちにも此の嫌疑を受けて捕へられたものが大分あつた。例の尾高長七郎も亦嫌疑者の一人であつたが折りよく彼は其時血洗村に歸つて居つた。男は此事をきくと早速之を尾高に知らせなければならぬと云つて血洗村に歸つて行つた。處が尾高

は其の日再び江戸に向つて出發したと云ふ後であつたので今江戸に出ては大變だと云つて男は又折り返し尾高の後を追つかけた。既にその時はもう夜の十時頃であつたが四里の道を走りつゞけて遂に漸く熊谷で追ひついた。尾高は男から始終を聞いて驚くと同時に男の友情の厚いのに深く感謝したと云ふ事である。そこで二人は相談の結果尾高は一先づ京都に落ち延びる事にした。之は男が尾高の安全を圖ると共に京都辺の模様をさぐらせやうと云ふ考へからであつた。

尾高の出發後男は依然海保の塾や千葉の道場に往來して居つたが幕府は依然として攘夷を決行致さぬ。斯樣に何時までも熱圖〳〵して居つては到底異國人の侮を防ぐことは出來ない。最早座して見るに忍びないと云ふので愈々文久二年八月に尾高淳忠、澁澤喜作の二人と密會して一大暴動を企てるに至つた。

同志と共に一大暴動を企つ

暴動と云ふのは攘夷を決行するために横濱を燒き拂つて外人を屠殺しにしようと云ふのである。其の方法としては多數の人が江戸を通過すると事が面倒になる恐れがあるから、寧ろ道は上州に取らう、そうして先づ高崎城を乘取つて此處を本據とし更に戰備を整へて一氣に横濱に押し寄せやうと云ふのであつた。

爾來三人は同志を募り內密に武器を集めた。何んでもその時男は藍を賣つた金が百五六十兩有つたのを武器の買入れの爲めに悉く費消したといふ事である。そして其の時同志として集つた元氣者は六十九人あつたが是等の人々は文久三年十一月二十三日を期して決行しやうと云ふ事に決定した。一同は何喰はぬ顏で其の日の來るのを待つて居つた。然し男はそれ程の大暴動をやる以上或は再び血洗村の土地を踏む事は出來ないかも知れぬ。付いては父上に餘所ながら別れを告げて置きたい。又成る可くこの事の爲に後で一家に禍を及ぼさないやうにして置きたいと思つたが、これを言ひ出す機會がなかつた。所がこゝに其の時期の來たといふのは九月十三夜の事である。月見の宴を開いて尾高淳忠、澁澤喜作の二人を招いた。之れは男が月見にかこつけて父に志を語りそれとなく別れを告げたいと云ふ考へからである。

皓々たる月の下で酒宴は開かれた。四方八方の話から、段々と話は天下の形勢に持つて行かれ男は遂に其の決心を語り始めた。

「幕府は外國が浦賀に來て開港をせまつて居るのに之を斷然拒絶するの勇もなく、さればと云つて港を開いて貿易を許せば上の勅命に反く事となる許りでなく攘夷々々と意氣卷いて居る反對論者を抑へつける程の權勢もない、それ故もし此儘悉圖々々して居つたなら內憂外患一時に起つて天下は麻の樣に亂れるであらう。今日の場合は最早百姓だからと云つて安閑として居る時でない」と云つて自分も今や斷然劍を採つて立つべき時が來たのであると云ふ意味のことを述べた。處が父は、

『何を云ふか、百姓の家に生れたら百姓の本分を守つて居ればよい。お上の事はお上がなさる無用ざる手出しをしたり、身分不相應な望を起す事は間違ひである。』

云はれて其の志を翻へさせやうと致されたが男は此の頃から家を思ふ心よりも國を憂ふる念が强かつたと見えて

『父上の仰せは一應御尤もではあるが今度の事は日本國内の爭ひとは違つて異國がこの神聖な我が邦を侵さうとして居るのであります。然るにその衝に當るべき幕府が既に斯樣な有樣であるから異國は益々其の虛に乘じやうとして居る。この時に當つて誰れが能く國難に赴くであらう。此の場合に望んでは武士と平民の區別をして居る時ではない。それ故私も微力を國家に致したいと思ふ、どうか許して下さる樣にと』言はれた。

此時男の言葉は極めて沈痛であつた。並居る人は皆默してこの青年志士の言ふ處に耳を傾けた。そして此の座の光景を秋の夜の冴えた月が益々冴えて照らして居た。

父親は此の熱心な國を思ふ心の厚い我が子の言を聞いて暫らく考へて居つたが。

『聞いて見ればお前にはお前の考へがある。然し私は今申し聞せた樣な考へであつて見れば二人は全然考へが違ふのであるから今日から私はお前を子と思ふまい、子でない以上お前はおまへの思ふやうにてしよい。私はお前のする事に關係なく百姓をして居る。』

男はこの許しを得て喜ぶ事限りがなかつた。然し家の事はやはり氣にかゝつて、

『子として家を顧みないと云ふ事は此の上もない不幸であるが國の爲と許して下さい。就いては既に亂に赴く以上生死の程は豫じめ知る事を得ぬ。それ故寧ろこの際私は勘當を願つて家督は妹に讓つて戴くやう。』

と云つた。

『然し突然勘當をすると却つて世間に怪まれる、後の事はまた宜いやうにするからお前はたゞお前の事をすれば宜い、が茲に注意して置きたい事が一つある。今後お前達は如何な事をするか知らんが然し如何なる場合にも道理を踏み外づしてはならない。飽くまでも正義によつて然も之を行ふのに誠を以てしなかつたら遂に何事も成す事は出來ないと云ふ事である。もしお前が能くこの言葉を守つて事をなすなら私はお前の生死に拘はらず滿足する。』

男はこの言葉をきいて自ら涙の流れるのを覺えなかつた。さうして居る内に何時か東の空も白んで來た。實に一同はその夜を語り明かしたのである、今でも男が九月十三夜の月を見たらばその夜の事を思ひ浮べて感慨に堪えないものがあるであらう。

夜が明けると男は直ちに江戸に出た。凡そ一ケ月ばかり滯在して十月下旬に血洗村に歸つて暴動の用意をすると共に一方京都の長七郎を呼びもどした。長七郎は早速歸つて來て十月二十九日尾高の

家で會合致した。

尾高形勢を說て暴舉を止む

尾高は男から大暴動の計劃を一々聞いて其の突飛なのに驚いた。これは驚く筈である。尾高は京都に居つて能く當時の形勢を知つて居るのでそんな亂暴な事が出來るものではないと思つたからである。それで尾高はその無謀な企てを止めさせやうとしたが男も一大決心を以つて始めた事であるからなか〳〵承知しなかつた。然し長七郎が詳しく當時の形勢を話し暴動の功のない事を說いて中止を主張したので一同も犬死するのはつまらないと云つて此の大暴動も中止する事になつた。そして男は鄕里に居る事が出來ないので澁澤喜作と共に京都に行くことゝした。然しその當時百姓として旅する事は極めて危險な事であつたので其儘出發する理には行かなかつた。そこで二人は先づ江戸に出た。そして男が以前海保の塾に通つた頃懇意になつた人で平岡圓四郎といふ一つ橋の用人のある事を思ひ出して二人は之に賴つて行つた。然るに其人は既に一橋公のお供をして京都に出發したと云ふ後であつた。仕方がないので二人は其平岡といふ人の夫人に賴んでどうか京都に行くまで平岡家の家來にして貰ひたいと申し入れた。幸ひ夫人は早速これを承諾して呉れた。これは平岡といふ人が出發の時左樣な事もあらうかと思つて夫人に言ひ置いてあつたからだと云ふ事である。

之れが爲二人は一橋家の倍臣といふ資格で無事に京都に着く事を得た。然るにこの事が男の運命を開く端緒となつたと云ふ事は注意すべき事である。即ちこの平岡圓四郎といふ人と知己になつて居たばかりに此の人の勸めに依つて京都滯在中に一橋慶喜公の家來となり、後慶喜公の弟民部公子に隨行して佛國に留學し明治四年に歸國して大政奉還後の德川家の財政を整理し大いに理財の才のある事を認められ、明治政府が創立せられると同時に大政官に召されて大藏省租稅正に任せられ、益々財政經濟の手腕を認められた、然るに創業早々の事として政府內で意見が合はぬ處から男は寧ろ役人を罷めて民間の商工業の爲めに盡すと云ふ事の國家の進步發展上必要な事であると云ふ考へから、斷然役人を罷めて實業の爲に盡す事となつた。爾來男は實業界に於て多大の貢獻をいたされ、我邦實業の建設者として今尙ほ國家の財政に預つて居るのである。

時勢は巨人の運命を開けり

我々が實業家としての男に學ぶべきはその富にあらずしてその人格である。若し巨萬の富を積む爲に學ぶべきは外にその人がある。男は唯だ一身一家の榮達を圖る爲に實業家となつたのではない、實に公共の爲に因つて終始する實業家である。世は滔々として私利私慾を圖るに傾き公明正大我が邦實業界の爲に憂ふるの士が漸く後を絕たんとして居る、此の時に當つて誰か第二の澁澤男爵となるのであらうか。

故郷水澤町にて老人の感歎

政界の麒麟兒後藤男が鐵道院總裁として或る時東北地方に業務視察にいかれた事がある。汽車が岩手縣の水澤驛に着いた時プラットホームには土地の官民有士が出迎へて居つた。聽て男爵はその堂々たる姿を車室から顯はして、それらの人々に一々挨拶があるど、間もなく復た汽車は靜に進行を始めて北に向つた。其の時驛の附近にも土地の老若男女が寄り集つて此光景を珍らしそうに眺めて居つたが汽車の漸く見えなくなつた頃『偉いもんだア』とさも感に堪へぬといつた風に首を傾けて勅う言つた老人があつた、『お前さまなに言つてるだあ』と一人の若者が小首を傾げて居る老人に尋ねた。すると老人『なに言つてるだつてお前……あの學校にも行かねえで縣廳の小使をした後藤が今じや大臣樣でねえか、だから人間てものは心一つで大臣にもなれりや乞食にもなるだア。お前なんぞもブラ〳〵して居ねえでチット精出して仕事でもしなあよ。』

斯う言つて老人は町の方へ引き返した。若者も何んとなく極まり惡るさうにコツ〳〵と何れへか立去つた。今立ち去つた老人は後藤男の幼い時分の事を知つて居つて、その昔と、今の堂々たる後藤男とを比較して感に堪へなかつたのであらう。然しこの感慨は此の老人一人には止まらなかつた。

汽車の内の後藤男も亦一度故郷の山河に接しては今昔の感に堪へぬものがあつたに相違ない。知らずあの老人に精出して働けと戒められた若者はこの生きた教訓に接して何んと感じたであらうか。我等も暫くあの老人の心に立ち歸つて其所謂後藤男の幼い時を振り返つて見る事としやう。

縣廳の給事を勸めて勉學す

後藤男の故郷は云ふまでもなく其水澤町である。父は十右衛門と云つて留主氏に仕へた士族である。然し士族とは云ふものゝ仙臺藩からは倍臣にすぎないので至つて祿も少く手内職でもしなければ生計は立たなかつたのである。其の上明治維新となり、廢藩置縣となつた爲全く食祿とはなれて見る影もない所謂貧乏士族となつたのであつた。後藤男は安政四年に生れて其の頃までは頑是もなく惡戯をして折々村塾に通ひ漢文を習ふ位にすぎなかつた。然し何時までも遊んで居るといふ理には行かぬ。さりとて田地がなければ百姓をさせると云ふ事も出來ず止むなく母親はその當時水澤縣參事であつた安場保和と云ふ人に賴んで縣廳の給仕に使つて貰ふ事としたのである。家を出る時母は男を呼んで、『呉れも家を興し名を顯はす事を忘れるな。子供だからと云つて仕事や勉強を粗畧にして居れば偉いものにはなれぬぞ。』と申しきかされた。幼いながらも貧の悲しさが身にしみて居る男は『やつて見せますぞ』と心密かに誓つて給仕となつたのであつた。それが明治五年で男が十四五歳の頃である其の頃同じ縣廳の内に前の海軍大將齋藤男爵も給事をして居た。一人は沈默寡言落ち着いて能く學

び善く努め、一人は才氣縱横何れかといへば腕白で而もよく勵みよく學んだ。さうしてこれが一人は後海軍大將となり一人は時めく政治家となつて共に天下の政權に干與るに至つたと云ふ事はまた善き敎訓を吾々に示すものではある。斯樣な次第であつたから二人とも廳內での評判者で特に後藤男は安場氏に可愛がられて職務の暇には漢文を敎はつた。

この安場と云ふ人は熊本の人であつて九州人特有の剛毅果斷な性質に加ふるに亦情に厚い人であつた、男の夫人はこの安場と云ふ人の令孃である。間もなく安場氏は水澤縣參事から福島縣令に榮轉されたが男も亦伴はれて任地に赴いた。その時が十六歲である。

當時福島縣の警部長に阿川光裕といふ人があつたが安場氏は此の人に『何うか暇の時に此子に漢文を敎へてやつて貰ひたい』と賴まれた。それから男は此阿川と云ふ人に就て勉强する事になつた男は一意專心勉學に勵み、斃れて後止むといふ覺悟であつた。それ故座右の銘として

英才は勉勵の別名

千難萬苦不撓不折 遂ニ其 志一止。

と書いて傍らの壁に貼り付けて、號を弊止堂と稱して居つたほどであるから如何に勉强して居つたかと云ふことを知る事が出來る。阿川氏もその熱心なのに感じて親切に敎導もし亦非常に可愛がつて居つた。男が斯樣に勉强したと云ふのも畢竟安場、阿川の兩氏の鞭韃によつたのである。然し尙ほ他に一つ絕えず男を鞭韃して止まないものがあつた。

幼時高野長英を崇拜敬愛す

男の鄕里水澤はあの有名な幕末の蘭學者高野長英の出たところである。元は後藤長英と云つて後藤家の親戚であつたが後高野家に入つて始めてこの性を稱したのである。それ故男は此高野長英を崇拜すること一通りではなかつた。長英は開港の事に就いて幕府の政治を批評し人民を惑はすといふ理由で天保九年に獄につながれたが、間もなく脫獄して御尋ね者の身となりながら諸々方々を隱れ廻つて千辛萬苦の結果遂にタクチーキと謂ふ兵書を著した。この兵書は後日本兵學の基礎となり、又之が爲に明治維新も成就したと謂はれる程の有益な著述をして而かも遂に男が生れる七年前に幕府の岡ッ引に靑山百人町の匿家を嗅ぎ出されて最早や運の盡と自殺して國家の爲に犧牲となつた偉人である。男は長英が外國語研究の不便な時に、あらゆる困難を排して蘭語を研究した事を思ふ度に自ら聲勵一番しては勉强を續けた。

異常の出世で名古屋病院長

扨て話は後に返つて男は其の後阿川氏が福島縣永沼町々長となつて轉任の際もまた伴はれて任地に赴いた、阿川氏は其の頃男が醫者として身を立てたいといふ希望があつたので遂に學費を出して須賀川醫學校に入學させた。男はこの阿川氏の知遇に感じて益々努めて怠らなかつた。爲め遂に優等を以て三年の課程を卒へたのである。

間もなく安塙氏は愛知縣令となり、阿川氏も再び警部長となつて名古屋に轉任になつたので男も名古屋に移つた。程なく男は當地の醫學校に助手となつて傭はるゝ事となつた。その時が明治九年で男が二十歳の時である。月給は十二圓であつた。

それからの男は先づトン〳〵拍子といつた風に二等診察醫となり一等診察醫となり明治十三年には早くも愛知病院長心得とまでなつた。然しこの間には一つ面白い逸話がある。

男がまだやつと二等診察醫となつた頃である。名古屋醫學校の教授にロレッチといふ獨逸人があつたがこの人の通譯に多納春亭といふ頗る豪放な人があつた。男はかれて獨逸語の必要を感じて居つた事とて早速此多納といふ人に獨逸語を敎へて貰ひ度いと賴んだ。すると宜しい來るがいゝ引受けて呉れたので毎日出掛けて見るが先生滅多に家に居ない。はて能く留守にする人だと搜つて見ると、道理でこそ多納氏は毎日の樣に或る料理屋へ押し上つて豪飲豪遊を試みて居る。怪しからぬ人だとは思つたが仕方がない。自分が獨逸語の敎師に傾ひ切つて居る理ではなし。異議を挾む餘地がない。さりとてこの儘に居つては何時まで經つても獨逸語は上達しない、外に敎師を求めやうにもその頃に適當な人がありやうがない。止むを得ず多納氏の行く處へは何處へでも就いて行く事とした。それからと云ふものは多納氏の行く處へ行き。多納氏が料理屋へ行けば男も行く。さうして彼處は如何、此處は何と質問に及んだ、之には流石の多納氏も驚いてその熱心なのに感じた。か樣に熱心に獨逸語を研究したお陰で男は獨逸に留學した時には少からず便益を得た。

それから明治十四年には遂に愛知病院長となり名古屋醫學校々長を兼ねる事になつた。明治九年には月給十二圓の助手が五年を出でずして其の病院長となつたと云ふ事は異常なる出世と言はなければならぬ。

板垣伯遭難の際後藤を觀る

病院長時代は僅か一年ばかりで明治十六年には內務省衛生局に轉じたのでその間には別に變つた事もなかつたが、唯だ一つ面白い話がある。

それは明治十五年の事である。岐阜地方の有志家が當時自由黨の總理であつた。板垣伯を招待して富茂登村の中敎院で演說會を開いた。その時板垣伯が演說を終へて中敎院の玄關に出て今歸りかけた一刹那一人の凶漢が顯はれて『國賊ッ』と叫び樣短刀を以て突きかゝつた幸に胸を一個所刺されただけで凶漢は取り押へられ板垣伯は旅館丸井屋へ引き取つた。『例の板垣死すとも自由は死せず』と言つたのは即ちこの時である。凶漢は相原尙聚と云ふ名古屋の者で或る小學校の敎師であつた。何か板垣伯の自田平等論を誤解して國体を傷つけるものと思つたのである。此の凶變が名古屋に傳はると愛知病院長たる後藤男は早速愛知縣知事と共に馳せ付けて診察した種々手當てをして最早大丈夫と思つたから、引取らうとすると板垣伯が、

『貴君は何故政治家にならなかつたのですか』と尋ねた。自ら政治家の態度が其時既に具はつて居つたのであらう。

其の後內務省の衛生局に留る事が五六年で、明治二十三年に內務省から獨逸に留學を命ぜられミュヘン大學に醫學を研究する身となつた。

明治二十六年に獨逸醫學博士の學位を得て歸朝すると直ちに內務省衛生局長に擧げられた。然る

相馬事件嫌疑の爲め入獄す

に偶々相馬事件の爲めに嫌疑を受けて一旦獄に投ぜられたが間もなく嫌疑も晴れて出獄致したのである。

相馬事件と云ふのは舊相馬藩主の相馬誠胤といふ人が狂氣した爲に相馬家では止むなく之れを幽閉いたした。所謂相馬事件なるものは之れから始まつたので、錦織は自分が相馬藩士であるのを幸に舊相馬藩士を說いて密かに相馬家の財産を自由にしやうとかゝつたのである。即ち誠胤氏が幽閉せられると同時に次の樣な事を世間に觸れ廻つた。

『今度誠胤氏が幽閉せられたのは皆家扶、家令の謀り事であつて、その實誠胤氏は決して狂氣してはゐられない。彼等は不都合にも主家の財産を自由にする爲に故らに世事に通じない夫人を迎へて誠胤氏を怒らせて、それを機會に幽閉したに過ぎない我々舊藩士は主家の一大事を打ち捨てゝ置く譯には行かぬ。宜しく誠胤氏を助け出し奸佞なる家扶、家令を放逐しなければ止まない。』

斯樣に揚言すると共に一方には種々と其の方法を講じたのである。先づ世間の同情を得る爲に舊藩士中の名士を訪うて讃助を乞ふた。男もその相談に干與つた一人である。何しろ錦織のいふところは主家の爲にする義憤である上に其の態度が如何にも眞卒熱烈を極めて居つたので到底僞りとは思へなかつたのである。それ故男もそれは一大事ぢや打ち捨てゝは置かれないと云ふ處から彼樣したらよからう。此樣したらよからう位の讃助があつたのであらう。然し男はこの事件の落着しない内に獨逸留學の途に就いだのである。其の間錦織は誠胤氏の屋敷へ壯士を引き連れて闖入したり、或は巢鴨病院から誠胤氏を誘拐したり、其の他誠胤氏の腹異の弟順胤氏が家督相續をすればあれは家扶家令が勝手に廢立を謀るのだと謂ひ、遂に誠胤氏が死去せらるゝや、之れをもつて毒殺であると言つて葬式をさしとめ死体解剖の願まで出すに至つたのである。丁度其の時男は獨逸留學を終へて歸朝した時である。死体解剖の事は實行せらるゝに至らなかつたが、錦織は最早や我事なるとでも思つたのであらう。山口某といふ判事と相談して相馬家の家扶家令の惡事を列擧した密告狀を裁判所に出して置いて、それから堂々と告發に及んだのである。處が元々虛講の事實であるから一向證據が擧らない。却つて之が爲に陰謀が露顯して茲に十年の長き大紛擾も漸く終りを告げるに至つたのである。これが爲男も連累として一旦獄につながれたもの〻事實は全く前記の通りであつたので間もなく青天白日の身となつたのであつた。尤も之も爲に從來の地位は一擲するの止むを得ざるに至つた。

石黑男の淮薦 兒玉伯の知遇

然しこの一大頓座は却つて出世に原因したかも知れない。その後明治二十七年に日清戰爭が始まると當時野戰衛生局長官であつた石黑男爵が男を部下として衛生事務に當らしめたのである。然るにその技倆が非凡であつた爲め戰後再び石黑男

の推薦に依つて内務省衛生局長となつたのである。間もなく明治三十一年に伊藤内閣が組織された際、臺灣總督として第三師團長であつた兒玉陸軍大將が轉任致された。其の時兒玉大將が臺灣の民政長官として適當な人物はあるまいかと云ふ事を石黒男に相談いたされた。すると石黒男はそりや衛生局長の後藤が宜いといふ處から遂に男は臺灣民政長官となつて益々頭角を顯はすことに至つたのである。

醫者から一躍順然たる政治家となつた後藤男は臺灣に思ふ樣手腕を振つて漸く後藤の名天下に知らるゝに至つたのである。

日露戰爭後南滿洲鐵道總裁となつて滿洲鐵道の經營に從ひ幾程もなく男爵を授けられ名聲ますゝ盛んとなつた。當時既に將來の國務大臣たるべきを以て一般に目されて居た。而かもその豫想は事實となつて顯はれ明治四十年桂内閣の組織せられた際入つて逓信大臣となり、鐵道院總裁を兼ぬるに至つた。其後、寺内内閣に於て内務大臣の榮職に就き、更に轉じて外務大臣と爲り、其の無類の精力と縱横の奇才とを揮ひつゝあるのである。

第五　神田鐳藏氏の奮鬪經歷

私が獨立して紅葉屋の店を開業したのは明治三十三年二月であつたが、其時の資本金はたつた百圓であつた。その金も私が開業前二ケ月の間に奮鬪努力して得たもので、其外に穴錢一文もなかつた、斯くの如く僅少な資本であつたからして、固より店員や小僧を備ふ事などは出來なかつた。幸ひ當時家主の永井茂兵衛と呼ぶ義俠な老人に店補の保護を托する事が出來たので、私は店を外にして單獨に諸方を奔走して現物の注文を受け、其賣りと買ひとの適合を圖つて夜も碌々眠らずに働いた、併して頭の中には何うかして商運を發展さしたいものだといふ考しかなかつた。當時家賃二十圓を支拂ふと、其れでも一ケ月尙七八十圓の利益を擧ぐる事だけは出來た。

他より一文の補助を受けず

私は眞に私自身の力で今日の位置を開拓したものであるが、その話をするに就ては聊か先考の遺事についてお話しゝたいことがある。私の祖先は愛知縣海東郡須成村の出である。家代々酒造を業として居る。家の前には楓樹の大老木があつたので屋號はそれに因なんで紅葉屋といつてゐたのである。私の父は清三郎と呼んで紅葉屋の先代であつたが、商人に似合はず漢詩や和歌や俳諧の道に深く、號を楓谷といつて神波即山、森泰濤等の詩人とも往來して風流韻事を樂しみにして居た。父の性行が餘り神仙を帶びて居たので、海東聖人と誇名されて居た。子供は男女澤山あつたが、私は明治五年に其嫡男として生れたのである。

私の少年時代もともかくも順境に育つた。その内に青年の智識の盛んにもえ出す十七の時に、私は

虛榮の夢破られ東京に逃る

我國の酒造法を何うかして科學的に改良するの志を懷いたで、酒泉の名ある攝津灘へ行つて自ら身を奴僕の間に投じて酒造改良の研究に從事し三年目に家へ歸つた。

其れが多少鄕里の人望を得て海東郡酒造組合の副頭取に推されたが、然かも酒造改良の途は遂に何等の發見もなく終つたのである。する內に明治二十六年の事であつた。名古屋に株式取引所が創設されると、私の村の酒造家は擧つて株式仲買人に加盟したので、無論私もその一人になつた。間もなく日淸戰役後の株式狂熱時代に遭遇すると、私は忽の間に巨萬の富を得る事が出來たで、當時壯年の元氣盛んなる事とて、一日意氣揚々として家へ歸ると、父は私の成功を喜んで與れると思ひの外、却つて憂愁な顏色をして甚だ不機嫌であつた。當時父は私の爲に一首の和歌を詠じた。

老の世にあるかひなしと思へども
なきにはまさる折もありけり

果然父の一首は私の爲に讖籤となつた。財界には狂熱時代の反動が來たのである。明治二十九年以來の不況に陷つた財界の波濤は遂に私の虛榮の夢を遺憾なく破壞した。失敗に失敗を重ねて私は鄕里にもゐられなくなつた。その結果困憊僅に身を以て東京に逃れて來たのであつた。

それは實に明治三十二年の暮れも迫つた冬の寒い十二月の事である。私の一生に取つて其暮れ程寂しい落寞な日を送つた事はなかつた。日本橋區蠣殼町炭屋某の二階に徒に身を轉々さして居たが、過ぎ去つた日の失敗のみが追憶となつて吾知らず涙の出る樣な思をしたこともあつた。其年も暮れると明治三十三年となり、世間は新春を喜び帝都の春色も麗かであつたが、失敗落伍の身を抱いた私の眼には何もかも映じなかつた。で過去の失敗を挽回しやうと云ふ一念に驅られて、其年の二月に日本橋區坂本町の紅葉屋の一角を賃借して現物專門の看板を揭げたのである。私は過去に於ける一點の失敗から深くも省みる所があつた。即ち投機思惑の恃むべからざる事が骨にしみ〴〵感じたので、今後は專ら勤勉力行によつて自家の運命を開拓するの外はないと思つたのである。

炭屋の二階で懊惱中に越年

薄利が自己運命開發の端緒

創業當時の私は隨分辛苦艱難を忍ぶ事が多かつた。未だ東京市場の規則習慣に通じてゐなかつたので、動もすれば同業者の反感を招かうとした上に、僅かの資本は同業者と懇親を結んで意思の疏通をはかる事が出來なかつたので、終ひに意外にも取引仲間から排斥されてしまつた、然うなると私は失望落膽して空しく世の不遇を嘆ずるの外なく、一層救を先輩實業家に乞ふかとも思つた。然しまた思ふに此困難は一面に於て自分の試金石である。此困難にまけてなるものかと云ふ元氣を出して、私は更らに施策を明かにして奮鬪した。その時の私の主張に曰く「客と客との間の仲立取引を行へば强がち市場

の仲間に入らずとも我立脚地を見出し得べし」と、此決心は爲めに同業者が薄利として取扱ふものを厭がつた公債の取引に向つて全力を傾注せしむるに至つた。而して其が不思議にも私の運命を數展するの端緒となつたのである。

四面楚歌の中にあつた私には尙世間に多少の同情者があつた。故人今村清之助氏は私が名古屋時代に知人であつた。で私は開店當時氏の援助を求めると、表面はそれを峻拒しながら、陰に其家人をして人知れず巨額の公債をもたらして取引を振作さして呉れた。又株券に存つては岩田作兵衛君、故米倉一平氏が初めて藏玉石油株の注文をよせられて店が聊か振ふことが出來た。故西脇長太郎氏は私が冷飯草履の質朴な風采で現物の注文を取つてゐるのに同情して、佐々木勇之助君その他に紹介して呉れた。又た市原盛宏君も私の爲に第一銀行の當座取引を開いた一人であるし、根津嘉一郎君も尠からざる同情をしてくれた。家主の永井茂兵衛君は前にもいつたやうな奇俠な上に義氣にもとんでゐた。此人は私が創業時代に非常に世話になつたが、今や故人となつて追憶に堪えない。

初めての公債大取引に成功

公債の取り引きに殆んど主力を傾注した私の努力は、漸くにして遂に財界の要路に認識されるやうになつた。明治三十五年五月に、或る有力な方面から大注文を受けて、整理、軍事諸公債の大買收を決行したが、之が爲に公債市價を動かして五圓餘の騰貴を見るに至つた。私が其時買收した總額は實に七百萬圓の巨額に達したので、取引仲間も私に目を欹てるやうになつた。世間では兎角私の事を色々にいつて私が大官から機密でもきいて行動するやうに思つて居るさうだが、盲目も甚しといはねばならぬ。私が今日多少でも世間に名を知られるやうになつたのは、明治三十八年に公債を海外へ大輸出を行ひ續いて四十二年にも鐵道國有の結果追つて國債に交換せらるべき鐵道株及び多額の公債を海外へ輸出したのである。私は初めより營業の方針を現物の取引において來た。この方針に從つて十年一日の如く今日迄働いて來たのである。

私が今日までの經驗によると、事業なるものは決して自己の利をはかるのみで成功するものではない取引をするに當つても、先づ自分の利を計るよりも先方の利をはかる事を心掛けねばならぬ。人の利益をはかる事は巡て自分に報ひて來る事になるのである。又た事業をするには如何なる場合でも、其れに面白味を持たなかつたら決して成就するものではない、自分のやらうとするものに趣味をもつてこそ、初めて熱心も誠意も湧いて來るのだ。其誠意と熱心とは巡て心を動かし人の信用を博し得ることになるのだ。苟も自分の事業に惰氣漫々として厭々從事してゐたら、天下何人か其人を相手にするものがあらう。私は常に世の青年に對しては、只誠實なれと望んで居るものである。私は現今決して自分のベストを盡して居るとは思ひ得ない。即ち意餘つて行足らずの感を禁じ得ないのである。創業當時は私は其時の實行よりも十倍の目的を持つてゐた。今は今で實行よりは又十

凡て望みは大なるを宜とす

倍の目的を持つて居る。思ふに世の中の事は思つた十分の一しか實行されないものではあるまいか、この故に私は須く人の目的は實行の十倍なれと云ひたい、換言すれば人は望を大きく持たねば、到底大きな事業を成しとげ得ぬのである。而して人は力の續く限りは働かねばならぬ。若し心に大望をもつたなら、人は幾ら働いたからと云つて決して自己の勢力に滿足の出來るものではない。今日は昨日よりも不足を感じ、明日は今日よりも不滿を覺えさせる。この不足と不滿とは、不識不知の間に自己を鞭撻し奮勵さして行くのだ。不平のない人間は役に立たぬと云ふのは其處を云つたのであると信ずる。

第六章　錬膽養氣論

第一　新渡戸稲造博士の勇氣修養論

正を守りて怖るること勿れ

第一に勇氣の修養に必要な心得は『正を守りて怖るゝこと勿れ』といふセークスピーアの名言を守ることが大切である。『正を守る』といふことは勇氣の根本で『怖るゝ勿れ』は即ち勇氣である。正を守ることは勇氣修養の最大條件で、正義に基礎を置かない勇氣は匹夫の勇である。猛獸的である。只自分の意志に任せて勝手に振舞ふのである。それなれば其邊に居る獸にでも出來る。人足にも容易いことである。

修養も何にも要らぬことになる。真の勇氣は、そんなものでない、何處までも正義を守つたものでなければならぬ。匹夫的に力むが真の勇でないことは、古人も繰返し繰返し敎へて居る。

命をばかろきになして武夫の
道より重き道あらめやは

とは源致雄の戒である。正義を基礎とした勇氣は死といふ者に逢ふても怖ろしくなくなるカーライルも『死を面前に怖れずに見るを得ば、他に怖るべきものなし』と言つて居る。義を守るやうにすることが、勇氣修養の第二歩である。論語にもある如く、義のない勇氣は亂をなすか盜をなし、危險である。されば孟子も『自ら反みて縮からざれば褐寬と雖も吾惴さず、自ら反みて縮ければ千萬人と雖も吾往かん』とある。恐らく真の勇氣は斯自ら反省して縮き場合に出るものであらう。

最後の窮極する所を推測す

第二法は或事をするとき、又は或出來事に出逢うたとき、これが極度にまで達したら如何に成行くであらうか。最後の窮極する所は奈邊に達するであらうか。それを考へて見ることが大切である。例へば對岸に火事がある、もしあの火が自分の家まで來たらどうするか其時の決心をする。妻が風邪にでも罹つたときモシ是が惡くなつて、遂には回復せぬかも計られぬ。又自分が病氣に罹つた場合にもその爲めに再び起たぬことにもなり得る。其時には如何に決心するか。斯樣に先まで考へることは、早まり過ぐ

るかも知れぬ。併し其代りにこれだけ決心して居れば。病氣が進んだにしても敢へて狼狽することがない。家が類燒しても騷ぎ立つることがない、無論かう考へ過すことは危險なことがないではないが、是だけの覺悟をして置けば、不幸にして病が重くなつても、はた又家が類燒しても驚かない若し病氣が恢復したなら、其は拾ひものと思つて居る。人間は惡い狀態にあるのが當然で、都合の良いのは望外と思はなければならぬ。僕は三度の飯さへも、自分には食ふ權利がない、それが喰へるのは有がたいと思つて居る。斯う云ふと自分は君子を氣取る樣に思ふものがあるかも知れぬが、君子はモット高いことを考へるだろう。然し有体に云へば、僕は三度三度さう感じて居る。而して食事の時には頭を下げ、かうして滿足に飯の喰へるのは、有難いと感謝する。耶蘇敎の人も食卓に就て默して頭を下げる。而してその時には彼等は必ず神に感謝する。少し世間を見渡せば飯が喰へぬものが、何萬人あるか知れぬ。然るに自分は食ふに困らずに居る。時には相當なものさへも口にすることがある。飢じい目をしたり、苦しい目に逢ふのが當り前なときに、斯うして居られる。有がたいと思ふ。從つて僕は食事に關して彼是れ苦情を云つたことは未だ一度もない、要するに良好な事は自分にとつては勿体ない事で、コンナ好い事は永く續く筈がない、いつも自分に惡い時が來やう。その時にはどうするかを考へて、早く決心する。從つて何事につけても、怖ろしいといふことがなくなる。

都合の惡い時は其裏を見る

第三の方法は右に述べた事と正反對の樣だが、都合の惡い時に其裏を見るのも大切である。西洋の詩などを見ると、『眞黑の雲の陰に銀の裏が著いて居る』と、形容したものがある。黑雲漠々として天の一方を覆ふて居るときに、其端々に白い雲が見えることがある。あれを見るとハハ太陽が輝いて居るなと思はれる怖ろしい黑雲の裏面にも、輝いた光がある。あの黑雲を破つて行けば、輝々たる光明に接する思がする。孟子が『天の將に大任を此人に下さんとするや、必らず先づ其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、其髮膚を餓えしめ、其身を空乏にし、行、其爲す所を拂亂す、心を動かし性に忍へて其能はざる所を曾益する所以なり』と云ふたのも此意味である。聖書にも『神は愛するものを苦める』と云ふてある。神は人を叱ることもあるが決して叱りばなしにするものでない。叱るのは叱る甲斐ありと見るからで、其裏面には深き愛情が罩つて居る。故にセッパ詰つて愈よ今度で駄目だやと思ふ時、一大勇奮すると、年來の苦悶も何もかも瞬く間に消滅する事がある。斯云ふ時が死生の境界だ。膽を落せば地獄。氣を昂むれば極樂往生、一ッ飛べば昇天、一足外せば墜落の時である。斯く困難は却て他日快樂に達する前序であると思へば、困難に逢ふても少しも落膽することなく却て愉快に勇氣が湧き出る。

第四の方法は稍や姑息的で、笑ふものもあらうが、然し僕の如き、生れつき臆病な人には利き目が

最極の苦痛の來襲を相像す

あると思ふ。それは最も烈しい苦痛の來襲せることを想像し、有ゆる惡が來たときのことを想ひ浮べるのである。例へば大火事があつて、家が全焼した。家族は總て焼死してしまふ。自分も重傷を受けて、生命が危篤となり、取り敢ず病院に擔ひ込まれる。何かの事故で今の職を免せられ、明日からは收入の途がなくなる。而して或誤解からして不都合な評判が擴がり、警察に拘引される。こんなことになつたら自分はどうなるであらうか、と頭腦に想像して浮べる。是は感情的な人でなければ、想像されぬことである。僕は自分で之を想像すると、身は忽ち其境遇にあるやうに感せられる。素より其樣な不祥なことが連發する事は、通常はあり得ぬ事ながら想像すればあり〳〵と、其光景が目前に髣髴して來る。又船に乘つたとして、難船に逢うたらどうか…其から其へと、悲慘な事情を想像すれば實際其局に在る樣に思はれ、覺へずブル〳〵と身が慄へる。而して今の境遇を之に比ふれば殆ど比較にもならぬ。此位のことに堪へられぬことがあるものかと思ふと勇氣が自然に起つて來る。第二に擧げた方法は、災難に逢うた場合に窮極する所を考へるのであるが、是は全くの空想に止まる。事實も何もない、斯樣な場合があつたらば……と云ふに過ぎぬ。二者少し異うて居る。斯うして最も恐しい場合を假定すれば、それよりも遙か優れる今日の困難苦痛に對し、之に打勝たんとする勇氣は自ら出て來る。

偉人傳の讀書と勇氣修養法

偉人の傳記を讀むことも、亦勇氣を修養する一方法である。若し之を讀んでかう云ふ場合に、此人はかういふことをしたといふことが解れば、其に倣はんとする心が起り、あの人が行つたことであるから、自分も出來ぬことはないと、惰夫も振ひ起る。偉人の傳記は中々人を感化する力を有つて居る。勇氣を鼓吹することが大きい、世の中に出て、名を擧げ仕事を成した位の人は必ず勇氣がある。勇氣のない人に仕事の出來る筈がない。從つて必ずしも偉人豪傑の傳でなくとも、多少世に出た人のであれば、讀んで勇氣を養ふ補助となる。『彼も人なり、我も人なり、堯舜何んぞ』といふ考が勃然として起つて來る。

第二　豊川良平氏の元氣振興譚

維新時代の混亂と志士氣風

天下鼎の沸くが如き嘉永安政の時代が、丁度予の七八歳、そこで予の青年時代と云へば世の中の秩序が全く亂れて仕舞つて、恰かも百鬼夜行の有樣、その無味な事と云つたら

下駄は三分で刀は二朱よ、女迷はす一つ橋
長州征伐は女の夜働ひ、行けばやらるゝ置かしやんせ

恁んな俗謠の流行つて居つた時代であるから、將來社會に立つて何う云ふ事業を遣らうとか、斯樣な方針を取つて進まうとか、組織的に先々の目的を立てゝ遣つて居つたものは一人もなかつた。唯醫者と商人だけが自分の方針の分つて居たと云ふ位なもので、その他の者は多く時勢に連れて、ボンヤリ遣つて來たと云ふに過ぎない、岩崎彌太郎さんが、此の時勢は元龜天正の大亂を繰り返へすと見込みを付けて、專ら北條早雲を氣取つて、『治世の能吏、亂世の英雄』を自任して起たれた樣な次第で、その混沌たる有樣は、到底今日を以て律し得べきものではない、今日五十年前後の人は已に實業とか、政治とか各專門的の業務に從事して居るけれども、その最初は唯食へないから何か遣らうと云ふ譯で、それ〴〵職務にあり付いた位のものである。

其の當時の青年武士の元氣

恁んな無茶な混亂の時代であつたけれども、嚴しくする處には、又非常に嚴しく遣つたもので、當時父兄先輩の敎訓が、第一は決して人に嘘を言ふな、第二は人の物を盜む事はならんぞ、第三はいざ事あらば命を的にしてかゝれ、此の三ケ條は最も嚴しく敎へ込んだ。若し苟且にも嘘を言つたものは、仲間で以つて直ぐに擲り付ける位で面々に氣魄を養つて來た。其頃の青年から見れば今日の青年は何と言つても元氣が足らぬ。意氣地がない。

當時江戸には各藩の寄宿舍見たやうなものがあつて、士族の青年は皆此處に合宿して居る。所が一日予の寄宿して居る土佐藩の寄宿舍で恁云ふ事件が起つた。同宿の一人が夕方散歩から歸つて來たが眉間に傷を負ふて居る。そこで『何うしたのだ』と訊けばその男が『實は今日上野を歩いて居た所が何處の藩の武士か知らないけれども、散々田舍の百姓を苛めて居る。そこで己はその仲に這入つて『つまらない百姓を相手にするな』と止めてやつた、所がその武士が今度は己れに掛つて來てとう〳〵此の通りに傷を負はされた、實は一刀の下に斬り付けてやらうかと思つたけれども恁んな奴を相手にした處で仕方がないと、そのまゝ歸つて來た』と談す、サア仲間の者が承知しない『傷を負はされて、そのまゝ歸つて來るとは卑怯千萬、何故相手を殺して仕舞つて來ないか、貴樣のやうな意氣地なしは土佐藩士の名折れぢや直ぐに腹切れ』と迫まる。その男は無論辯解もせぬ、爭ひもせぬ『そうかそれでは切腹する』と云つて直ぐに刀を引き拔いて、腹を眞一文字に搔き切つた、そして『介添して呉れ』と賴む『貴樣のやうな卑怯者を介添しては刀の汚れぢや』と云つて、仲間の者はその男に布團を被ぶせて、とう〳〵押し殺して仕舞つた、今日から言へば實に野蠻極まる亂暴な仕打ちかも知らない、けれども當時一般の氣風が如何に元氣があり、氣魄があつたかは、此の例に依つても知ることが出來やう。

事業遂行と不撓の精神氣魄

予のその頃からの友人西原清東君は、日本に居た時にも辯護士として、又兼議院議員として、錚々たる名は聞えて居つた。自ら妻子を連れて

キサスに渡つて百姓を初め、今は大に成功して居る、一昨年一寸歸つて來た時に、七十になる父と六十になる母とを連れて又出掛けて仕舞つた、非常に元氣な男で、その意志の鞏固な事には予も感心して居るが、之れだけの氣魄があるから、他郷に行つても克く成功することの出來たものだと思ふ。考へて見るに今の青年は餘程元氣が乏しい、命を的にして事に當る程の氣魄は殆んどない、如何なる困難に出遭つても、毫も辟易しない丈けの元氣が十分になくては、一事業を經營して之れを遂行することは到底出來ない、予は今日色々若い者を世話して居るが、元氣を注入することに就て一番苦心する。我々青年時代では周圍が皆元氣だから、唯獨り無氣力、意氣地無しで居ることは出來なかつたけれども、今日では周圍が皆婦人老人のやうな考へのものばかり、何うしても優柔不斷の人間になつて仕舞ふ。

小供の玩具と元氣養成方法

其の頃では專ら元氣を養ふ手段として、今日の青年が戀愛小說などを讀んで面白がつて居るとは違つて、太閤記とか、三國誌とか、靖獻遺言などを愛讀し、日本外史中の護良親王が鎌倉の土牢の中から後醍醐天皇に奉つられた上奏文とか、太平記の俊寶朝臣の東下りの歌などは、皆暗誦して始終繰り返へして喜んで居た。それから『殺身爲仁』とか『見義不爲無勇也』と云ふ樣な句は、一時も念頭を離れたことはなかつた。尙小供には、『百將傳』と云ふ書物から切り取つたトランプのやうな玩弄があつて、秀吉とか、清正、光秀、眞田幸村、楠正成、色々の豪傑合せをする、忠臣ほど點が多いので、光秀は秀吉に勝てない、家康も清正に會へば負けると云ふやうに、規定があつたが、この豪傑合せが非常に流行つて居つた、凡べて子供の時から忠膽義烈を薫陶したもので、優柔不斷や、卑屈破廉恥は、極力排斥された、周圍一般の風習が恁うであつて、その中に生ひ立つたのであるから自然氣魄に富み、元氣の旺んなことは到底今日の青年の比ではない。

第三　上泉德彌中將の蠻勇論

剛德の氣象といふことが近時殊に軍人側から唱へ出されてゐるが、眞の勇氣、眞の元氣は何から生れ出るものであるか、編者たま〳〵滿軍中將上泉德彌氏の蠻勇論一篇に接した。學者宗教家の言ふところも亦一種變つた特色があり、眞に內に盈ち外に溢るゝの言、一辭一言の裏に尙將軍の風牛人格を髣髴させるものがあるから拙に之を紹介することにした。

勇氣は理想變現の一大動力

顧つて考ふるに意志の薄弱なる者、如何に努力せんとするも眼前に横はれる大なる障碍を見る時に慄然として身を震はすに違ひない、折角の理想も爲めに外に實現されずに終はることが多いのである。故に努力はどうしても勇氣の力を借りて來ないではならない、大西鄕曾て謂へらく『斷して行へば鬼神も避く』と、希望を滿足し、理想を實現する一大動力は實に勇氣其物である『義を見てせざるは勇なきなり』と言はれてゐる如く、勇なきものは義を知るも之を行ふ事はできない、『世に不可能といふこと無し、

不可能は弱者の辭典にある言葉なり』とは、大ナポレオンの有名なる言葉である。要するに如何ほど善事を考へてゐても、勇なくんばこれを實行することは出來ない『荊棘路に當らば、鋤きても往かん、山澤前に横はらば、躍つても越えん、千艱も來れ萬難も來れ、吾れに唯勇往あるのみ、邁進あるのみ』との勇氣が日蓮に起らなかつたならば、彼も一介の凡僧となり了つたであらう。釋尊に捨家禁慾の大勇猛心がなかつたならば佛教は此の世の中に生れ來なかつたであらう。斯の如く觀來れば實行の母は勇氣なることが歴然とするのであらう。されば古來我が東洋に於ては、勇と智、仁と並び稱して人間の三德とし西諺に於ても知慮、節制、正義の外に、此勇氣を加へて以て四大德と爲す所以である、勇氣の必要を認むること期せずして東西相一致してゐる。その價値の大なるものなるは多言を要しないのである。

勇氣の種類と勇氣の眞意義

一概に勇氣とは言ふものゝ、勇氣にも色々ある。大勇あり、小勇あり眞勇あり、虛勇あり、沈勇あり、豪勇あり、術勇あり、壯勇あり、武勇あり、猪勇あり、血氣の勇あり、匹夫の勇あり、而して蠻勇も亦其一である、何が大勇で何が小勇であるかは今更説明する迄もない。また如何なる勇を取つて如何なる勇を捨つべきかの問題も常識さへあれば判斷の出來ることで茲に呶々するの必要はあるまい、唯青年は動もすれば感情的な勇氣に驅られて飛でもない事をし出かす傾きがある。これ即ち血氣の勇であつて慎まなければならない所の勇氣の一つである。所が、こゝに列擧した樣々の勇氣の中で、是非共諸君にすゝめたい勇氣がある、否現今の如き生存競爭の猛烈な社會に處するには是非共是に據らなければ努力を促進せしめ得ざる勇氣がある、然らば其勇とは何ぞや、是即ち予がこゝに述べんとする蠻勇なるものである。蠻勇は近來の新造語で、餘り好い意味に解釋されてゐないやうである。これは畢竟野蠻といふ言葉が、惡意に解せられてゐるから起つたことで、私の所謂蠻勇其者は決してそんな意味ではないのである。固より事の正邪を問はず、方法の善惡を擇ばず、是が非でも我意を貫き、我執を通さんとする暴力妄斷を蠻勇といふならば、蠻勇は害こそ來たせ利は齎らさない、吾等は極力是を排斥しなくてはならない、何となれば其動機に於て沒常識であり、我利的であつて、其結果に於ては徒らに、秩序を紊亂し、平地に波亂を起すからである。孔子も『君子に勇ありて禮なきものを惡む』とか『仁者は必ず勇あり、勇者必ずしも仁ならず』とか云つて仁義禮讓の伴はざる匹夫の勇を斥けて居るもこれが爲である。然れども冷靜なる理性の判斷に依り、道理ある事を適法の手段に依つて遂行し決行せんとするに當つて大いに蠻力を發揮するのは決して非難すべきことでない、否寧ろ青年諸君に薦めねばならぬことである。蠻力と云へば聯想が惡いが換言すれば獅子奮迅の勢を以て自己の運命を開拓せんが爲め、新天地に勇往滿進するの勇氣を云ふのである。然るに徒らに君子を氣取り聖人を眞似て、紳士でござれの、一等國民でござれのと、殊更に上品振たり、優雅振つてゐては個人としても

また國民としても、到底競爭場裡に立つて行けるものではない、『威あつて猛からざるは』吾輩の理想とする聖人君子の勇なれども、俗人には俗人らしき蠻勇で結構である。人格の光の向上するに從つて、蠻勇の眞價愈々騰り、似而非君子、似而非聖人の文明を遙かに凌ぐに至るのである。

國家勢力の基礎蠻勇に在り

凡そ國家の勢力は國民の元氣にある。元氣を鼓吹するものは勇氣である富では無い。黃金ではない、國民に元氣さへあれば、如何なる大軍の來り攻むとも心配することは無い。宋を亡ぼし高麗を從へた所の元の大軍十萬餘騎を迎へて尙よく是を擊攘し得たのは果して神風の力であつたらうか、天祐のおかげであつたらうか。否々さうではない、國書の辭、不遜なるを憤つて敢て是に答へざるの元氣あり。牒辭の無禮を怒つて元使を龍の口に斬つた蠻勇あり。手兵八千を率ゐて二萬餘の敵にあたり、一族鬪死してひるまざる猛勇あり、輕舸に乘じて賊艦を襲ひ、これを燒棄して歸れる剛勇があつたればこそである。これに似寄つた實例が、明治の初年にあつた有名な生麥事件が突發すると間もなく、英艦は鹿兒島灣に來襲したのであるが蠻勇を以つて誇れる時の薩摩隼人、彈一つに日本刀をぶち込み小舟に乘つて巨艦にあたり、首尾よく擊退したばかりか敵艦の碇りまで分捕つた、黑木大將の如きもその中の一人と聞ゐてゐる。若し北條時宗にしてこの蠻勇なく、薩摩隼人にしてこの元氣なくば吾等はもつと遠つた歷史を有することになつたかもしれない。幸にして今日の國運を招き得たのは一に國民に此蠻勇があつたからである。故に國家を富岳の安きに置くは、四十二糎の巨砲でもなければ、ドレッドノートの巨艦でもない、要するに國民の蠻勇である。元氣である是を措いて他に我國の守護者は無いのである。

獨逸の蠻勇と英佛の國民觀

蠻勇が國是として最も確實なる事は目下の歐洲戰爭に於て見る事が出來る。今日獨逸が四面楚歌の中にありながら猶よく敵をして足一歩も國土を蹈ましめず、英佛米伊白日の聯合軍を威壓し、北露國を擊破し東バルカンに轉じては、また英佛塞國の軍兵を追ひつめ、稜々として武名を天下に轟かし萬國の膽をして寒からしめてゐるのは、一に獨逸遠大の理想あり、國民に旺盛なる蠻勇ありて、其元氣遙に敵國民を凌駕してゐるからである。科學の進歩、學術の發達も亦其主なる原因ではあるが、武器戰術如何に優れて居やうとも、これを使用する軍人にして勇なくば、銃も銃たらず砲も砲たらず、とてもあれだけの大活動は出來ないのである。獨逸には今も尙青年間に決鬪の蠻風が行はれ決鬪の創痕は青年の名譽とせられて居る程で國民に蠻勇の旺盛なることは云ふまでもない。

反之、英國を見ても、佛國を見ても、國民の氣風は非常に趣を異にしてゐる。英國民は紳士とか紳士的とか云つて得意がつてゐるが、今は早や單なる形式主義に流れて眞意を失つてゐる傾がある、皮膚な表面的なものになつてゐる。バーナード、ショオノ作に『人と超人』といふのがある、其の中

に出て來るラムスデンといふ老紳士やジョージ、ギシングの短篇『几帳面な父』のウイストンなどゝいふ型の紳士は、英國通の人の話によると、ザラにあるさうだ。これらに依つて考へても、英國民は保守的な進取の氣風に乏しい精神の爲めに發展を阻害されて、行詰つてゐるといつてよい。徒らに舊習慣に囚はれ新思想を批判翫味せず單に是を氣嫌ひして、自由を尊重しながら、青年の自由なる發達を抑壓し、青年の蠻勇を匡めて早く小紳士に作り上げ、紳士倒れをした傾きがある。佛蘭西は、文明を以て世界に誇つてゐるのだが、其文明は疾に爛熟して、今や腐敗してゐる。巴里の如きは文明の中心ではなくて、華美華麗なる流行の中心である。殊に今や田舍者と惡口してゐた獨逸人の爲めに手痛い目に會はされてゐるではないか。是等の實例を見ても如何に蠻勇の心要であるかゞわかる。

個人の發展も亦蠻勇に在り

大にしては世界、小にしては一家に於ても平和は吾等の理想である。最後の目的であるけれども、人生の實際は決して平和ではない、人間の生活から爭鬪といふことを除去するは絶對に不可能である、萬人悉く聖人君子なるならばいざ知らず、九千九百九十九人までが否、萬人悉く皆俗人ばかりである限り戰爭を否定することは出來ない。殊に現今の如く國民的民族的生存競爭が劇しく、國際の間に德義の重せられざる時代に於ては、猶更の事である。せめてプラトーの主張せるが如く、哲人が政を調理するの曉に至らば或は多少これを減少し得べく、若干平和論者を滿足せしむることが出來るかも知れぬけれども、まだ〳〵百年や二百年の將來には出來さうにもない、況んや國際戰爭以上の人生の戰爭の終熄する期に到來すべくもない。武器取つて、血を流すことのみが必ずしも戰爭ではない。生存競爭、優勝劣敗といふより以上に悲慘な事實がある。其の事實とは何ぞや即ち商戰である、商業の駈引には、戰場に於ける將兵同樣の苦心が費されてゐる。近代の商業界に立つて、一旗擧げやうといふ程の野心家には、戰場で兵士が彈丸雨飛を恐れぬだけの勇氣がなくては覺束ない。今は人の生膽を拔きかねまじき形勢であるから氣の弱い考ではとても生きて行かれない、まご〳〵してゐれば踏み仆されて了ひさうである。然るに近來の青年は口を開けば試驗を云云し、さもなければ就職を訴へてゐる。こんな事では青年の前途のみならず、我が國の將來が案じられる。日本は世界列强中の新參者であつても、我が國の將來は、益々多忙である。青年の成すべき仕事はいくらもある。それに一度や二度の失敗に懲りて、試驗難や就職難を云々するやうではその人の成功は實に怪しいものである。是非とも强い忍耐心を以て突進し、勇躍して大飛躍を試みなければならない。

勇猛なれ、我が愛する青年よ
勇敢なれ、我が愛する青年よ
予は現代の青年を見る毎に、常にこの二敎訓の必要を感ずるのである。

英雄豪傑と不拔なる信仰心

何事も內部に堅忍の精神がなくてはならぬ事は勿論であるが、意志を鍛錬するには逆境に立つ事が最も宜いかと思ふ。父母から學資をも貰はずあらゆる辛慘を嘗めて苦學して來た人は世に出ても間に合ひ、仕事をせてもあきが來ず、如何なる艱難に出合つても挫折せずにやり通すが、順調に行つた人は動もすれば仕事に倦み、些細な困難にすら打ち勝つて行く事が出來ないやうである。肉体でも、井上侯の如く毎日水に入つて刺戟すると、皮膚の抵抗力を强くし、黴菌などが來ても容易に冒されないだけの强健な身体となると同じく、精神もまた逆境と戰つて鍛へ上げて來たのでないと、何うも堅固な處がないやうである。

しかし唯だこればかりでなくも一つ人には信仰と云ふものが必要である。信仰と言へば直ぐに佛敎とか基督敎とか云ふやうに宗敎上の事の樣に聞えるが、こゝに云ふ信仰は必ずしも宗敎上の信仰に限つた譯ではない、學術でも事業でも何でもよい、この事はやりさへすれば必ず出來るものだ、成しとげ得らるゝものだといふ信念即ち確信が大事である。此の確信さへあればそれで充分である。苟もこの確信さへあれば、如何なる困難に出會ふとも、これを押し切つて行く丈の勇氣も自ら出で、從つて忍耐力も生ずるもので、猛烈なる意志も實にこの信仰によつて養成せらるゝのである。總べて英雄豪傑の事業は皆この信仰によつて成就せらるゝのであるが、殊に宗敎家に於てこの著しい例を見るのである。佛敎でも基督敎でも、東西何の宗敎家の事蹟に就いて見るも、凡そ偉大壯烈を極めたものは、皆この信仰から來た猛烈なる意志の發現に外ならぬのである。

鑑眞和尙日本渡來の事

暫く佛敎家の方でその例を擧ぐれば、彼の鑑眞和尙の如きその適例と思ふ。鑑眞和尙は唐朝の人であるが、日本の大平勝寶六年正月十一日に日本に渡つて來て、日本で律宗の開祖となつた。此の人が支那から日本に來る時など、五回失敗して十年間かゝり六回目に漸くその初志を貫徹して居る。鑑眞和尙が何故日本に來る志を起したかと云ふに、當時日本から榮叡、普照の二人が支那に留學して居て是非とも日本に行つて貰ひたいと懇望した結果、此の二人の志を諒として日本に來て布敎せんとの志を決したのである。然るに當時は航海の術も極めて幼稚ではあり、舟を造る技術もまた進捗して居ない頃の事として非常に難船が多い。形容しすぎて居るのかも知らぬが、その頃の文書などを讀んで見ると、風波も今日よりは餘程荒かつたやうに思はれる。そこで鑑眞和尙の同盟や、知人は日本に來る事を非常に止めたが、志を決して廿一人の同勢で舟や食糧などの準備をして日本の聖武天皇の天正十五年、支那の天寶二年六月、五十六歲の時に先方を發してゐる。

然るにこの時は風波の爲でなく、海賊の爲めに妨げられて來る事が出來ず引きかへして、更に同年の十二月第二回の準備をしてのへて出帆した。然るに今度は風濕の爲に舟を破壞されて了つた。然かも尙ほ志を屈せず、舟を修繕して第三回の渡航を企てたが、また同じく暴風に妨げられ、その翌天平十七年にまた渡航を企てたが、今度に危險を冒すからでもあるが、官から押えてやらぬ事にした。

然し尙ほ之に屈せず、種々の苦心をして準備を整ひ、天平廿年に更に第五次の渡航を企てた。けれども同じく中途で舟をこはして歸つて居る。殊にこの時は食物がなくなつて了つて擔水を飲んで居たと云ふ程で、萬死に一生を得たとも云ふべき非常な

困難を嘗めて居る。その上鑑眞は五回目の失敗をした頃に目を患つて盲目となり、數回の失敗に精根も盡きはて、了ひ、學徳はその間に死ぬる。僅に一人となつた書記とも、あれがついて居るから、鑑眞が渡航を思ひ止まぬのだ、別れまゐるが宜いといふ事になつて遂に之とも別れまゐられたが、然も鑑眞は尙ほ初志を飜さうとせず、益々渡航の準備に熱心して居た。

幾るに幸ひなるかな、天寶十二年日本から遣唐大使として藤原清河、副使として大伴宿禰及び吉備眞備、阿部仲麿などが支那に行つた。遣唐使の一行は幾度か日本に渡航せんとして常に失敗し尙種々苦心して初志を貫徹せんとして居る僧侶あるを聞きて氣の毒の念に堪えず、朝廷に奏して自分等の船に載せて伴つて來た。斯くて孝謙天皇勝寶正月十一日大宰府に着し、二月一日難波に着いた、其の時鑑眞和尙の年齡は六十六歳で、初め志を決してから六回目、十年かゝつて初めて志を果たしたのである。到着後日本に於ては、孝謙天皇の非常なる御歸依を得て、奈良の東大寺に戒壇院と云ふが出來た。その頃では筑紫の觀世音寺戒壇、下野の藥師寺戒壇とこれを天下の三戒壇と稱し、そこに行つて戒を受ければ公然たる僧侶になれなかつた位で、鑑眞和尙が我が日本佛教の發展に盡した處もまた非常なものであつた。

これは單に一例であるが、總て宗教家のやつた事業は生命を賭してまでやり通すと云ふやうに意志の強い處がある。行基菩薩の如き、良辨僧正の如き皆さうである。而してそれが何から來て居るかと云ふに、これはその人の信仰から來て居る。俗に七轉び八起といふ言があるが、是れは到底信仰がなくてはやれぬ事である。實業家などが失敗に失敗を重ねても、尙ほ之に屈する事なく、益々勇を鼓して押し進んで行かうとするのは、畢竟毅然たる精神と、必ず一度はやり通さねばやまぬ、また必ずその事は成功すべきものだといふ確乎たる自信を持つて居るからで、此の信行がなかつたならば、彼等と雖も決して再び立つの勇は出ないものである。併しこの信仰があつても始終逆境にあつて之に耐えしのぶといふ習慣がついて居ないと、その目的を達する事は出來難いものである。

逆境は意志鍛錬の試金石也

要するに逆境は何人にも藥であるに相違ない、殊に意志を鍛錬するにはこの上もない試金石であるが、これを利用する事は頗るむづかしい。餘り久しく逆境にあると精神がひねくれて所謂旋毛曲りになるとか、不良少年となつて墮落するとか、種々弊害をも伴ふが、その害を受けずして利用さへ出來れば逆境は即ち順境であるに相違ない、中流以上富豪の子弟等が意志を鍊鍛せんとするには、粗衣粗食にあまんじ、俥や馬車などにも成るべく乘らないやうにして、冷水浴その他心身を苦め、精神を鍊り、志氣を振作鼓舞するの方法を講ずるがよい。近來は世の中が段々贅澤になり、中流の紳士などが子供を大切すぎる傾きがある。斯くの如きは獨り身体を虛弱ならしむるのみならず、意志をも薄弱にする。井上侯の時習舍の如き蓋し茲に見る處があつた結果で、試に必要な事と思ふ。概して言へば順境の青年より逆境の青年の方が幸福であるが、逆境の人も之を善用しないと其の害のみを受ける危險があり、順境の人もその誘導宜しきを得れば立派な人間と成り得るのである。涅槃經の中に病氣には、癒るにきまつたのと、どうしても癒らないのと、良醫、良藥、良看護を得れば癒るのと三つの種類がある、而してこの三種の病氣の中最も多いのは良醫、良藥、良看護を得れば癒ると云ふ病氣であると說いてあるが、これを人間自身の天賦に就て見るも、敎育誘導次第にて立派な人物となり、不良の徒ともなるべき中間のものが最も多いやうである。唯だ此の中庸の人の中にも天分に

厚薄あり、僅かの力をもつて行けるのと、最も力を盡さねばならぬのとあるは免れ難い所である。

總て宗教家でも學者でも大きな仕事をした人は大抵この貧苦の間に人となつたのが多い。

投出し辨天の事

彼の安然といふ人は平安朝時代に顯密の博士といはれた程の大家である。彼の實語教だとか、童子教だとか言ふものも安然の作だと言ひ傳へられて居る程の人であるが、この人の傳に、貧乏で困るので、三井寺の辨天に願がけをして、どうか福を與へて貰いたいと頼むと、辨天は足を投げだしてこの足を抵れ、さすれば汝が勉強するだけの學資を得させてやる、と云つた。そこで安然は非常に怒つて、辨天は女ではないか、女が足を投げ出すなどは甚だ無禮だ、もう其の足を退かせないと言つて、謂ゆる禁呪をした。そこでその辨天は終に足を引く事が出來なくなつて、今にその儘足を投げだして居るのが所謂「投げ出し辨天」として有名なもので今も三井寺に行くと存して居る。俗說ではあるが、兎も角安然が貧乏であつた事だけは事實である。如何に自分が貧乏で困るとは云ひながら、又如何に辨天に霊力があるとは云ひながら、不合理千萬の事は許さぬぞといふ強固なる意氣があればこそ、後年彼れだけの大名を傳したのである。

私も同じ學生でありながら私は飯を焚き風呂を沸して、他の者はこれを食ひ、風呂に入る、全く主從のやうな關係で、當時自分の不幸を怨んでゐたが、是れが私をして一層の奮發心を起さしめた如く、逆境に處してこれを利用し、多くの事蹟と功業とを建てたものは古來その數が少なくない、寧ろ成功した人は悉く逆境に處して鐵火の試練を經たものと言つても宜い位である。

之に反して權門、富貴の子女にして成功せる者は殆んどあるまい、是等の人は幸に父祖の遺産を守つて一生涯平穏に暮す事が出來ても金錢の價値をも知らねば絹物のよい事をもしらぬ。貧乏なものが自ら金を得て、之を使ふ事の愉快の價値多き事は到底彼等の想像だも及ばざるところである。そこで人間は權門富貴の家に生れる必要はない、斯くの如きは反つてその人の不運であるといふべき事情が澤山あると思ふ。人は唯働きの出來る身体を父母から受けたのが第一の幸福で、其の上を望めば普通の教育をして貰へばもう頂上である。それ以上の希望を起すは無理である。私は自分の經歷上青年の時を回顧して、當時不幸と思つた事が、却つて今日の幸福となつたと感ずると共に、父母からこの健康な身体を生育して貰つた事を深く喜んでゐる。そこで私は青年の人に向へば、誰れ彼れの區別なく、先づ普通の体格を父母より與へられし事を喜ばねばならぬと云ふ事を懇々話すのである。普通の体格を父母より貰つた以上は、此の上にこの出來る出來ぬは一は天運に依るといふ事が全くないでもないが、併し天運ばかりでない、又一は自分の罪であると云ふ事を自覺せねばならぬ。即ち自分の意志薄弱の罪であると云ふ事を思はねばならぬ事と思ふ。

第五　大隈老侯の精力持續法

精力主義は人間生活の根柢

精力主義とは——世人のよく口にする熟字であるが、一體精力主義とは何であるか、先づ此定義を下す事が必要である。我輩は別に學問上より研究したのでもなく、又境遇から研究したのでもないが、常識觀より概論すると、人間の生存は生活力が本、生活力の源泉は精力が本、即ち人間は先づ精力といふ活力に

依て生きて居るから、人間は本能的に精力主義である、あるべき者、精力主義は是人間生活の根本なりと云ふ事が出來る。

然らば精力主義の人とは如何なる人を指すか、我輩の解釋によれば、精力主義の人と云ふには、少くとも上の三つの特色がなければならぬ。

續力家の要素

(一) 常に現在の境遇に滿足せずして現在の程度より以上に改良進歩せしめんが爲絶えず精力を發揮する人。

(二) 己が仕事の分量に程度を設けずして無限に之を發展せしめんが爲に精力を發揮する人。

(三) 活動に期限を設けずして死に到るまで否死後までも精力の不滅繼續を確信して休止する所を知らざる人

眞の精力家は自彊して息ず

此意味から云ふと、或は目的を達し得たりと云ひ、或は我事成れり吾事終れりといふ人は精力主義の人でない。活動は如何に華々しきものがあつても、其人は精力主義の人であつたと云ふ事は出來ない、否、精力主義の人から見ると寧ろ薄志弱行、所謂小成に安んずるもので未だ人間精力の何たるを解し得ない者である。況んや唯單に仕事につかれないとか、三人前の働をすると云ふ事をもつて直ちに其れを精力主義の人であると言ふ能はざるは無論である。人間社會の仕事には先づ是で成就也といひ得る時期はない。例へば一の器を作る、其器成れば、是れで終れりといふ事に見えるが、競爭場裡では是が終りといふ事は出來ない、一の器成れば更に又之を改良する、改良成れば更にまた之を改良する。一つの終りは即ち一の始まりであつて順環端なし、宛も食事をするのと同じ道理である。食物をとれば生活が續く、生活が續くから腹が減る、腹が減るからまた食物をとる。人間の仕事も是と同じ理窟で、飯は一度食へばそれでよいといふ譯にはゆかぬのと少しも異らぬ。易に『天行健なり君子自ら强めて息まず』といふ語があるが、即ち日月星辰の無始無終に運行して際限なきが如く無限に繼續して精力を發揮する人にして始めて精力主義の人といふ事が出來る。

宇宙の大精力と人間の精力

胃頭に定義を下した如く、本來人間は精力主義であるべき筈のものである。精力は人間生活の根本である。さて然らば人間の精力は何處より來るものなるか、近世の科學は宇宙の森羅萬象を悉く科學の力によりて解釋せんと意氣込み、人間生活の根本に就ても之を科學的に說明せんとして居る。學者は有機物を解剖し、分析し、分析に更に分析を重ねて遂に細胞を發見し、而してその細胞をまた分析して一つの細胞は八百萬の原子から成立つて居ることを發見し、人間の生活力は此處から出るのであるといつて居る。殆んど造化に肉薄するともいふべき精微の研究であるが、然らば此原子中に含まれて居る

生活力は何處から來たかといへば流石の科學者も滿足する答に窮せざるを得ないであらう。我輩の見る所によれば宇宙に磅礴せる大精力あり否宇宙それ自身が精力の實在である。人間は此宇宙の大精力、宗教的に論ずると神とでもいふ大なる力を分賦的繼續的に享けて生れるのである。凡そ生あるもの皆この大精力の力を享けて居る。一匹の蚯蚓と雖、此大精力の力を享けて生活して居る。天工を奪ふとまで誇稱せる今日の科學が一匹の蚯蚓すら造り得ないのは即ち之が爲である。果して然らば精力主義は人間生活の根本であるのみならず、宇宙の大眞理である。

是を眞の精力主義と謂ふ也

斯くの如く人間の精力は宇宙實在の一部であるから、是亦宇宙大精力と共に永久不滅の力でなければならぬ。精力の繼續あつて茲に進化の理がある。人間の慾望は生存にある。寧ろ生存を豊かにせんと欲するに在る。慾望には滿足がない、壠を得ては蜀を望み、取ては進み、進んでは更に又取るのが慾望の本性である。此に於てか生存競爭が起る、而して生存は生活力の働きである。而して生活力の本は精力である。故に生存競爭は精力發揮である。自己の生存を豊にせんが爲、社會の生存を豊にせんが爲、國家の生存を豊にせんが爲發揮された其精力の繼續が即ち今日の文明を生み出したのである。文明とは生活の範圍を擴充する意義であるが、生活の範圍の擴充には際限がない。此に於て人間の精力は不滅である。此に至つて冒頭に定義を下した精力主義の人の意義が益々文明になつて來た。人間の精力は斯く不滅の物であるから、精力主義の人は不休不滅の活動をする人でなければならぬ。己が仕事に程度と期限を設けず死に到るまで又死後までも繼續して之を無限に發展せしめんとする人にして始めて精力主義の人であると名づくる事が出來ると云ふのは此理由に因るのである。

此理由によりて精力主義の人は、成功だと云つて滿足することがないと同時に、失敗だと云つて落膽することがない。何となれば彼は精力の不滅を信じて居る、無限を信じて居る。故に成功と云ふやうな人爲的限界を設けて、それを終りとする如きことはない。二は三の出發點である。三は四、四は五、斯くて底止する所がない。失敗もまた斯くの如し、精力無限の理より見れば失敗も成功の始りである。成功と失敗とは活道の途中に於ける道の高低の如きものであるから、此をもつて喜ぶにも及ばず無論悲觀落膽するにも及ばない。益々之を精力發展の機會としやうといふ考で奮然之に當るから精力を消耗する事なく、却つて其困難に打克ち又所謂失敗をも盛り返してよく所謂成功を到す事が出來る。人間は先天的に精力を以て居る。それが平生は現はれないが、困難に遭遇すると始めて集中され發揮される。精力の發揮は戰鬪行爲である。此戰鬪行爲を無限に繼續する人、斯の如きを精力主義の人といふのである。

我輩は精力主義の信者なり

飜つて思ふに、我輩は自ら、果してよく所謂精力主義であるや否やは知る處でないが、變化多き既往五十餘年來の生活を回顧すれば、境遇に

も餘義なくされ、又時勢の然らしめたる所もあらんが、要するに以上の如き信念覺悟及用意を以て自己の精力を出來得る限り發展せしめたき希望を以て、其生活を續けて來たのである。それで他人より見て非常なる逆境にも立ち又求めて艱難を招くと云ふ風に見えるとの話であるが、實は石の如き信念から逆境もまた精力發展の一里塚困難も亦是精力發揮の好機會なりと思ひ、却て研究的興味を以て之を處理して來たので、未だ曾て所謂失敗困難の爲に苦痛を感じた事はない。故に我輩は久遠の未來に絶大の一理想を懷き此理想に向つて精力を發展せしめて居るのである。或は自己の生涯の中には何等の仕事も成功せざるやも知れず、但し精力は不滅であるから我輩の一生中にならずとも更に煩悶する必要はない。自己のなし殘したる仕事は此を子孫に傳へ此を社會に傳へて以て何處までも人類社會殊に我が日本帝國の爲に此精力の無限の發展を期して居る。即ち我輩の此希望より して見れば、現時の我輩の如きは尙青年が其血氣の壯なるに任せて勇往突進するが如きものである我輩は宇宙實在の大精力を信じ、又人間精力の不滅を信ずるが故に、宇宙の精力と、我輩の精力は同化するものなるを信じて居る。而して此信仰は又我輩の精力を一層不滅ならしめる、其れ唯だ不滅なり、故に我輩は常に青年である。他日肉体の死が來る事あるも、それは本當の大往生である。彼の六十七十を以て、自ら其精力に制限を設き頽然とし老ひたりといふが如き輩に至つては、是科學上の所謂精力の萎縮といふべきものである。

我輩一家の精力充實持續法

さて此精力發展に就て我輩が常に注意して居る一家の精力持續法がある抑も物は停滯して動かなければ硬化する、宇宙の萬物常に清新なるは常に變化窮りなきが故である。故に硬化を防止する爲には不斷流動的に己れを持する必要がある。即ち體を保つにもさうである。心を修むるにもさうである。腦を使ふにも亦然り、凡て己れを流動的に持するのであつて、所謂物に凝滯しないのである。これが我輩の實驗より得、理論より歸結した不老長生術である、一体人世で最も活力の旺盛なる時期は嬰兒の時代である。其嬰兒の時代には骨肉筋血とも柔軟なること恰も搗き立ての餅の如きものである。それが段々生長し即ち精力の消耗するに從つて漸次に硬化して行つて、老人に爲つては筋骨の硬い爲に自分で自分の身一つを扱ひ兼ぬるに至り、最後に死んだ時は最も固くなつた時で、死んで少し經つと愈々硬化して足なり腰なりをヘシ折らなければ棺桶に入らぬといふ始末になる。

筋骨のみならず腦細胞もさうである。腦細胞の硬化するのは細胞菱縮に罹つたものである。血管もさうである。血管が硬くなると、其結果は心臟病を起し腦溢血にもなる。即ち知るべし凡て人体の硬化するは直ちに衰弱に伴ふの現象に外ならぬ。其處で我輩は勉めて之を流動的に待して硬化する事を豫防して居る。我輩は片足こそなけれ、醫者の診察に據ると、生理狀態は全く青年と同樣の生活力を持つて居るさうである。其かくの如く生活力の盛なる理由の一は、全く血管の硬化せぬ爲

であるさうな。

さて我輩の血管が常に柔軟にして彈力あるは別に妙法もない。飲食物を愼み、適當なる運動を怠らず、清淨なる空氣を取る事と、適度なる睡眠と、而して腦髓の硬化豫防法を怠らぬ故である。此も今云ふ通り勉めて腦を流動的に持する事である。即ち腦の轉換法を怠らぬ。腦も不斷轉換せざれば停滯する。停滯して一部分が固くなれば丁度氷がはると同じ樣に延て腦の全体が硬くなる。此を防ぐが爲に、絶えず腦の轉換を行ふ、俗に凝つては思案に能はずと云ふが、腦の爲には如何なる事よりも此に凝ると云ふ事が最も惡い、空想も凝るよりは增しである。それで尙人間であるから、時に依ると腦の轉換がうまく行はれぬ時がある。其際は直ちに全身溫浴を行ふ、すると忽ち血行其他が流動的になつて、從つて腦の轉換も行はれる。更にその機をはずさずに寢るのが最上の策である。睡眠は一際の意識を停止して營養獨り盛んであるから、よく精力の消耗を補給恢復する事が出來る。此方策が我輩の精力に於ける精力持續法である。

第二編　讀書勉學論

第一章　有効讀書法

第一　加藤咄堂氏の讀書修養法

讀書の要は理解を第一とす

眞の讀書は其書の意義を理解し、而して己れの用となすにあるので、唯器械的に書上に目を落すのみでは、讀破萬卷に至るとも終に何の功もないものである。故に、理解は實に讀書の第一目的である、此の目的を達せんとするには、先づ自己の心を其讀む所に向はしめ、且つ之に向つて注意する所がなければ默目である。注意とは其事を自己意識の中心點として、他の一切を排斥する心的狀態で、此狀態に於て初めて讀む人の心と讀まるゝ所の書と結合して此理解の素地をなすのである、心此にあらざれば見れども見えず、注意之に向はざれば書中の文字は雲烟の如く眼を過ぎて毫も心に止ることなく、終日書を讀んで然かも書中の事を了せざるは全く此注意を缺く故である。人は同時に二物に注意を拂ふ能はざるは、心理學上の原則なれば、心、書中に專らならねば理解の素地は終に成すこともなく

終るのである。古人が『人心軀殼裡にあらずんば如何ぞ聖人の書を讀み得ん』と喝破したのも此の注意を缺く讀書の益なきをいふたのである。

場所の撰擇

吾等の心は常に外、見聞する所のものに動かされ、內は、思念する所のものに狂はされて、變々化々雜念纏起して意識の流れの止ることはないのである。されば讀書する間、若し爆音を聽くことがあれば、注意は其方に奪はれて書中の文意を確知するを得ず、偶々書の文字より他の聯想を誘致せば心は之が爲めに走せ、又讀書の人たらざるものとなる。かくては書を讀むも何の甲斐なき故に、先づ外界の事情をして、讀書に對する注意を奪はしめの狀態にあらしめなければならない、夫は言ふまでもなく靜閑なる場所の選擇にある、四圍寂寞とした中に徐ろに淨几に對して書を繙く時は、全く此の我と書との間に何物も累するものなければ、心は書に專一たるのである。されば古人も讀書三餘の說を立てゝ夜は晝の餘、雨は晴の餘、冬は年の餘として皆讀書の好時節として居る。夜間は晝間に比して四圍寂寥たれば注意力の散亂を防ぐに最も便、雨の日は晴天に比して、空氣もしめやかに、外界の誘惑も少なければ讀書に適し、冬は心神の困憊を來すこと夏よりも少なければ之れ亦讀書に好都合である。(此說は單に注意力の散亂を防ぐとしては恰當なれど、若し心身の狀態よりいへば夜間を以て讀書の好時節とするには多少の異論ある、そは晝間精神を使用するが故に、夜に入りては疲勞を告げて又緻密なる思索に適せず、一日の中にて最も恰當の時を擇ぐれば寧ろ夜ならずして早朝心氣快爽の時にあり)かくして如何に外界の刺戟を遮けたりとも、心身狀態不適當なれば以て其の散亂を防ぐことは出來ない、身体の諸機關をして其對象を受くるに適當なる狀態にあらしむるは、注意惹起の要件にして見んとすれば目を睜り聞かんとすれば耳を傾く、今書を讀むに當りても身体を正しくして目を書に注かれば注意は外に奪はるゝを免れない。

朱子の讀書調

朱子が

『學者、書を讀む時は須く身を斂め、正坐し緩く讀、微しく吟じ心を虛うして涵泳し、己に切して會察せんことを要すべし』

といつたのは此の覺悟を示したのである。『心身一如、心は身に影響し、身は心に影響す』まれば身に斂めて正坐するも心妄念の爲めに妨げられて書中の文字と一致する能はずば之し亦眞に書を讀むことは出來ない、朱子更に其心得を示していふ、

『書を讀むには宜らく心を持て書冊の上に貼在し、句を逐ひ字を逐へ、各々着落あるべからず。大凡文學者須く此心を收拾して專靜純一ならしめよ、日用動靜の間、都て馳走散亂することなるべし。方に始て文學を看得ること精密ならん、此の如くにして方にこれ本領あらん』

と、心を書冊の上に貼在して內より注意力を惹起するは最も必要なることで、之なければ倒底書と吾とを結合せしむることは出來ない、されば若し心に妄念の起つた時は、

(一)何故吾は本書を讀みつゝあるか、

(二)本書は何を敎へつゝあるか、

を考慮して、注意の散逸を防ぎ內は思念の群起を止めて諸種の心象中、讀書の意識を最も强烈ならしめ、外は身体を正して其意識を助けば終に讀書に專心なるを得るも決して難いことでない。

專心注意工夫

注意は實に書を理解するの第一要件で、之れが種子となつて終に理解の花を開くのである。此の如く注意は書を理解するに於て缺くべからざるものであるが、外界の誘惑を防ぎ內心の紛亂を制して、注意を書中に向はしめんとするは容易なことでない。併し之れは其の初めに於ての み工夫功を積めば決して困難なことではない。心理學者の說によると注意には二種の區別があつて一を受動注意といひ、他を努動注意といふ。受動注意といふのは外から起つた刺戟に對して心を其方に向けるので、書籍の題目を見て讀まうといふ氣の起る如きを指し、努動注意とは心中に讀まんと欲する心を起して之に注意するので、之れに多少の努力を要す、即ち外界の誘惑の來つて此の注意を他に轉ぜしめんとするを防ぎ、內部の觀念の起つて二の注意を奪まんとするに打勝つて、心を其の書に向はしむるにて散亂心の制止するは已にいふ如くである。更に其方法として、

(一)音讀　これ亦注意力の散亂を防ぐ一法にして眼のみにて讀まず、眼にて讀むと共に其見たる所の文字を發音するの習慣にして、其の爲めに口耳目の三は悉く一書の上の文字に集注せられて、散亂せんとする心を防ぐ。朱子が『口中に讀めば則ち心中閑にして義理自ら出づ、某が始めて學ぶ時も亦是の如くなるのみ、更に別法なし』といへるもこれに過ぎない。

(二)反覆　朱子又曰ふ『書を視ば心を靜着し意思を宣着して沈潛反覆すべし、久うして自ら曉得せん』と、觀解の所に至りて倦怠を生じ心他に散亂するものなればこの散亂せんとする心を書中に止めて、怠るなく書中の文字を反覆熟讀する中には自然に其理義を理解するを得て、これに興味を感じ終に注意力を集むることが出來る。

(三)興味　興味は注意の一要件にして乾燥無味なる書には自然心を專らにすることを得ざるも、此の理なれば如何なる書と雖も、これによりて興味を誘發せしめば注意力の散亂を防ぐことが出來る、

顯の如く努力して書籍と自己とを平行せしめず、二者をして

繙合せしめ、心神は書中の文字に入り、書中の文字は心神に入り、自己なして全く書中のものとならしむるに至れば、曾ては自己を書籍に結合せんとて努力したりしも、今は書籍の爲めに引き付けられて我心は多く其爲めに占領せられ我書籍と同化して外界の誘惑も乘ずる隙もなく、內部の妄念は其影を蔽して終に書の爲めに萬事を忘るゝに至る。心理學者は之れを第二受動注意の狀態といふ、彼の莊子にある書を讀んで羊を亡ひし藏の知きは此の第二受動狀態に入つたので、例は少しく趣を異にすれど彼の心理學者カーペンターが激烈なる肺經痛に苦みつゝも講壇に立ちて思想を吐露するに當り、其初めは多少苦痛を忍ぶの努力を要したが、既て佳境に入るに從つては講義以外何物の意に介するなく講じ了て復た苦痛を感じ、如何にして今まで之れを感ぜざりしやを疑ふほど、全く講義中は第二受動注意の狀態に入りて、我と講義と一となりて苦痛を忘れたのである。

讀書を以て天下の至樂とす

書を讀んで此に至る、我は直に古聖先賢と面接し、大學者大識見家と手を握り、天下の至理妙諦と一致し、古今の治亂興敗を一眸の中に集め、人情の迂餘曲折を現に味ひつゝあるので、其快實に言ふべからず、これ吾等が讀書を以つて天下の至樂とし、之れに依て慰められ、之れに依つて奬まさるゝ所以である。若し夫れ心を暫く書より離して靜坐冥想其理を考へ、其道を判ずるに當つては書中の意義瞭々として明かなるを得るのである。

毛穎黃は讀書四要の說を立てゝ此工夫を示して曰く

(一)に曰く敬、心を將て敬めて身子裏にあり身を將て敬めて書房裡にあるこれなり。
(二)に曰く簡、惟だ簡惟熟、若し治むる所のもの多ければ用力別れて奏功なし、精神疲れて歲月耗す。
(三)に曰く專、心を一處に置けば專として歸ぜざることなし、其心を二三にすれば必ず成就することなし。
(四)に曰く恒、專心致志一なりと雖も恒なく時々作し時々臨み、初ありて終り鮮し、亦成るなきなり、故に恒を存する最も要たり。

と、工夫怠るなければ以て讀書の眞味を會得するに至る、尙ほ之れ等の工夫に就ては次章讀書記憶幷に思索の題下に於て說明するを以て便なりとする。

記憶の心理

卷に對して書を讀む時は注意、全書中の文字に專ほれて、其記事は明々瞭々として我心象に映ずるが一たび卷を捲ふ時には、書中の紀事稍々明瞭を缺いて次第に腦裡を消して行き、時を經るに從ひ、曾て讀んだことは茫漠として、僅かに心象の一部として意識の奧底に潛むに過ぎない。其奧底に潛めるものも、他日前の書又は類似の書を攝くに當りては、忽然として現はれ來り、其當時の事までも想ひ起し確かに曾て此の書を讀んだ、此の事を思考したと認むるに至る。これを記憶作用といふ。即ち記憶には三個の過程があつて

(一)把住　自己の經驗した事を把住して腦に其變化を止るをいふ。
(二)復現　既に把住したる經驗を復び現出せしむるをいふ。
(三)再認　其復現したことを確然と認むるを言ふ。

唯だ把住した觀念を想ひ出したのみでは、眞正の意味の記憶ではない、これを自己の經驗界中のものと認むるに至つて、初めて正當に記憶と稱するものであるといふのが心理學者の通說である。

機械的記憶

さて吾等は如何にして自己の經驗したことを把住するかといふに、其れは先きに言ふた注意で、自己の注意の向はぬ事象は、如何なる大きなことでも、終に心象に上ることなくして消失するものなれば、先に言ふた專心の工夫こそ眞に記憶を助くる一要素と言ふべきである。

即ち自己の心を書中の事象に傾注せしめ、之を意識の焦點に集むる時は、容易に失念するものではない。併し自己の心を書中の事象に傾注せしめ、且つて意識の焦點に集むるは、唯機械的に書籍に對し、反覆讀過すると雖も、滿足なる効果の得らるゝものでない、故に充分の思慮を重れ、考察を逐らして其書中の事象を明瞭に理解しなければならぬ。理解なき記憶は全然機械的記憶となつて勢のみ多くして功は少ない、彼の讀書子が常に機械的記憶を要するが故に、苦む地名の如きも、多少の理解を加へて三河は三大河のある所、美濃は三野にて三大平原ありと知り、印度は四の大地方アフガニスタン、ペルチスタン、トルキスタン等、スタンの語尾を有する所多きは、スタンは梵語の陸及び國の義であると知る等の方法を以つてすれば忘るゝことがない。

勿論其事象を理解せずに、把住しやうとする所の努力を以つて、諳記諳誦又は寫寫することも記憶を助くる力がないのではない。即ち屢々同文を反覆すれば書を離れて諳誦するに至

り、又は數回筆寫して、書を離れても其文字を寫し得べきに至る、斯る努力を以つてすれば感覺印象を深からしむるので潛心筆寫の際、靜かに書中の理を了解し得べしとするは一種の方法でもあり、又記憶助長にも力あるが、未だ完全なる讀書法と且することは出來ない。

記憶法の要件

諳記諳誦も亦完全なる讀書法ではない、記憶に於ても功少なく、一時は能く諳じ得た樣でも、もとも

と理解しない事象であるから時の過ぐるに從つて心程の印象も全く消えて唯だ徒らに心力を勞したに過ぎないものとなる。澤柳博士の讀書法には之を告めて『器械的の諳誦は其益とする所最も少なきのみならず、亦記憶すること最も困難なものとす。喩へば原文のまゝを暗記するが如きは恰も食物を丸呑みにして少しも咀嚼の作用を加へざるに同じ、丸呑みにせる食物は適々腸胃を損傷するに足るを以つて身体の營養をなすものに非ず、器械的の諳記は適々智力の發達を害するに足るも以つて有益なる智識を增進するものにあらず』と。されば書を記憶せんと欲するものは、充分に書中の事象理義を了解して、其要點を捕むべきで決して全般を器械的に記憶すべきでない。全般を其儘に記憶せんとすれば却て要點を逸するのでハマートンは之を以つて『合雜囊に雜品を投入するに似たり』と喝り、又其の記憶の要件を示して、

記憶にも亦選擇を要す、其有用と感ずるものを記憶に止むると共に、無用と感ずるものを排斥して、自己の記憶域内に入らしめざる、これ記憶法中忘るべからざる要件なり。

と、記憶の選擇には理解と思考とを要する。理解なく思考なき記憶は徒らに心力を勞するのみで、決して永く心程に把住せらるゝものでない。

充分に理解したるものゝ深く心程に遺るは既に述べたる所であるが、更に又最も記憶に便なるものを擧ぐれば、興味を惹きたる事象であつて、同一書中に於ても理義の了解し難き所事象の興味なき所は記憶に存しないが、興味ある例話は永く心理に印象するは日常の經驗によつても明かなることで、殊に複雜なること、奇警なる事等の心に印する事の深いのも全く此の心理作用によるのである。『時代を知らざるものは笑ふべし』と言ふ一句は記憶に便でないが。

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、或人、四條中納言えらばれたるものを道風かゝんこと時代や違ひ侍らん、覺束なくこそといひければ、さ候へばこそ世に有りがたきものには侍りけれとていよ〳〵秘藏しけり（徒然草）

の一話は印象深く、蜀山人の

世の中に人の來るほどうるさきはなし
さは云ふものゝおまへではなし

の歌の記憶し易きは其奇警なるにあり。其他『燕雀何ぞ鵠鴻の志を知らんや。』『千羊の皮は一狐の腋に惹かず』『寧ろ鶏口と

なるも牛尾となる勿れ』等の語の記憶せらるゝは此の爲めである。これ等情趣奇警なるものゝ外、韻律を備へたるものゝ記憶し易きも亦興味あるが故にして、詩歌俳句の永く心に印する如きは其一例である。されば古來記憶の一法として句調よく配列すること行はれ。

便藤堀靈の歌に

九病ひ五七は雨に四つひでり
六つ八つなれは何時も大風

といひ、彼の鐵道唱歌によりて停車場の名を記憶し、流麗にして句調よき文句、例へば

太平記の

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦きて歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅寢となれば物憂きに、思愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、今をかぎりとかへりみて、思はぬ旅に出でたまふ、心の中ぞ哀れなる、憂きをばとめぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、未は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば潮ならぬ海に、こがれ行く、身を憂き舟の、浮き沈み、駒もとゞろと踏みならす、瀨田長橋うち渡り、行きかふ人に近江路や……、

等の文句の讀者の心に印するも此の爲めである。

努力的記憶

併し吾等の書を讀んで記憶すべき箇所は唯だ興味ある箇所のみではない、興味なきことをも記憶せねばならぬ必要があるのであるから、其場合は反覆精讀して強き注意と不斷の努力とを以てせなければならぬ。一体吾等の記憶といふものは其の事象に接した當時は保持せらるゝものなれど、時の經過は曾て記憶したる事をも漸次意識の下層に潛めて朦朧として、霞を隔てゝ山を見る如くになり、終には全く忘失し終るものなれば、書を讀んで記憶せんとするには讀過、卷を捨てゝ顧みざる如き所業を學ばず、時々取り出だして再三之れを繰くの必要がある。

記憶に關する心理上の大則は略ぼ上述の如くであるが、更に略說すれば、

(一)新しき刺戟は記憶鮮明にして再認せられ易きも時間の經過するに從ひ漸次朦朧となる。

(二)記憶するに常りて用ゐたる努力の多きものは記憶すること深けれど、少なきものは忘失し易し。

(三)其事象に注意すること深きものは記憶せられ易けれど注意淺きものは直に忘失せらる。

(四)從て興味ある事象は記憶せられ易く興味なき事象は記憶せられ難し。

尙ほこの外に忘るべからざる法則がある、これを觀念聯合（又は聯想）律といふのである。

觀念聯合記憶

人の心といふものは麻糸の亂れた樣に、さまざまの思想感情の紛然雜然として、入り込んで居るもの

ゝ樣であるが、其實は、觀念聯合の作用によつて、秩序整然と保たれて居るものである。花といへば直ちに吉野を想ひ、吉野といへば直ちに南朝を想ひ、南朝といへば直ちに後醍醐天皇なを想ひ、後醍醐天皇といへば直ちに楠正成を想ひ、楠正成とにへば直に湊川を想ふ、といふ始末は、此の觀念聯合の作用であつて、之を接近聯合と云ふ。

これにも數種ある、駿河といふて富士山を想ひ起すのは所の接近にて、織田信長といふて戰國時代を想ひ起すのは時の接近で、明智光秀を想ひ起すのは人の接近である。此の接近聯想の外に類似なるものがある。これは落花を見て雪を想ひ紅葉を見て錦を想ふ等、一の觀念起ると共に替て經驗した他の觀念が起るので、之れ皆之に類似せるものを想ひ起さしむる心的狀態である。これにも亦數種あつて先きに擧げし落花を見て雪か想ふ如きは、其形狀色彩の相類似せるよりの一想起で、濁流を聽て雨を想ふ如きは音調の類似である。

此の他反對の聯想とて美を見れば醜を想ひ、黑を見ては白を想ふ等の聯合があつて皆な一團となつて我心に收るが故に、一つを出して他を想起することが出來る、世間の記憶法は多く根底を之に有するので、顏淵、閔子騫の名を覺ゆるに、殘念聲四間として記憶し、亞米利加のガハヨー州を覺ゆるに『お早う』の語を以てする等は音調の類似により、泉岳寺を覺えんとて赤穗義士を記憶し、龍田を覺えんとて紅葉を記憶する如きは所の接近によつたので、更に此の根底を記憶の便に供することが來る。

記憶法の實例

左に二三の例を擧げん。

(一)符號的記憶　四國は阿波讃岐伊豫土佐なり、此の名を記憶せんが爲めには、其頭字のみを取りてアサイト即ち麻糸として覺ゆる如き、東京の劇場に於て、定まり食品なる菓子辨當壽司をカベスとして記憶するの類にして、頭字を以て全体を想起せしむる人工的記憶法なり。

(二)假構的記憶　毫も聯絡なき數箇の事象を聯絡するものとして記憶するにて、山梨縣の物產は甲斐絹、葡萄、水晶なる事を記憶せんとするに、甲斐絹に葡萄を彫つた水晶が包むであると覺ゆる等にして又一種の記憶法なり。

(三)假托的記憶　こは全く心內に假托する方法にて、常に心內に一室の如きものを想像し記憶せんとする事象を之に結合せしむるにて、先きの山梨縣の名產ならば先づ戶棚に甲斐絹あり、床の間に葡萄あり、机の上に水晶ありといふやうに假托するにて、數十の事象をも順序よく此の假托によりて記憶する事を得べし、或は自分の身体に結合せしめて、頭に甲斐絹を被り、口に葡萄を食ひ手に水晶を持つとして記憶するも亦一法なり。

(四)換數的記憶　こは數字記憶の方法として屢々用ひらるゝものにて、四千五百二十三圓といふのを覺ゆるに四は四五はイ二はフ三はミなるを以つて『よいふみ』として記憶し、四千六百九十といふを『讀む事』として覺ゆる如き、或は一を市二を荷、三を產、四を死、五を碁、六を蹴、七を質、八を蜂、九を苦、十を重等の同音の語に換へ本年は四暦・千九百十年なるを覺えんとせば、市で苦んで重い病人、即ち行路病者と記憶する等の方法である。

是等人工的記憶法は、一種の技術としては面白いけれど、讀書上に於ては反つて他の聯想を惹起し且つ其記憶も亦多く一時的のものなれば、吾等は斯くの如き方法を採らず、寧ろ徐ろに自然の心的作用に任せ、注意と努力との方法によりて記憶を計るの順道たることを勸むるのである。併し聯想は心內の一事實なるを以つて、讀書の際其事象と關係ある他の觀念と聯合せしむるは一面に記憶を助くると共に、他面に於ては思考を補ふに功大なるものである。

注意喚起方法

思考の事は後に說くから此には略すが、書中の要目に注意を惹起すべき符號を付し、若しくは其要目を抄記して、それを根底として他の末枝の義理を聯想するの便に供するは最も必要なる記憶法である。今、古來讀書家の使用せる主要なる方法を示さんか。

(一)圈點　之は和漢文の書に於て使用せらるゝものにて、書中の記憶を要すべき箇所に朱を以つて○●等の符號を付し置くにて、他日二たび其の書を繙くの際には、直ちに其圈點に目を觸れ以て其他を聯想せしむるものにて、唐詩の『凡そ書を圈點あれば則ち讀者領會し易し』といへるもの此の法である。

(二)線　之は主として洋書に於て使用せらるゝにて、同じ書中の要目に色鉛筆を以つて線を引き置き以つて記憶の一助とすること和漢書に於ける圈點に同じ。

(三)貼紙　必要なる箇所に紙を貼して記憶に供するにて、古來疑雜の點に紅唐紙を貼付したるが如し、要目點に單に紙を貼し又はそれに注意すべき條目を記入し置くことにて參考索引等の便に供するを言ふ。

(四)記入　之は書中の餘白に自己の感想又は記憶に供すべき事を記入して置き、他日讀書の際の補助たらしむるもの。以上は直に其書籍に加筆し貼紙するものなるが、備忘錄樣のものを遣り、其要目を抄記し、たとへ其書に接せずとも、備忘錄を繙くに於ては記憶すべき事項に於て缺くるなからしむるの法がある。蓋し備忘錄は讀書家の好伴呂であつて、讀書の要點を之れに妙記し、他日の用に供するは其利頗る多い、されど其使用の法を誤る時は、折角の抄記も勞して功なきに終るべきものなれば、必ず一應其書を讀み終り、さて其後に要目を抄記するの法を取り、初めより紙筆を携へて書に對し、唯た抄記する事に心を奪はれて、其書の要領をも沒却し、斷片的の抄記のみ殘して、而かも全体に對しての眼目を逃する如きは初學者の往々に陷る抄記の弊であ

讀書と備忘錄

る。リチャードソンの『讀書の選擇』には『備忘錄の亂用を以つて、讀書に伴ふの宜荷たるべし』と誡め、且つ其作法を示していふ。

備忘錄は讀書したる後にて伴ふものなる事を忘るゝなかれ、卒然讀書に從ひまた充分に理解せず、直ちに之を抄記する所は、徒らに一知半解の事をのみ記入して何の益なきものなるに過ぎざるに至らん。

といつて居る。聞くエマーソン一代の名文は多く彼れが備忘錄中より湧出し來ると、若し夫々困倒なる注意を以つて胸中の要目を抄記し、精密なる目次若くは、索引を付して常に座右の料とせば其の記憶を資するに於て、功績る多きに云ふを要せない、これを一冊の書とせず、カードの如きものに記入し他日整理の便に供するも讀書家中に行はるゝ有功の方法で、これ亦一種の備忘錄作製法である。尙ほ此の備忘錄記入の方法に就いては、單に抄記するのみならず、更に有要なる據要分解等の法あれど、そは思索に關する事多ければ、此には唯だ抄記のみを言ふに止めておく。

記憶力の養成は健康第一也

身心の相關は動すべからざる大法にして、吾等の記憶も亦其身體と密接なる關係を有し、體力弱き時は腦力も亦弱く、身體健かならざる時は精神も亦健かなる能はざるものなれば、記憶養成の第一歩は腦力の養成にして、腦力養成の第一歩は身體の衛生にあることは今更ら喋々の辯を要せない。

されば記憶力を增進せんとするには、平素衛生に注意し、身體を淸潔にして新鮮の空氣を呼吸し且つ滋養物を攝取し適度の運動を以つて身體各部の運動を計らなければならない、殊に記憶に密接に關係を有する腦髓は、全身の四十分の一に過ぎざる重量を有しつゝ其勞働に費す所の血液は全量の八分の一を超過するものにて、常に新鮮なる血液を求めて止まざれば、良好なる記憶を保たんには新鮮なる空氣を呼吸して其供求に充つる事を注意し、其使用も亦適度を失はざる樣に心掛けなければならぬ、若し其の使用を過度ならしむる時は、精神混沌として記憶力を減退せしむるの恐れがある。されば身體及び腦髓の疲勞した時に、努めて讀書し努めて記憶せんとするは偶ま以つて之を害するものたるに過ぎない。

今左に腦力增進に關する主要の心得を示さんに、

□記憶力增進の要訣

第一	食事の前後に強て記憶を計るべからず	食事の前は空腹を感じて腦も亦養分の缺乏を來して、其力薄く食事に當りては多量の血液消化作用に集注するが故に、腦の血液少量となりて記憶の印象も亦薄弱なるを免れず、これを强いて記憶せんとする時は、腦胃に向ふべき血液を腦に集注するが故に腦胃を害して却て腦力の發達を防ぐるに至る。
第二	就寢前に強て記憶を計るべからず	就寢前に强いて記憶を計らんとする時は、精神興奮して終に安眠する能はざるに至るものにて、安眠なければ腦の休養なく爲めに其力を減退せしむるに至る。
第三	腦力使用の轉換に注意すべし	朝より夜に至り、夜より朝に至り書に對して些も休むことなくんば、腦力は爲めに疲れて記憶も亦薄弱さなることを免れざれば、時間を限りて勉强の後に休養、休養の後に勉强と交替し又は同一讀書にても初めに腦力を要する專門書を讀めば、後に腦力を休むる娯樂書を讀み、更に專門書に續く等、一定の時間に於て書籍若くは事業を轉換するも亦記憶の增進を助くる方法である。
第四	飲酒禁煙を節制すべし	過度の飲酒は神經系統に異狀を呈し腦の作用を緩慢ならしめ、過度の喫烟は腦の一般官能を弱くし倦怠の念を生ぜしむるものなる事は何人も知る知くなれば、記憶力の增進を計らんとするものは此兩者を全廢するかよし、適に全廢し難きものとするなれば、節制を守りて過度に失する事なき樣注意しなければならない。

井上博士の理想的讀書法

以上は主として身体上の注意なるが、心身兩面に亘りては井上圓了氏が殊に讀書家の爲めに左の要點を示されて居る。

(一)場所を選むを要す。
(二)時間を選むを要す。
(三)室内周圍の狀態に注意するを要す。
(四)時間の前後に注意するを要す。
(五)毎日一定の習慣を形成するを要す。
(六)順序を正しく錯雜を避くるを要す。
(七)一事に熟達して他に及ぼすを要す。
(八)必要有益の書を選みて之れを研修するを要す。

と、各項の説明は既に述へ置きたれば、此には贅せざれど、場所は清閑にして時間に身心の爽快なる時、室内周圍の狀態は注意力を害するものなきを貴び、徒らに時間を繼續して倦怠の至らざるを努め、毎日課程を定めて一定の習慣となさしめ、順序を定めて思想の錯亂を避け、易より難に、淺より深に歩々向上進歩の方針を取る等は記憶力增進に於て缺くべからざる注意である。

讀書と靜座

是等身心の注意の外に、尙ほ一つの最も必要なるものがある。それは外でもない、先きに專心の工夫を説く時にも言及した靜坐である。『讀書作文譜』に朱子の語を引て、

昔、陳烈先生記性なきを苦み、一日孟子を讀み、學問の道、他なし、其放心を求むるのみといへるに至り、忽ち悟て曰く『我が心、昔て收得せず、如何か書を記得せん、と、遂に門を閉ぢて靜坐し、讀書せざる事百餘日、以て放心を收め、後、去て書を讀む、遂に一覽して遺すなし。』

と云へるは靜坐の記憶の增進に功なるを示したるもので、こは書に記憶力增進に於て功あるのみならず、思考力養成に於ては缺くべからざるの工夫である。又た同書に、

程叔子、面前の水盆を指し、語て曰く『淸靜中、一物を著すべからず、纔に物に著すれば便ち動搖す、學者未だ解悟せざる所あるを見れば靜坐中に向て之を求めよ』

とある。又た靜坐の法を示して、

吳因之曰く『凡そ靜坐せんと欲す、先づ心を息むべし、日常事に隨へ練習し、游情雜念遽く拋捨し、潔々淨々、常に此の靜寂不動一体に還らんを要す、纔に昏懵を覺えば則ち奮迅振發し、纔に懶散を覺えば即ち專凝肅なれ、大凡これより生ず』

とある皆な此の工夫である。

思索は記憶を助け記憶は思索を助くる、此兩方面に於て吾等の常に怠るべからざるは靜坐である、リンドネルは記憶の强烈なるものを十二三歳となし、年と共に漸次減じて三十以上に

至ると殆んど强烈なりし時の三分の一となる、併し思考の力は之れと反比例して年と共に進み五十二三歳に於て其頂點に達すといふて居る。記憶を以つて思考を補ひ、思考を以つて記憶を補ふて初めて讀書の功を充實する事が出來るので、其の之れを發するに於て吾等は現代の人々に閑却せられたる靜坐を勸誘するのである。

讀書の要訣

ジエームス、ポールドウインの愛書論はコルリツヂの言を引用して讀書家を分類して曰く、『一種の人は水母(クラゲ)の蓋の如くに淸潔にして良好なるものを選して唯だ棄れたる廢物のみを自己の中に留め、又一種の人は海綿の如く一たび吸收したる後に之れを吐き出して顧みず、又他の種類の人は漏斗(じうご)に等しく如何に讀書するとも、悉く漏出して何等の痕跡をも腦裡に止めず』といひ、更に一種の人を擧げて『鑛山に勞働する坑夫の如く黃金寶石のみを採掘して砂礫土塊の數を排除す』といふて居る。

吾等は此の鑛山に於ける坑夫の如くに金と寶石とを得て、砂礫と土塊とを排除する工夫を以つてかゝられねばならぬ。金や寶石は決して容易に得らるべきものでない。多大の勞力を以つて之れを得ることに努めねばならぬ。若し此の勞力を吝む時は、折角寶の山に入つても手を虛うして歸るが如く何等の得る所はない、同じ譬喩はラスキンの『五の寶庫』といふ講演の中にも述べられてある。彼は此の譬喩を用ゐ來つて、『諸君の求むる所の黃金は著者の意見、著者の思想に外ならずして書中に用ゐられたる言語は即ち鑛石である。黃金を得るには此の鑛石を碎破せねばならぬ。諸君の鑛は諸君自らの注意や才力并に努力に外ならず、諸君の鑛は諸君自らの思索工夫である』と説いてゐる。

されば書を讀むに當りては精看熟讀、其の書の意義を正當に理解することに努めて、一字を蔑にし一句を忽にして爲めに其の中に含まれたる貴重物を逸するの過を避けねばならぬ。即ち讀書家開卷第一の注意は其の書に對して、忠實なれ眞面目なれといふ敎語に歸するのである、併し著者と讀者との懸隔が甚だしき時は、如何に忠實に眞面目に讀みたりとも尙ほ其の眞意義の解し難きことはないではない。其時には再三再四之れを熟讀して、さて左看右看して思索を運らし、考慮を重ね其の眞意義を會得せずんば止まざるの覺悟を要する。若し一讀解し難しとして之れを放擲し去る時は終生其寶石を得ることなく、徒らに勞して功なきに終るものである。ラスキンは之れを説いて『彼れは決して慈善的に與ふるものにあらずして、唯勞力の報酬としてのみ之れを與ふ』と即ち與へられざるは其勞の未だ足らぬのである。

吳因之いふ

書義之れを思ふて即ち得るものあり、之れを思ふ竟日にして後得るものあり、明日に又之れを思ふて後、得る者あり、力量

讀書と思索

衆だ到らず、累日之を思ふて而して進すべからず、停調すること三日五日の後を俟つて識見精進、或は蹙れて之を思ひ、或は他日融發して恍然として得るものあり。凡そ理、疑はずんば語み生ぜず。惟だ疑て而して後悟るなり、小疑なれば即ち小悟し、大疑なれば即ち大悟す、故に學者悟の難きにあらず、疑ひの難きなり、其疑ふものと悟るものとは何物ぞや、是れ心竅中の生機なり、夫れ心中、原より機竅あり、但た疑ふて思索するにあらずんば則ち機觸れずして理開かず、焉んぞ能く了悟せん、故に學者書を看る宜しく聖人の語氣を道尊すべし、聖人字を下す化工の物を育るが如し、決して墾々移らざるの道理あり、一章を看ば須く關鍵何の處にあるかを訊ねべし。一句を看ば須く上文如何、下文如何通章如何と討ぬべし。

と、之れ實に鑛を碎いて金を得る法である。若し其勞を厭ひ何の思索する處なく、難解の文に遭つては倦怠を生じて牛腦したらんには金は終に得るの機なきに了るのである。

例の庶幾も亦之れを戒めて

初め看る時竟に茫然一も知る處なきが如きも、長睡の心を生ずべからず、時を過へて再び看ば或は十中、其一二を曉らん。倦怠の心を生ずべからざるなり。時を過へて再び看ば或は十中其の五六を解せん、更に已むべきの心を萌すべからず、時を過へて復た看ば工夫既に到りて解を期せずして自ら明かならん、大學に所謂力を用ふる久うして一旦豁然として貫通するもの豈に虛語ならんか、人安んぞ一開また領會する能はずして即ち之れを置くべけんや。

と反覆、思索を運らすことを喜らずして初めて讀書の目的は達するのである。

されば讀書と思索とは唇るべからざるの要件にして、思索のない讀書は水母の如く海綿の如く又漏劑に似て何等の功もなく全く徒勞に歸するものである。

讀書力の程度

吉谷東洲は古醫方の泰斗であるが、曾て二三子に示して

二三子に告ぐ、學ぶことあるも思はざれば得ず、思ふことあるも學ばざれば得ず、吾之れを學ぶものを見れども未だ能く之れを思ふ者を見ず、管子曰く、之を思ひ之れを思ふ、又重れて之れを思へ、之れを思ふと通ぜずんば鬼神將に之れを通ぜんとす鬼神の方にあらざるなり、精氣の極るなり、小子之れを思へ。

と、思索の讀書に必要なるは上來之れを述るが如しと雖も、初めより自家の力量不相應の書に對するは決して益の得たるものではない、力量不相應の書でも、思索を重ねる事多時終に關費する所あるは矣因之の說いた如くであるが、事には順序がある、讀書に於ても亦其順序を立てゝ易より難に就く時は易を棄てゝ直ちに難に就くに比して勞半ばにして功却て多きものである。

之れは前に專修書選擇の條にも說いた如く、耳師若くは先輩に就きて淺より深に入るの法を立つるが最も必要である、例の朱子に讀書は矢を射るものに例し、五斗の力あるもの四斗の弓を用ふる時は之れを挽て滿たしむることを得て他に勝ぐるが如く、讀書家も亦自家の力量をして餘りあらしめればならぬ。若し自家の力量を度らざる時は、決して他に勝ることを得ない といふて居る。併し常に自家力量を餘りあらしめて充分に力量を試ることなき時は易に慣れて難に就き難く其學をして長進せしむる事は出來ない、莊田琳庵の修學法に

學は常に水を習ふが如くすべし、之れを淺所に習ひ、而して後、深きに向ふ、溺溺して死せんと欲するもの數次方に始めて功を見る、若し其溺るゝを懼れて淺所を離れ得て了せざれば終身水にありと雖も、亦數尺の水を游泳する事能はず、と、考量思索、溺溺して死せんと欲するもの數次にして方に始めて功を見るのである、孰れの點よりいふも思索は讀書に喚ぶ點ずるので之なき讀書は効力殊に少ないのである。

徹底的讀書法

さて學術の研究といふことは、古は讀書のみの如く解せられて書を讀むのが即ち學問、多く書を讀のたるものが學者であつたが、近世學術の進歩は讀書のみを以つて研究の全般とすることを許さない、更に觀察と實驗との二方面を要する。

觀察といふのは事物を精到に見究むることで、實驗といふのは之れを驗査して果して其理法の如くなるべきものか否かを知るので、此二つは即ち學術研究の双眼鏡で、此の二つによつて其の言ふ處は空理空論ではなく、事實であり實理である事を證するのである、一切の科學の研究は此の二つの上に立つので、此の二つを缺いては決して研究の名を冠する事は出來ないのである。併し如何に實驗と觀察とが必要であるとしても、前人實驗の事蹟は書籍に於て傳へらるのであるから、全然讀書を廢して事物の研究に屬することは出來ないから此の二つの双眼鏡も讀書によつて初めて功を奏するのである。

即ち書中の說く所を事實に徵して、若しくは書中に說く所を根底として更に推理討究して之れを書中未だ說かざる所に應用して、其の眞例を判驗して行くのが研究であるから、實驗と觀察とを事とする科學の研究に於ても讀書と思索とは廢することは出來ない、否な之れを廢しては實驗と觀察とにも支障を生ずるのである。

殊に實驗以外觀察以外に突入して、宇宙の根本原理を究めんとする哲學并に宗教の如きに至りては、讀書と思索とが其研究の基礎をなすといふも誣言でない。其他文藝に關する諸學科の如きは讀書は實に其の中心である。中心では あるが之れのみを以つて研究とするは大なる誤で、既に古人も格物究理といひて讀書以外に於ける實驗の必要を說いて居る。

「耳嚢閑話」には

唯だ書物の上にてはと知る所眞切ならず、牛上落下の事多し虎の話を聞きて面白く思ふと、虎に遇ふて傷を受けて恐る

しく思ふとは大いに違ふなり、眞に虎に遇ひしを眞知と言ふべし、何事も實地を踐まずして書籍のみにて窮理するといふは疊の上の兵法、畠の中の水練なり、予山水を好む、西國の勝景を探らんとする時、先づ十人の遊記地誌を讀み、彼の山の形は斯くあらん、土地風俗は斯くあらんと思ひ、其處に至り見れば悉く相違するなり、是にも知る、百聞は一見に如かず格物もかくの如くなるべしとあり、讀書と實驗とは共に棄て難いものである。

澤柳博士の讀書法には ロックの讀書の心得を略説して、上の如く掲げて居る。

ロックの讀書法

(一) 著者の言語に拘泥せずして其の思想を失はざらん事を努むること。

(二) 其題目論説に適當要用なる思想と無關係不必要なる思想とを明に區別すること。

(三) 論述の條理主旨の何れにあるかを明かにし枝葉岐路に陷らず、眞意を失はざらんことを努む。

(四) 論説の關係輕重を了知すること。

(五) 論説の根據の何れにあるかを明かにする事。

研究的讀書法

かくして讀む所の書中の意義を明かにしたらば、其要を摘むで備忘錄に記入するも亦一法である。卷を掩ふて此の書の意義は何なりしかを考量し其要を摘みて抄記し、以つて思索の用とするのである之れが綜合法又は撮要法と言ふ。即ち一篇の大主眼を捕促して、

第一に主中の主（これ全篇の大主眼）

第二に主中の賓（大主眼の客たるもの）

第三に賓中の主（客たるものゝ中殊に主要なるもの）

第四に賓中の賓（客たるものゝ中主要ならしむるもの）

等に區別して撮要し、又書中の意義を分解し、之れを關聯として記憶に便するも亦思索を助くる事も多い、拙著「大死生觀」に東西西洋思想を大觀して、

大死生觀
- 東洋思想
  - 現世的＝支那思想
    - 來世的＝儒教（現世的＝鄙魯學派、來世的＝荊楚學派）
    - 來世的＝道教（現世的＝聖道門、來世的＝淨土門）
  - 來世的＝印度思想
    - 現世的＝佛教（來世的＝臨世道の如き）
    - 來世的＝婆羅門（來世的＝苦行派の如き）
- 西洋思想
  - 現世的＝希臘思想
    - 來世的＝（唯物的＝經驗的、唯物的＝合理的）
  - 來世的＝ヘブライ思想
    - 現世的＝新教
    - 來世的＝舊教

以上の樣に記したけれども正確にかく云ひ得べきではないが、先づ大体の傾向より分類したので、これらを分解法といふ。

此の如くに撮要し分解して、さて其書の言ふ所が自己の實て知る所或は考へた事と比較して果して一致して居るかどうか、自己は其書の説を正しとし得べきや否やを考へ、こゝに研究の端緒は開くので、研究の第一歩は疑ひにある。

書を讀んで疑ひを起すと云ふ事は、餘程熱心にせねば出來ない事で、大抵は讀過して何の疑ひなきに了るもので、勿論疑ひのない所には研究もないのである、研究のないものには悟る期もない、大疑の下に大悟あり、小疑の下に小悟ありと云ふたのもこれで、一書に疑を生じ、更に同一題目に就いて説述したる他の書籍を取り來りて、之れと比較考量し之れを解決せんとする此の法を研究的讀書法と云ふ。古人も書を讀んで疑ひなきものは先づ疑ひあるに至らしむべし、疑いあるものは疑ひなきに至らしむべしと云ふた樣で、Bに疑いあり多くの書を繙いて初めて自説を定める事が出來る。

博學審問の道

この場合に於て吾等は多讀を勧める、多く讀む程其研究の題目に對する知識を廣くするので、僅か一二の書のみにて速斷する時は正鵠を失する事がないとは云はれない、勿論此の場合には何れの書も初めより終りまで通讀するには及ばぬ。其題目に關する箇所のみ、飛び讀みしても差支はないので、要は其研究事項に關する知識を豊富にして自己の斷定が誤らなからしむるにある。

古來の學者が派を樹て黨を分ち自己の信ずる學説にあらずんば之れを子弟に讀ましめず、強いて自家の説に同ぜしめんとしたのは、所謂研究の範圍を狹くしたもので博學審問の道ではない、一題目の下に研究せんとするものは多く讀んで以つて其の判斷を明確にするのが最も必要で、安積艮齋の學は一家を愚守するに及ばず、道の存するは皆な學を思ふべし、程朱の諸賢は勿論なり、陸象山王陽明諸公の言も其善なるは皆な從ふべし、漢唐諸儒の説も取るべし、老莊中韓佛氏の言も善なるは皆な取るべし、愚夫愚婦の言も亦取るべし、かくの如く胸襟豁大、今古を包括する勢ひにて志の高大なるも言ふべし、朱舜水言ふ學問の道は裏か活むるが如し其の粹を選んで而して之れを取る、若し吾は某氏の學、吾は某氏の學といはゞ則ち所謂博學審問の道にあらざるなりと、此の語魂會の論といふべし。

といへるは晩近の所謂自由討究を鼓吹したので學者の則るべき法である。

數人會讀の益

これは獨力研究の上で云ふたのであるが、若し同好の士相會して同一題目に就て、研鑽又は同一の書を會讀せば其の思索を資すること決して鮮少でない、俗に言ふ三人寄れば文殊の智慧で、各人其境遇閲歴を異にし、個々見る所も同じからざるものであるから、獨り閑窓に研究かゝして解し難きことも、數人相會すれば容易に解することが出來る。

孔子が老子に禮を問ひ、官か剌子に問ひ、大廟に入っては事毎に問はれたのも、顔回が能を以て不能に問ひ、多を以て寡に

問ふたのも皆な遺憾の消息あるが爲めで、例の庶幾は之れを嚙へて

燈を一廛の上に燃す、燈一二盞なれば則ち能く一二席を照すに止りて三四席を照す能はざるも、數十餘燈を一廛の上に燃す時は一廛照らざる所がなし、凡そ一人の聰明才智は一二盞の燈の如し、安んぞ能く天下の事理を照さん、問を好んで十人の聰明才智を我に合はせば譬ば十盞の燈を照すが如く、更に問ひを好んで數十人の聰明才智を我に併せば猶數十盞の燈を燃すが如く自然に天下の事理をして明かならざるなからしむる如きものなり、如何せん狹量の甚だしきもの腹中に一のある所なくして而して自ら謂らく才と學と已の能く人に過ぐと謂々然とし、自負して下問を屑とせず嘵誠に憐むべきなり」と喝破した。

書は友の如し、吾等は之れによりて益を請るのであるが、友は又書の如し之れによりて益を請ることを忘れては其進止も亦遲々たるを免れぬ。殊に無師獨學せんとする人々は此の請益下問を忘れては、萬事獨斷に流れて判斷の正鵠を失ふこと疑ないと云はれる。研究會、讀書會等を設けて其利便に供するも亦讀書家の取るべき眞策にして、彼の新井白石が人と應接談話する毎に必ず事理の心得となる事又は山水風土物產の類、古今人物の事などを劄記し置きて、博聞强記の頑儒となれる如きも亦參考に資すべき逸話である。

修養書の讀書法古人の用意

『忠實なれ眞面目なれ』の語は、一切の讀書に對する好個の訓誡であつて殊に修養を目的として古賢の書を讀むに當りては一層切實なるを覺ゆるのである、聖賢の書は簡にして約、而かも文字以外に深遠の義理がある、唯文字に拘泥して文字以外の大文字を看取することがなかつたなれば、折角聖賢の書を讀むとも毫も修養に資することは出來ないのである。

安積艮齋は巧みなる譬喩を以つて『一書人言ふ、山水を寫すに筆墨にて形容せる所は人も見て巧拙を辨ずれども、墨を着けざる白紙の空地なる所に妙趣あるは誰も見て賞するものなし、讀書者は玩味に言外の意を自得せざれば妙所に達せず』と、此の言外の意を自得するのは即ち思索の力で、思索なき讀書は唯だ文字を見るのみで其以外の眞義は到底解することは出來ない、これ殊に修養に關する讀書に於て思索の必要を云ふ所以である。

然らば如何に思索すべきかと云ふに、修養の要は採つて以て自家頭上のものとするにある。されば古人も書を讀んで自家頭上に應用し來るにあらずんば萬卷を讀破するとも、書籠と異ならずと喝破したほどで、朱子は『學問は自家身上に就て切に理會するを要す、那の讀書底は已にこれ第二義、自家身上に道理却て具はる、外面の添來を假らず、聖書自己の經歷し過ぎし者を得て之に書を著し、人の未だ經歷せざるに先づ之れを知つて之れを身に体せしめんと欲するなり』といひ、陸象山は六經我を註脚すと說いて居る。これを眼に讀まずして心に讀み、心に讀まずして身に讀むのが聖經に對する心得で、彼の日蓮上人の如きは常に我は法華經を身に讀むものなりと主張せられた。

身に讀んで初めて其の義理の更に痛切なるを感ずるので、若し古人の傳を讀み、語に接して我が身上に持ち來る時は、彼の衞の莊妻が『我思ニ古人一、實獲ニ吾心一』といひ、李迎平が『只古人遇ふ所の患難大に堪ゆべからざるものあるを思ふて持し以て自ら比せば以て少しく安んずべし』といふた。

程伊川が小人の爲めに排擯せられて濟州に謫せられ、後、赦に遇ふて鄕に歸りしに氣貌容色少しも平昔に異らざりければ、門人之を怪みて、先生何を以て此を得たると問ふに、答へて『學の力なり

大凡學者患難貧賤に處するを學ぶ、富貴榮達の如きは即ち學ぶを待たざるなり』といふたのも、皆な身讀したる功である。

或る人が古人の傳記を讀むに當り、之れを自分の年齢に比して見ると趣味一段深きを覺ゆと云ふたのも此の思索法で、閲歴を比し年齢を比して之れを自己に求むる時は、何人も感奮の情を起さざるものはない。

孔子は三十にして立つ、我れ已に三十、而して未だ立つ能はざるを慨し、アレクサドルは壯年にして天下を蓋掩す、我齢之れに過ぎて碌々何の爲すなし、吉田松陰は未だ三十ならずして逝き、偉名赫々たり、我齢之れと相近く、世路も彼れの如く險惡ならずして、しかも些の功なし等と思索するは、修養を資する事實に大いなるものがある。

徒らなる心醉を排す

併し這般の思索に就て吾等の陷り易きは其書に心醉する結果、之を正當に判斷するを忘れ、書に魅せられて反つて自家の本領を失却し、平地に波を起す志望を起すことである。惡く書を信ずれば書なきに如かず、如何なる目的の讀書に於ても、單に之れに心醉して正當の判斷を缺くほど危險な事はない、彼れには彼れの事情境遇あり、我れには我れの事情境遇あり、須く自家頭上に於て思索せよと云ふのは之れで、一意に心醉せよと言ふのではない。

心醉するのは思索を要らぬ、思索といふことは判斷を含んで居るので、判斷して而して後、其の學ぶべきを學び、去るべきを去ることである。

ゲーテ曾て讀書を分類して

鑑賞と判斷との並行

或人は單に讀書して何等判斷力に訴ふることなくして鑑賞し、他の人は鑑賞せずして判斷に努め、更に他の人は鑑賞しつゝ判斷し、判斷しつゝ鑑賞す、吾等が讀書は常に鑑賞しつゝ判斷し、判斷しつゝ鑑賞せねばならぬ。

唯鑑賞的に聖賢の書を讀んで少しも判斷的思索を運らさゞるは、書に醉ふもので眞に書を讀むものではない、書に魅せらるゝもので書を領會するものではない。

判斷に流れて鑑賞を缺くより、徒らに自我の觀念のみ强くして書中の意義をも採入れて自家の修養に資する能はざるが如く、鑑賞にのみ走りて判斷を怠るものは、其の本領を失墜して自家の實力たらしむることが出來なくなる。

中村忠昌の讀書論

中村忠昌の『讀書論』は能く這般の理を道破してある。繁を厭はず其の全文を擧ぐ。

(一)人は心正しく眼明かにして物に惑はされざるを要とすべし。心は物に引かれて移るものなり、されば天地不易を心となして書籍異端に欺かれざるを要す。

(二)書籍は能く人心を移し易ゆるものなり、讀書の士一心主なる時に、讀むに隨ひて心の移り行くこと魔魅に會ふが如し、終に心をとらるゝに至る。

(三)書籍は飲食の如くすべし。食ふて能く其味を詳にし、一正當なる判斷を以て之れを自家頭上に持ち來るは此種の目的に對する讀書思索の一大要件であるが、これを學ぶには先づ書中の意義若くは事實を正當に理解し、さて其意義を自己の思想と比較し、其の事實を自己の

讀書思索の大要件と感想錄

に國体にかなふものを擇ぶべし、これ學問の一大要素なり、竊に怪む世の讀者却て書籍に讀まれて魂心爲めに變易せられ、終身之れが奴となる、歎すべきの甚だしきなり。

(四)凡そ讀書は本國の爲めにするの志なき時はみないたづら事なり、書籍を食ふて詳に味ひ、正偏得失を明にして眞國の書に魂をとらるまじきことなり。

(五)學問は天地を師として國の中を執る、最上なり、天地を師とするは今日の事物に就て正理を推すを云ふ、凡そ森羅萬象、萬事萬端、盡く天地の發見にあらざるはなし。されば萬事萬端、天地の正理にしたがはざれば、一日も行はれず、天地の正理に從ひて事を治め、天地の正理に基ひて物を安んず、之れを天地を師とすと云ひ、天地を書籍とすと云ふ。

と、中村忠昌は文政天保度の讀書家、其言古典を帶びたりと言ふも、云ふ所は自主的觀念の鼓吹にして漫然たる讀書家の頂門の針である。

境遇と比較し、其の千古に傳評せらるゝ所以を考へ、其の今尙ほ新たなる理を推し、思索數番こゝに正當なる判斷を以て、取るべきは取り、捨つべきは捨てゝ以て自家の用に供するので、此の種の讀書に於て思索の殊に最も必要なるを感ずる。思索の必要は此の如くであるが、事、多く自家に關するが故に、超然たる研究的態度と異り、諸種の事情油然として心に浮び、思ひはあらぬ方に走せて書中の意義を離るゝ事、遠きに至ること少なくない。

上來しば〳〵靜坐の讀書に缺くべからざるをいふたのも皆な此の思想の散亂を防がん爲めである。心の糸は亂れ易く、觀念の聯合は甲より乙、乙より丙と葛藤紛然たるに至るものあれば、此の妄念を制して復び書中の文字に落し來るには其工夫靜坐に過ぎたるはない。閉目靜坐して其の心氣を養ひ、再ひ思索に從事する時には、心淸うして義理も亦明かなるに至るのである。書を讀んで快心の所に到り、靜坐冥想して感じ來りしことを抄記して、他日思索の料に供するは最も必要で、一時は感興大いに至るも之れを抄記し置かざる時は復び求め難く、曾て思索したりしことも全然忘失することあるは讀書家の常に實驗する所、即ち讀書家は備忘錄の外に感想錄やうのものを製して、其感想を摘記し置くの必要がある。これは單に修養の爲めの讀書のみならず、研究の爲めの讀書にも必要であるが、殊に修養の資料とするには利益もあり興味もあることである。

第二　井上哲次郎博士の書齋整頓法と讀書法

書齋は主人公精神の反影也

書齋は出來得る丈、之を淸淨にし、且つ又之を神聖に保つことを要する。固より書齋は朝に夕に或は書き、或は讀むことを爲すの所であるから、書冊筆墨の類、縱橫散亂することを免れない。併ながら出來得る丈、筆墨紙冊等悉く其處を得て能く整頓するやうに努め、一切亂雜穢雜を誡むべきである。殊に有形無形の不淨物を避くることが必要である。それと云ふのは、書齋は主人公に取つて其頭腦の次ぎであるからである。單に頭腦の次であると言つた丈では、一寸分り惡いであらうが、斯樣に言ふたならば分るであらう、吾々の頭腦の中にはいろ〳〵の觀念が往來するものであるが、少しく吾々の頭腦を神聖に保たうと言ふならば一切、嫉妬、猜疑、憎惡、眞恚、その他、不正不善の觀念を一掃し、純潔にして些の汚點をも着けざるものとすべきである。肉体は他の動物と同じく、不淨を免れないにしても、少なくとも、唯々此頭腦を以て、寸毫も不淨に穢されず、徹頭徹尾、神聖なる狀態を存續すると云ふ事は、德性を涵養する者の第一に力むべき所であるが、然し書齋は矢張り頭腦の反射であり、書齋の如何は其主人公の精神狀態の如何を現してゐるとの事である。書齋を亂雜ならしめて、一向平氣でゐると云ふやうなことであるならば、矢張りその人の精神狀態が既に左樣な有樣で

あるからである、精神狀態が一切亂雜蕪雜を許さず、悉く正確に、悉く純潔ならしめやうと云ふ銳敏なる批評的觀念を以て、滿たされてゐるのであるから、其書齋の狀態も、之れに相應するやうに爲して來ると云ふ事は、必然の結果である、又その書齋の中には如何なる書類を陳列してあるか、其愛讀してゐる書類は如何なる性質のものであるか、高尙なるものであるか、野卑なるものであるか、若し極めて野卑なる小說及びその他蕪雜なる雜書類であれば、矢張りそれは、主人公の嗜好を現はしてゐる、若し又其書類が哲學書類、宗敎書類、科學書類など、高尙なる方面のものであれば矢張りその主人公は、左樣した高尙な嗜好を有つて居るに相違ない。それで、書齋の中の有樣で主人公の性質が分る譯である。書齋の有樣は主人公の精神の反射である。であるからして、主人公の頭腦の中、即ち精神が純潔でなければならぬやうに、書齋も又純潔でなければならぬ。純潔にして且つ整頓された書類の中に於て、眞に趣味あり、秩序ある讀書が爲し得られるのである。

書齋の整頓法

書齋の中には多くの書籍を陳列して置くべきは勿論の事であるが、殊に平生最も愛讀する所の書類、及び書類講讀に缺くべからざる字書類の如きは、悉く之を卓右に備へ置かればならぬのである。又古今を問はず、東西を論ぜず、その最も敬慕してゐる所の偉人傑士、若くは聖人君子の肖像、又は筆蹟等を壁間に掛けて、朝に夕に親しく之に接すると云ふことはなか〳〵に趣味あるものである。未だ年の若い中は、書籍に就いて左程の趣味を生ずる者ではないが、漸く經驗を積集し、世故に馴練し、人事を達觀した後に、古聖の書籍が壁間に掛けて之を眺むるときは、一種謂ふべからざる趣味を生ずるものである。書籍は又書籍以外の趣味を涵へ來るもので、是れ決して書齋中に缺くべからざるものである。若し又廣大なる書齋があれば、世界地圖、或は日本地圖などを掛けるのも有益であるが、書籍類は半ば書齋の裝飾にもなるのであるから、餘地があるならば、之を懸けるのも甚だ有益である。而して斯くの如く多く書籍を集め、又書齋を清潔にし、古人の肖像、筆蹟等を掲げて裝飾したる以上は、愈以てその主人公の頭腦を象る譯である。斯樣なつて來ると、書齋は愈貴重なものとなつて來て、自己と書齋とは決して離るべからざる者となる。

書齋の意味と精神修養

斯くの如くに書齋の樂と云ふものは、趣味津々として盡きず、老の將に至らんとするに至つては、愈々增大して來る傾向がある。人は皆一度は若いなければならぬのであるが、その若いた後に至つて、子孫の成長、一家の繁昌等を樂むのも、固より大なる樂みであるに相違ない。併しながら書齋の樂みは、一種高尙なる精神上の趣味を涵へ、又總て人世の事に關して その方針を明かにすることも出來るのである。子孫の爲に謀るも、一家の爲に謀るも、その他如何なる事の爲に圖るにしても、平素の識見を養成してゐなければならぬ。それは何處に於てするかと云へば、書齋に於てするより便利はない。この紛々たる俗世界に於て少くも書齋の一室を設け、之を神聖に保ち、その中に百般人事に就いて慎重なる考察を下して、正確にその執る所の方針を定むることが必要である。

最も進步した る實驗讀書法

書齋は多く書籍を積んで置く所であるけれども、唯書籍を講讀する許りではない。世間の事と云はず、學問上の事と限らず、自ら攻究する所がなければならぬ、從つて又著述をしたり、抄錄をしたり、色々仕事がある、併しながら書齋の中に於ては、讀書と云ふことが一の大なる仕事であるから讀書について少しく述べて置く、多く古今東西の著書類を蒐めても、之を無闇矢鱈に讀むと云ふた丈では、學問にはならぬ。況やこんな事で識見を養ふなどゝ云ふ事は、甚だ覺束ないことである。所謂濫讀を誡めねばならぬ。濫讀は精神力を撲滅して了ふものであり、無闇矢鱈に手當り次第に多くの書類を讀むと

唯讀む許りで到底自分の力を養ふ事は出來ぬ。それでこれからそれへと讀んで往くと、自分の考へる力がお留守になつて、一向發達して來ない。唯他人の考に頼つてばかり支配されて往く事になり、己れの頭腦の中には何が滿ちてゐるかと云ふと、他人の考許りである。丁度自分の家の坐敷にも、勝手にもお客許りで、主人公は居所を失つて屋外に出て居ると云ふ樣な有樣である。それでは自分の家であるか、他人の家であるか、全く解らない譯である。さう云ふ事で段々續けて往くと非常に詰らない結果になつて來て、唯讀むと云ふ丈で、眞に識見ある學者を作り出す事は出來ない。無闇矢鱈に書物を讀むことを、獨逸では「レーセライ」「Lesesei」と云ふ。レーセライは學者となる方法ではなくて、日本で言へば、まア道樂讀みである。道樂讀は全く讀書の方法を知らない所から起る、貸本から小說を借りて、無闇矢鱈に讀んでゐる人があるが、それは矢張り道樂讀なのである。道樂讀は博く各種の書類を知ることは出來ても、それは組織も統一もない知識であつて眞に正確な知識ではない、ごた〳〵した雜駁な學問をなすことは出來ても、一向自家の主張と云ふやうなものはない。それと言ふのも畢竟初めから批評的眼光を以て書籍を區別することなく、漫然と遣出すからである。さう言ふ濫讀の人と云ふ者は一向氣焰は上らず、精神が薄弱にして又怯懦なるものである。自分に識見あり、綱領あり、主義ある者は、之を主張して萬夫も亦辟易せしむる力を以て起つて來るのであるけれども、濫讀の人はさう云ふ事は仕樣としてもされない。『誰は斯う言つた、彼は彼あ言つた』と言ふて他人の說を紹介することは出來ても自分の主張としては何もない。左樣な濫讀は己れの精神力を殺して仕舞ふ樣な、殘酷なる仕業であつて、學者の深く誡むべき所は實にこの點にあるのである。然らばこれを避くるには如何にすべきかと云ふに、先づそれに就いては、讀書法を明かにするより外はない。讀書法の必要は實に此に基いて起るのであつて、就いては左に讀書法として最も注意すべき點を列擧する事にする。

過讀を要する書物と拔の物

(1)讀書法は書籍に由つて異つて來るのであつて、一切の書籍は斯うせんければならぬと云ふやうな事もあるけれども、併し書籍に由つて其法を異にしてゐる事は鮮くはない。それで又先づ書籍は通讀すべきものもあり、又通讀するには及ばないものもある。即ち拔讀をしてそれで澤山であると云ふ性質のものがある。例へば隨筆的の書類であるとか、或は類書若くは辭書等の如きものは、始めから終りまで一々通讀するの必要は決してない。自分自分の研究の目的に適ふやうな部分丈を拔讀すれば足る。それで如何なる書籍も手に觸れるものは、悉く通讀せればならぬと云ふ風に考へたならば、非常の間違であろ。所は愚の甚だしき者である。と言ふて又、如何なる書類も必ず通讀するに及ばない、所々拔讀すれば、十分であると考へたならば、それも又前者と同しく愚の甚だしきものと言ふて眞い。この拔讀と言ふのは狹い仕方であつて、或重要な書類に至つては即ち己れの專門とする所の書類で、どうしても通讀して置かればならぬと云ふ樣なものは、是は通讀を要するのである。そこで左樣に書類の性質如何によつて區別して行かればならぬが、かゝる區別をすると云ふことは、是れは其の人の識見に依頼するより外はないのである。何々の書類は通讀せよ、何々の書類は拔讀せよと云ふ風に一定なる譯には行かないものである。

熟讀且つ研究を要する書物

(2)文書類に依つては嘗に通讀すべきと云ふ許りではない、それ所ではなく再讀を要するものがある。再讀して始めて其趣意が能く呑込み得らるゝ事が多くある。所が再讀ではない、或場合に於ては三讀四讀も亦決して避くべからざることもある。それが殊に學術上重大なるものに至つては、唯々讀む即ち「レーセン」と云ふことのみでは足りないのである。「スチュデーン」即ち研究することを要するので

ある。研究となれば、只に趣味に就て深く考へるのみならず、又前後を照し、矛盾があるか、否か、その趣意の果して是なるや否や、種々なる點に就いて精細なる考察を爲すことである。又は場合に由つては其内容の大要を抄出することも必要であらう。であるが書類に依つては唯々一覽にして足るものもある。これ亦その人々の識見に依つて區別し得られることであつて、一般の法則と云へることが出來ないのである。そうして又その人の專門々々に依つて異同あることを了解せねばならぬ。

一時一書の讀書法

(3)讀書法としては一時に一の書物を讀むことが最も得策である。それで今まで或學者は一の書物を讀み初めたならば、それをスッカリ讀了して、又其趣意を能く呑み込んだ後でなければ、他の書に手をつけてはならぬと言ふてゐるが、是れ確かに一の讀書法である。成程いろ〳〵の本に手を著けて、あれもこれも嚙りかけて、何も纏まらぬと云ふやうなことは、甚だいけないことである。さう言ふことでは決して明瞭精確なる智識を得ることは難い。それで一つの書物を讀みかけたならば、十分その趣意を了解することを力め、それを了るまでは、他の書に目を觸れないと云ふことは、甚だ宜しき讀書法である。併ながら是れも一概に斯樣に確定する譯にはいかぬ。第一學校に通學してゐる者は、種々なる教科書を讀まんければならぬので、必ずしも一時に一書と限る譯にはいかぬ。學校の關係を離れた者にしても必ず一時に一書と限ることの得失如何は疑はしいのである。一時に二三の書を讀むことも、亦一の讀書法であらう。殊に容易に讀切れない樣な困難なる書物にかゝつた時には、餘りそれ一つに長くかゝると退屈して來る。どうもそれでは堪らぬので多少變化を要する。さう云ふ場合には、性質の違つた讀み易いやうな書類を一二入れ混ぜて讀むと云ふことが。甚だ得策である。或學者はこの方法を勸めるのであるが、かゝる讀書法の得失はその人々の境遇に依つて異なるものであることは勿論である。若し餘日を費さずして、容易に讀み終ることの出來る書籍を手にしたならば、先づそれを誦讀し終つて、而して後に他の書籍に移ることが得策である。併しその書籍が例へば、カントの「プエルヌンフト、クリチーク」の樣に容易に讀了ることの出來ないそして輕卒に讀み終らうとすれば、その趣意を了解することが出來ないと言つた其合に、隨分勞力をかけて研究せんければならぬ場合には、一二の他の容易くて、面白い書類をその間に折々入れまぜて、誦讀すると云ふことは、變化を要する爲に必要である。さう云ふ場合には二三の書類を取り交ぜて讀むことは一向差支はないのである。

數多の書物の摘讀法

(4)又こゝにへの讀書法がある。それは自分が研究したいと云ふことによつて、數多の書類を通じて、これを研究することである。その方法は大いに有益なる結果を生ずるのである。例へば、良心のことを研究しやうと云ふ時には、種々なる倫理學書類の中に良心の事を論じたる所だけを索し出し、それを讀破することである。さうすると云ふと、自分の研究しやうと云ふ事柄であるからして、しみ〳〵とその事が分り、又各倫理學家の學說の異同も分明に呑み込むことが出來る。漫然各種の倫理學書類を始めから、終りまで通讀して行くのとは、餘程結果が相異して來るのである。漫然讀む方では、左程己れが注意してゐない事柄にさへ、總てを通讀することであるからして、往々無意識の中に過つて、忘れて仕舞つてゐることがある。それで斯樣に特殊の問題を擧げてこの問題に依つて、研究の途を開くと云ふことは、頗る奬勵すべきことである。但しこの方法のみで宜しいと云ふことではない。尙て、讀した書でも、矢張りこの方法によつてやると、一層その特殊の問題に關する各家の學說が明瞭になるのであるからこの方法も讀書法の一として相交へて用ゆべきである。

注意點と批評の書入れ

(5)自分の讀むべき書類に、成るべく之を誌入することを善しとする。これはどう云ふ譯かといふに自分が讀む所の書籍には綱外に批評を加へるが良い、自分の書物だから構はぬ。自分はかう思ふと云ふやうなことを綱外に書き込む。又要點々々は四洋書なれば下に鉛筆で線を引いて、區別して置く。それが若し又和漢書なれば、圓點を付けて置くのである。それが大變に他日の用に大いになるのである

からである。若し自分に必要なる部分を悉く抄錄して置くことが出來れば、それは尙ほ一層結構である。けれどもなか〳〵さう云ふ事は、容易に出來難いことであるからして、先づ批評を加へたり線を引いたりして置いたならば、それが幾らかの抄錄に代るのである。但し資力の乏い者にはなか〳〵それは難いかも知れぬ。けれども出來る丈、自分で書物を買求めると云ふことを力めさへすれば、それで宜しいのである。又青年の身にとつては、澤山書物を買ふことはむづかしいのであらうが世間の普通の書物を買ふことが出來れば、その買へる範圍内に於てこの考を以てゐれば善い。但し青年が妄りに古人若くは先輩の著書に批評を加へると云ふことは、決して吾々の奬勵するところではない。それを言ふたにしてもそれは成長したる人々に對して言ふことであつて、決して若い人々まで皆やれと云ふことではない。併し青年にしても自分の書物であれば、此所は度々讀みたいといふ樣な所、又特に自分の修養上に適切と思つた所などは、何か標記を付けて置いて、決して惡るくはないのである。さうして圖書館などに往つて書物を觀るのは唯々參考の爲めにするのであると云ふ位の考であつた方が宜しい。

閲讀書の保存の必要

(6)一度自分が閲讀したら書類はなるべく保存して置くことが必要である。縱令ひ、片輪零碎と雖も、皆て一讀したることのある以上は、これを書籍に陳列して置

く。何故にその事を左樣に喧ましく言ふかと云ふならば、それは皆他日の參考になるからである。如何なる書籍と雖も、自分が一讀したる以上は、それだけの勞力をかけて居るものであるからして、決して之を無駄にするやうなことをしないで、之を保存して他日の參考に供し置く。吾々が人世に處するに當つては、色々なことが起るものである。又學問上の事業を爲すにしても、種々なる問題に接して來るものである。そこで、意外の書物が參考になつて來ることも出て來る。斯う云ふ書物はもう不必要だから、古本屋になり賣拂つて仕舞ふと云ふやうな考へを起して賣拂つて仕舞ふと、案外又この書物を見たいと云ふ氣も起つて來るものである。人に依つては、段々書物を讀んで、それが澤山になると、一度に古本屋に賣る人があるが、それはどうも宜しくない。兎に角、學者として事業を大成する人に取つては その方を得たるものではない。又青年の徒がどうかすると云ふと、讀み了つた書物を質屋に持つて行くとか、古本屋に賣るとかして、衣食の代りにするやうなことが往々あるが、それも已むを得ない場合は致し方がない事であるが、輕々しく左樣なことをするのは、後日の悔の基である。殊に批評を加へたり、線を引いたりして目標を附けて置いたやうな大切な書類を、雖作もなく、棄てゝ顧みないと云ふことは、事業を大成する人の心底とは。大いに違つてゐる。事業を大成する人は、かゝる微細なる所に用心深い者である。それは一歩進めて之を考へれば、斯う云ふことになる。自分が一度閲讀して來た所の書類は、自分の現今の知識の源泉である。それで總て自分の閲讀した書類は、自己の一部分となつてゐる譯である。曾に自己の友であると云ふ位ではなくて、今日此に出來て來た所の 自己の中に一部分となつて遺入つて來てゐるのである。それであるからして縱令ひ、中學校小學校時代の教科書と雖も、自分と親密なる關係があるからして、之を保存して置くと云ふことが、他日十年若くは二十年を經たる後には非常な趣味を生ずることのあるものである。

學者の陷り易き書籍讀の弊風

(7)學者は色々習慣を生じ易いものであつて、その習慣の中に文章を書くことを續けろといふと、段々書くことが、面白くなつて、書くことを主として、讀むことを第二にすると云ふ樣な習慣が出來る。之に反して 又讀むことを主として、書くことを第二としてゐると、段々書くことが五月蠅くなつて來る。又讀むことを段々勉めて行くと、それが大變面白くなつて來る。面白くなつて來るのは宜いが、もう一層その習慣が增長して來ると、今度は澤山讀むといふことが、一つの嗜みになつて來る。即ち讀んだ所の 書籍の多數を 以つて誇らんとする如き 一種の習慣を生じて來る。それが往々にして學者にはあるものであるが、それは 矢張り一種の病氣である。かゝる疾病の生じた時は、遠かに之れを矯めて行かなければならぬ。もしその病をして自然の傾向に任して置くと、前にも論じた通り、彼の濫讀の弊を生じて、精神氣骨を合せて、悉く之を摧滅して仕舞ふが如き恐るべき結果を來すのである。

書籍の讀に注意せよ

(8)書籍を讀に方つて、一種異樣の聲を發することは甚だ宜しくない。則ち音讀の事であるが、妙な節をつけて唄を謠ふやうな、坊主がお經を讀むやうな讀方をする者がある。さう云ふ喉の聲を出して 書物を讀む 時にはその音調の方に 兎角に氣を取られ 易いのであつて、意味の方は疎かになつて來る虞がある。書物を讀む以上は、意味を了解せねばならぬのに、それ何事であるか、妙な聲を出して唄でも謠うやうな氣持で 上り下りの調子などを付けて讀むといふことは怪しからぬことである。是れは 東洋一般の 弊風かと思ふが甚だ宜しくない。又中には 夫程高い聲を出さぬまでも、ブツブツと低い聲で 囁くやうな聲をして 讀むのもあるが、あれも音讀と云ふより。矢張り聲の方に兎角に氣を取られて、意味を解するには 決して宜しくない。それで書物を 讀むのには默讀するより外に善い方法はないと思ふ。沈默し、端坐して、唯々其の意味の如何と云ふ所に心を凝らして 讀んで行くことが、是れが最上の 讀書法である。但し前にも例外は あるので、外國語などを覺えるには、發音の工合を知らなければならぬから、この時には仕方がない。何所か人離れした所に行つて、發音して見て、幾度も練習する。則ち練習する爲に、音讀が必要となつて來る。その他一切音讀は遠くべきである。音讀は自分の爲に惡いのみならず、又他人の妨げとなることが少くはないのである。同じ校舍の內に在つて音讀すれば、周圍の人々の爲に妨げとなり、お互に聲を張り上げて音讀すれば、張の群の如く喧しくなつて、近所近邊に妨害を與へる。殊に夜分などは、他人の安眠を 妨げる虞があるから、斷然その弊風を 避ければならぬ。

同情心と批評眼との讀書法

(9)書物を讀む以上は、その書物に依つて何か益を受けやうと云ふのであるから、同情を以てこれを迎へればならぬ。先づ能くその主意のあるところを咀嚼して、能く著書の見解如何を了解せねばならぬ。若し反感を以て 書物を迎へるならば、どうしても先入主となるものが、吾にある所からして誤解を招くこともあらうし、又益を 受くることも少くないであらう。併しながら 讀書の際には その讀む所の書の如何を問はず、必ず批評眼を以て迎ふべきである。己れの精神を失つて 讀んでは何の益にもならぬ。己の精神が 讀書の際の主人公となつて 來なければならぬ。何故いけないと 云ふならば、讀む所の書が 皆正しい事ばかりを 主張してゐるとは 言へぬ。色々間違つたこともある。さういふ間違つた考について惑はされない爲めに 批評眼を以て迎ふべきである。それで 沈默して 書物を讀む際に 能くその主意を了解したる以上は、その間に考へて見て、果してそれが是であるか、非であるか、自己の精神を以て判斷しつゝ 讀むべきである。古人が『盡く書を信ぜば、書なきに如かず』と云ふたが、實にその通りであつて

已れの精神を空うして行くと、とんでもない結果になるから、何所までも是非の如何を判斷すべき批評眼を失つてはならぬのである。

全体の主旨綱領を捉ふ事

(10)書籍を讀むに當つては、その全体の主義綱領を捉へなければならぬ。最もこれは書籍の性質によつて違ふのであるけれども、殊に哲學書或は哲學同盟に關係あるやうな書物に就いては、この心掛が無くてはならぬ。さう云ふ譯であるからして、區々たる例證やら區々たる些末の點に拘泥することなく、寧ろ主義綱領に着眼して行くのである。それでかくの如き書類であると、一部分を讀みかけて拋つて置くやうなことは宜しくない。拋つて置いて半年も過ぎてから、復た先きの方を讀むと云ふやうなことでは、前後を一貫してゐる所の思想の聯絡を失つて仕舞ふ。その結果たるやその著者の主張を誤解し、間違つた判斷を下すやうな事になるものである。それは著者に對して甚だ不親切なことを考へ、それが能く分れば、それに就いて公平なる判斷を下すべきである。之を證明するが爲の區々たる一二例證や、その他の事は、縱令ひ誤說があつても、深く咎むるに及ばないのである。

讀書の時間と讀書力

(11)讀書の時間は午前が最も宜しい。午前の中でも殊に早朝を極上とする。又空氣が清新で旭日が漸く東より昇らんとするの際、殊に妙味がある。見に角にこの午前の貴重なる白日と云ふものは、書齋の事業としては、最も重大なる時機である。この時に世間の碌に用も無い人の爲めに妨げられると云ふことは、非常なる不幸である。どうかこの時は靜肅に愼重に專ら讀書に心を傾けて、この白日を空しく過ぎさらしむる樣にしたい。讀書人に取つては、この午前の白日程貴重なものはない。午後は少しく午前より劣る。併しながら、食後二十分若くは三十分の休憩の後に始めると、復又餘力が相應に起る者である。しかしながら出來る事ならば、午前の書物より較や容易い物を採つて讀むことが最も適切である。夜は丁度人間の壽命に比ぶれば、老後の如きものであつて、一日の中では一番劣る。氣力の最も衰へたる時である。それで、夜間は餘り六ケ敷い物を讀むよりは比較的に容易いものを讀む方が得策である。併ながら又例外がある。秋と冬との夜は時として大に讀書に適することがある。四隣人定まつて月白く風清く、讀書に深く趣味を生ずることもあるものである。さう云ふ場合には却つて哲學書類などを讀んで、古今の遠想を喚起することも、なか〳〵に面白いと言はればならぬ。然し先づ普通の場合に於ては、餘り夜遲く讀書をすると云ふことは如何であらうか。どうも生活をして不規則ならしむるの恐れあると云ふことは、翌日朝寢坊をして、早晩の大事な時期を夢中に過すと云ふやうなことがあつては、這個この上もないことである。夜の勉强の爲めに翌日の午前の白日を半ば睡眠の夢を以て過ぎ了ると云ふ樣なことであつては、甚だ遺憾である。それで先づ、普通の場合では午前が最も宜い。午後は之れに次ぎ、夜は又これに次ぐと、斯う決めて置いて差支はない。

一念を集注せよ

(12)讀書の際に種々なる世間の俗事を喚起してはならぬ。讀書は沈默して精神を凝らして居られねばならぬのに、忽ちにして相場の事を想ひ出し、忽ちにして演劇の事を思ひ起し、其他くさ〳〵の俗界の事を斷續して、連想して來ると云ふやうなことは非常に讀書の趣味を破壞するのであつて、昔から學者が多く戒める所である。古人はこれを閑思雜慮と云ふた。くさ〳〵の無益なる事の思ふて、粹然たる心の狀態を許すことが甚だ宜しくない。それで讀書の際は一切餘念を斷じて、唯この一點にその心を集注すべきである。

辭書は書齋の文字の師なり

(13)讀書の際どうしても坐右に要するものは、辭書である。そこで辭書について注意を要することがある。辭書は書齋に於ける文字の師である。已れが文字の師として宜しき辭書を求めればならぬ。近年は袖珍書(ポケットデクシヨナリー)を以て敎場に出入することが最も便とする所である。但し袖珍辭書にしても、成るべく精確なるものを選ぶことを力めればならぬが、世の學者の爲めに之を言へば、辭書は最も完備したる精確なる大辭書を坐右に置かればならぬ。學者の辭書について搜索する所は、その了解し難い文字である。所が完備しない粗畧なる辭書は、さう言ふ文字を漏入して扉らぬ。折角索搜すれば、其文字が見當らぬと云ふ風では、學者の需要を充たすことは出來ぬ、容易い世間普通の文字は、搜索するに及ばぬ。拠索する所のものは、そんなものではない。それで如何なる雜文字かも網羅して遺す所がないと云ふ樣な大辭書を備へて置かればならぬ。中途半途の辭書なれば、聊も用をなさぬ。中途半途の辭書があつても、又それ以上のものを要するやうになるのであるから、初めから最上の辭書を要するのである。それから又人によつては、讀み歩いてゐる間に分らない字が少々あつても構はず、すん〳〵通り拔けて行く習慣があるが、その習慣は甚だ善くない。それは粗末な讀方であつて、文字をよく了解しないが爲めに誤解が起る。誤解を重ねて置いて判斷を下した所が、それは正確なる判斷ではない。故に文字の不明なるものは、悉く正確なる辭書に依つて質し、寸毫も不明の所を遺さないやうにして、然る後に先へ進んで行くことが讀書法としての根本であらうと思ふ。それ故に殊に辭書の選擇の事をやかましく言ふ譯である。例へば英吉利ならば「ウエブスター」か「スタンダードデクシヨナリー」か、さう言ふのを備へて置くべく、又佛蘭西ならば、「リトレー」の辭書の如きものである。希臘ならば、「メーベ」、羅甸ならば「ゲオルゲス」と云ふやうなものは座右に缺くべからざる辭書である。

古書と新書の得失

(14)尙ほ古書と新書との得失に就い

て一言注意して置かう。新書とは言ふに及ばず、新刊書類を言ふのであるが、これは甚だ便利なもので、固より科學、殊に自然科學に關するものは、新刊書籍に依らればならぬ、併し文學の書類にしても、新刊書籍は大に有益なものがあつて、始終これに注意して居らればならぬ、日本でも、活版事業が進んで來るにつれて、餘程古代の書類よりは便利なるものが出來て來た。併しながら古書の眞價値を忘れてはならぬ。古書の中には過去數千年間に出て、その間に偉人傑士若くは、聖人賢者は乏しくないのである。それにつまらない書類は、何時の間にか忘れられて、今まで傳はつて來て居るものは、皆千古不磨の價値を有して居るのである。それであるからして、如何に新刊書が貴重なるものと雖も、これが爲に古書の眞價値を忘るゝやうでは、余の甚だ遺憾とする所である。今親指を目の前に差出すと、富士山の大なるものも、是れが爲にかくれるのである。新刊書籍が起つて眼前に陳列されると云ふと、是が爲めに古書の眞價値を忘れる嫌れがある。況して新刊書類に於て、古書の批評などをして、その眞價を蔑ろんとする場合がある。兎に角世人は古書を侮るのであるが、古書必ずしも侮るべきではない。それに及して又新書をこれが爲に、悉く侮るべき者だとは言はない。併し新古書の中に數百年 經る間に、大鼠に吹流されて、全く無闇に歸するものが無數であらうと思はれる。それで決してこの事を忘れてはならぬ。

讀書の時の態度作法

(15)讀書なす際に体格を崩して讀むことは、甚だ宜しくない。これは學者の深く戒むべき所である。殊に哲學に關係ある書類などを讀む時に体格を崩して讀んでゐては、なか〳〵その旨趣が能く呑み込まれやう筈はない。体格を崩すと云ふのは、例へば寝轉んで、仰向になつて兩手で書物を拔げて讀むたり、或は横になつて頰杖を突いて讀んだり、その外樣々な不作法な態度を爲して書物を讀むこゝで、是等は悉く讀書法に適つて居ない。固より古代の儒者などが言ふたやうに少しも身動きもならぬやうな態度を爲して讀む必要はない。必要があれば身を動かしても一向差支はないのであるが、併しなるべくは端坐して心を凝らして書物に向はればならぬ。勿論木偶人の如き形を爲すには及ばない。併しその書物の内容如何によつては、体格を崩すなどと言ふことをしないで、矢張り直ちに古代の偉人傑士、若くは聖人賢者に對するが如き觀念を以て書物に對せればならぬのである。是れも固より例外があらう。温泉とか、海水浴場とか云ふ場所に於て、新聞雜誌若くは小說の類を讀むが如きは、一概に体格を正うせればならぬと云ふて、青年を責むべきではない。

驗に依つて得たる所である、その内容に於ては、その人々の境遇如何によつて、多少の異同も生じて來ることがあるけれども大体に於てはさう變らぬ積りである。又青年と老年の學者とは、同一に律する譯には往かぬ。それで自分々々の境遇に應じて之を取捨したならば宜いだらうと思ふ。

第三　浮田和民博士の讀書法

娯樂の爲めの讀書法

讀書の目的は讀む人の性質、讀む場合の氣分、讀む時や讀む場所に應じて、それ〳〵相違の起るものであるが、大體に於て先づ、實用の爲めの讀書、修養の爲の讀書、娯樂の爲めの讀書の三つに大別する事が出來ると思ふ。娯樂の爲めの讀書は氣分次第で、興味湧き來つた時は、何れの場所、何れの場合を問はず、恰も暇を盜むやうにして讀むものであるから、讀む時とか、讀み方を限るべきものではないが、概していへば、本來が樂しみの爲め故、成るべく一日の業務を終へて、打寛いた安心した時に讀むがよからう。讀む方法も自分一人で讀むよりは家族を集め、或は友を集めて、一家團樂の爲め、友情を温める爲めに、聞かせながら讀み、或は彼等に讀ませて聞きながら樂しむといふ方法を取るのが最も娯樂の目的に叶ふと思ふ。

修養の爲めの讀書法

修養の爲めの讀書法は、其日其日の心得を正しくする爲めに讀むのであるから、成るべく其日の初め即ち朝の内に、假令一分間でも一句でも、古今の經典或は現代の著書でも、精神修養になるものを讀むがよかろう。讀書時間の長短は決して論ずるに足りない、毎朝五分間づゝ讀書しても、一年繼續すれば千八百二十五分、時間に見積れば三十時間と二十五分になつて、少しづゝでも毎日續けてやるといふ事は非常な効果を生み出すものである。却つて懸張つて一日の内に澤山讀まうとすると、長持ちがしない。そして五分か十分ならば、どんなに多忙の人でも毎日實行の出來ない事はないのである。問題は其人が修養の意志有るか無きかで決せらるゝので、忙がしいから讀めぬなどゝいふ事は有る可き筈のものでない。勿論修養に時の制限も處の制限もあるべきものでないから其人の境遇、氣分に應じて、前述した娯樂的讀書と同じく、何時如何なる場合に讀書するも差支はない。又適當の時間も朝に限つたものではない。人に依つては我分に修養書を繙いて、一日の行事を省みて反しくなければよし、疚しき點があれば明日より改むるといふ

方法を取るのも結構であろう。

唯修養は讀書や學問によるものでない。是は意志と實行とにある事で智識の問題でない。即ち讀書もせず學問もなしに品性行爲兩ながら善良な人もある。此の如き人は所謂『未だ學ばずと雖も、吾は必ず之を學びたりといふ可き人』である。修養の方法は決して讀書にあるのではない。又讀書が最も善い方法ではない。經書に讀み經文を覺えて居る學者や僧侶に限つて人格の劣等なのが多い。讀書は却つて修養の害といふことも出來る。但し修養の爲め讀書する意志があれば時間は必ず見出すことが出來るといふ丈である。

實用の爲めの讀書法

實用の爲めの讀書には、何か必要事件が突發し俄かに調べる爲めに讀書するのと、平生自分の專門的智識を向上せしむる爲めに讀書するのとの二方面がある。特殊の事件に就いて調べる場合の如きは、固より時間を限り、取調中は他の仕事を廢しても、專ら研究的に讀まればならぬ。殊に新計畫を斷行する場合の如きは、出來得る限り多くの參考書を讀み、他人はどういふ風に實行したか、自分の計畫と全く相反した計畫を取つた人はないかと、當面の問題に關聯した事は凡有場合の事實を知り盡さなければならぬ。然し特殊の事件の爲めでなく、平生自己の專門的智識を涵養する爲めに讀書するのならば、やはり朝夕、或は五分、或は十分の時間は豫定して、勵行するがよい。それも出來ない人は、汽車、人力、電車、自動車の中に讀書する時間は必ず發見せらるゝものである。

以上に述べた讀書時間は「暇が無くて讀書が出來ない、出來ない」と煩悶してゐる人達に最も憶却でなく苦痛なしに實行し得る標準を示した迄の事である。

有効に讀書する根本要件

要するに問題は其人に讀書趣味が有るか無いかに依つて決せられるのである、趣味さへあれば如何に多忙でも、如何に貧乏でも、其人は何處かに讀書の暇を拵へ、又讀むべき書を見出し手段方法は自然に出て來るものである。讀書が一の お勸めであつて、所謂勉强するやうな心持で掛る間は、假令充分の暇があつても有効な讀書は出來ない。譬へば讀書の精神に於けるは恰も食物の肉體に於けるが如きものである。人が若し食慾なくして無理に我慢して食事するやうでは、如何に胃の腑に滋養分を送つても、胃は之を完全に消化して血となし肉となす事は出來ない。それと同じく、讀書も趣味が自然に內から湧き出でないでは何程書を讀んでも、役に立つものでない。美術の趣味を有する人は如何に貧乏でも又如何に多忙でも書畫骨董盆栽の爲めに注意し、又之に要する費金を作り出すものである。而して彼等は之が爲めに書を讀むことをも厭はない。一々規則を立て効力ある讀書の方法など問ふこともしないで、自然に有効なる方法を發見するのである。讀書は全く趣味である、而して人の趣味は錯々進ふから翻訳を作ることは無用の噺である。併し有効なる讀書の條件は二三述べることが出來ると思ふ。

壓屈的讀書は無用

第一、無職業で生活に窮しない樣な人は讀書の時間も讀書の方便も豫備はつて居るが。兎角彼等に書を讀む者が少ない。又た此の如き人の讀書は何の効果があらうか、一向分らぬのである。畢竟讀書をして最も有効ならしむる條件は讀書の趣味あり然かも多忙にして容易に其の時間を得ないといふ人に限るのである。彼等の時間は一刻千金の價がある。故に寸陰を惜むのである。而して其の多忙の中に時間を偷む樣にして讀書するのだから彼等が讀書に費す一分間は他の人が一時間乃至終日讀書したよりも有効である。壓居や閑人が如何に多くの讀書をしても何等見るべき効果を發揮しないのは是れが爲めである。彼等は恰も風景絕佳の地に永住して居る人のやうなものである。何時でも思ふ時に見、欲する時に行く事が出來るといふ腹があるので、彼等は却つて其風景を等閑にする。而して眞に其風景の美み味はふ者は見る事も、行く事も不便である遠方に住み、無い暇の中からやつと暇を拵へて見物に來た人々である。即ち見物しようといふ意志さへあれば、暇の有無に拘らず、便利不便利に拘らず、其人は却つて暇もあり便利もある土着の人よりも眞に其風景を賞する事が出來るのである。多忙な人は常に此見物人の如き態度み以て書に向ふので其の讀書が有効になる。されば暇がない程、不便な程、猶更眞に書物を味ひ有効に讀書する事が出來るのである。

借讀は最も効果ある讀書法

じ借りても讀む機會が幾らでも出て來る。借本は又一層興味あり又た有効なものである。短時間に讀了しなければならず。手元に書物を置く事が出來ないので、一層實を入れて讀むものである。借讀は最も効果ある讀書法也といふことが出來る。書齋に買ひ込んであると、何時でも讀めると思ひ遂其儘になり、一年も二年も其だしきは數十年間も大事な書を讀まないで置く事がある。讀まない書物は何百卷書齋にあつても無いのと同じである。寧ろ貧乏生が借りて讀んだ一冊の書物に劣るのである

道樂にならなければ駄目

故に讀書の効力は第一趣味の問題であるが第二は責任の問題である責任ある心を以て書を讀むのと、讀書しても何等責任に關係がないのとでは、讀書の効果に非常の差を生ずるものである。例へば讀んだ事を他日人に語る責任ある場合、若しくは讀んだ書をかみ碎いて書きあらはし報告をなす必要ある場合は、讀書の効果を十二分に發揮する場合である。前途閑散な位置に居る人は何程讀書しても之に伴ふ責任がないから、讀書の効果は決して驚るものでない。苟くも人に教ゆるとか、或は報告をなす爲めに敢闘を命ぜられるといふ必要のない人は讀書家として最も不幸な位置にあるのである。彼は眞に理解してもしないでも無支ほない、記憶してもしないでも

社會に損得はないから、彼等は假令高卷の書を讀破しても終生蒼魚の爲す所と爲すに止まるものである。

讀書の目的は初めに三大別をしたものゝ、早に實用の爲め修養の爲めに讀むだけでは迚も繼續しない。凡この讀書は娯樂と一致することにならなくては有効でない。恰も遊樂者が如何なる事があつても酒色を廢する事が出來ないやうに、讀書が娯樂になつて了ふやうにならなければならぬ。遊樂にならなければならぬ。讀んで興味の起らぬやうな書籍は、苦痛を忍んで讀むも何等の益は無いから、寧ろ初めより讀まぬがよいのである。これは讀書ばかりに限つたことではない。何んでも此の通りである。而して第二は責任の問題である。自己の胸中に讀書の趣味あり、それが自己の責任に影響あれば讀書の効力は自然に發揮せらるゝものである。凡て他の事は附帶條件若くは刺戟條件に外ならぬ。

見習ふべき有効讀書の實例

例へば英國のサー、エドウキン、アーノルドは日本にも來た詩人であつたが、メゴールの如き詩人とは違ひ、詩作もすれば新聞記者もする。從つてあらゆる方面に交際も廣く、却々落ち着いた讀書の暇あるやうな人ではなかつた。彼は實に博覽多識で何人も彼の讀書力の廣大に驚歎してゐたのであるが、此廣大なる彼の讀書は、決して彼の書齋からではなく汽車の中、電車の中の如き零碎なる時間から成されたのである。

彼の讀書法はどうであつたかといふと、彼は書物を求めれば惜し氣もなく表紙を破り取て了ひ、數頁位づゝ引き離して常に之を懷中に入れ、待合室であれ、公園のベンチであれ車上であれ處嫌はず暇さへあれば讀んだのである。讀む分量は少く、讀む時間は零碎であるが、倦まず撓まざる彼の讀書は、遂に非凡なる彼の內容を築きあげたのである。急がしい人は常に此詩人の讀法で讀書しなければならぬ。一時間も二時間も靜坐して讀む事を望んでゐると、とう〳〵一生讀書の時間は無くなつて了ふ

全部讀むべき書と部分讀むべき書

また書物には其書の値打次第で、全部讀まなければならぬものと、一部分讀めば事の足りるものとある。彼のベーコンは數百年前に於て既に『或書物は一部分しか讀む値打なし、全部讀む値打のある書物は少ない』と喝破して居る。尤も普通の書物でも小說は例外である。發端と結末さへ讀めば小說の妙味は無くなつて仕舞ふ。小說の妙味は其中間の波瀾に存するのであるから、全卷を通讀する必要がある。然し其他の書物に至つては部分的に讀んで大概用に足りるものである。即ち書物には何れも目次があるから、其目次を通讀して中心點を求むるか、或は自己の目的に應じて其目的に關係ある處を發見し、其部分だけを讀過すれば足るのである。一つの本には必ず何處かに腦があるものである。此腦を見出す事の巧妙なる人が最も有効に讀書する人である。此腦は少しく書物を讀みつけると大程誰にも發見の出來るものである。大概の書物は此腦だけ讀んで他は略して置くことが出來る。急がしい人には

全部讀むべき書物の實例

猶更ら此呼吸が要る。

而して全部讀了すべきものは第一流の著者の書いた古今の名作とせられてゐるものである、又其種のものは全部興味を以て讀めるものである。例へばダウキンの書いた『種類の起原』の如きは專門家でなくとも全部讀んで興味を感ずるものである。又ダウキンと同時に進化論の原則を發見したウオーレスの書いた『生物の世界』の如きも同樣面白く讀まれるものである。不思議にも第一流の人の書いたものは、一般人が讀んでも解り興味があるから全部讀めるものである。それで最も有効に讀書する條件の一は古今中外第一流の書を選む事である。

通讀してから精讀

社會に出て多くの仕事を爲して居る人は讀書力を養ふ爲の讀書よりも、其の關係して居る仕事を助ける活動力を得る爲の讀書が必要でなければならぬ。それは何うすればよいか。

予はこの向きの讀書法として、書中全体の梗概を早く呑み込む工夫を凝らすが最も宜いと信ずるのである。而して特に必要な個所を拔いて、更に精讀する。左樣すれば全体を知ると共に必要な部分は殊に、精通する事が出來て非常に都合がよいことになる。

活動家と然らざるものとの間に、自ら異つた讀書法のある事は洵に爭ひ難いところである。活動力を增すための讀書法は先づ斯くの如しとして、讀書法『早に讀む力を養ふと云ふ意味でない學問の爲の讀書法と解した方が適當である』は如何にといふに、予は必ず二回通讀の必要を說くものである。イクラ頭腦の可い人でも、一回丈けでは凡てを充分に了解する事は出來ぬ大抵の書籍ならば二回にして初めて眞く分るのである。獨り解るばかりでなく、二回も讀んで置けば、長く記憶に存する。二回讀むとなれば、其の代り二回共精讀は要らぬ。一回目は云はゞ素讀で宜しい。素讀の基礎があつて更に讀み返へせば。二回目も極精讀とまで行かずとも、非常に興味が加はつて解し易い事になる。これは一寸徒勞の樣に思ほるゝが、決して左樣ではない。これは予が經驗上知り得た事である。

書中の人となるな

夫れから讀むからには、全く自己を去つて書中の人となつて了ふ事、これは活動家の讀書法にも適用すべきであるが、修養的讀書法として一層の必要を認めるのである。讀んでる中に自己があつては、何うも時ぎ不快な感じ易

第四　島田三郎氏の實驗讀書法

いが、書中の人になつて了へば、決してそんな憂がない。書籍は感化力に富んでゐるから、著者の人格に注意しなければならぬと云ふのも、このことあるを氣んでの話である。尤も如何に書中の人となつても、彼の所謂『書を讀んで、書に讀まるゝ勿れ』との心掛だけは肝要である。

愛讀書の撰擇

精神修養の爲多少の常識、即ち愛讀の書を有して居る事は何んな人にでも必要の事である。而かもその愛讀の程度たるや、精神修養になるから、これを讀まうといふ位の事では駄目である。事實左樣であるにしても、ソンナ考へには毫も及ばぬといふのでなくてはならぬ。寄席に行くのも芝居に行くのも、これあるが爲めになるといふ程度に至つて、初めて其の書が愛讀せらるゝの資格を有つ事になるのである。近來世間では大層論語が流行るやうになつたが、喜ばしい次第である。何といつても論語は必ず讀まなくてはならぬ。併しその割に孟子を讀む事を怠慢する人が尠いやうである。論語もさる事乍ら、予は孟子の一層文章が整つて、事理を說くに巧みなるを感じてゐる。世に處し、事をなさうといふ希望のある青年は必ず孟子を讀まなくてはならぬ。敢て怠慢する譯である。唯だ漢文はこれからの人に大に讀み難くなる恐れがあるから。論語だとか、孟子だとか、又は史記だとか、其他兎に角著名の漢籍は我が國の文章に飜譯したいものである。

予は近來穩々の書籍を手にしてゐるが、白隱禪師のものなどは

予の愛讀書

却々面白い。面白いといふよりも實に益するところが大いやうに思はれるその他和書で精神修養上利益の多いと思はれるものを擧げて見ると。宮崎集の『駿台雜話』の如き、『益軒十訓』の如き、又は中井兆民の『翁草』の如き、何れも純粹の和文で書いたものと違つて、非常に讀みよく書いてある事は、或る一方に偏する等の缺點なく、千古に通じて金玉の文字であるから、誰が讀んでも有益である。

又洋書では、エマーソンや、マカレーのものを愛讀して居るカーライルのは却々奇拔な所があつて面白いけれども、何うも偏窟である。それに一つは力の足りない爲めであらうが何うも讀み難い。バイブル等また讀むべき一つに加へて宜しい。變つた方で、西鶴と馬琴は何うも馬琴のがよいやうに思はれる西鶴のは矢張り讀み難い。

偉人傳と辭書

偉人の傳記などに就ては、兎や角云ふ人もあるけれども、同じ書籍の中で、傳記ほど人に感化を與へ易いものはない。蓋し事實を土臺とした實踐窮行の跡を物した關係からであらう。中江兆民の『翁草』貝原益軒の『益軒十訓』のごとき、その價値の大半は此の實踐窮行の點にあると云つても宜しいのである。兎に角實踐窮行を基礎とせる著書には、非常に感力がある、而して熱力があるから、他の空想なうつしたものとは大いに其趣きが違ふのである。彼の熊澤蕃山の傳の如

き著者にその人を得て書いたならば非常に面白いものである。

最後に辭書に就いて述べんに、予は內外あらゆる辭書を揃へてゐるが、辭書は仕事をするものには是非備へて置かなければならぬ必要の物である。新聞をよんでも、何を讀んでも、一寸專門に亘つて解り難い事柄に出遭ふその際辭書を繙れば直ちに了解が出來る。解らぬながら讀み通して行くのと、細いことでも必ず解決をつけて讀むのとは、結果に於て何れ丈の相違があるか知れぬ。要するに辭書は予等の仕事を助くるに偉大の力があるのである。

第二章　現代勉學法

第一　穗積陳重博士の勉學法

學問するに當りて、先づ第一に目的を確立すること、志の堅固なること、而して克己奮勵倦まず撓まず、着々として進むべきことは改めて茲に云ふまでもないが、右の外に尙忘るべからざるは、學問の方法勉强の仕方である。之を誤ると折角の勞苦も、却つて水泡に歸すると云ふ事がある、是れ學問せんとする者に對して、決して忽せにすべからざる問題である、縱令ば其目的地は同じにしても捷路を取るもの、或は寄り路をする者とのある如く、學問も其方法の巧拙に依つて、遂に非常の徑庭を生ずるものである、此に於て余は專門學に入る前に、少しく準備の學問から一二注意したい

先づ準備の學問

準備の學問と云つても色々あるので全然其方法にも多少の差はあるが、今其の一例として外國語に就て言ふなら、今日の外國語の研究は。教育者も被教育者も共に一つの過ちに陷つて居る、と云ふのは何れの學校も學生も、典に儘きより高きに昇ると云ふ方法を取らず、少し外國語をやる

と直ぐに高尚な本ばかり讀む、中學校か、高等學校位の程度の者が、最う文學士の古典たる、シエーキスピーヤとかゲーテとか云ふものを見るが、何れの學校も皆此の弊に陷つて居るやうだからして大學に來ても專門書を讀むことの出來ないのみか、極く普通の文法さへ分らないで困つて居る始末だ、之が讀ませには、我高等文官試驗をやつて見るのに、學校に居つては非常に高尚なことをやつて居るものが、試驗では極く平易しい問題に苦しんで、少しも出來ないものさへある。誠に本來を誤つて居ると言はんければならない。されば準備時代に在つては六ケしい本を一冊讀むよりは、平易なものを十冊讀む方針を採るのが好いと思ふ。

昔の日本では未だ何等の智識なき少年に、矢鱈に四書や五經や文選などの素讀などを教へたもので、今日の初等、中等教育等に比較して見ると非常な差である、而して實は實際の智識如何といふに、恐らく今日の少年には及ばないと思ふ。否な昔でも四書や五經の素讀をやつたものよりも、繪本三國史だとか繪本太閤記だとか云ふやうなものを讀んだものゝ方が、却つて實用に適して居つた。元來教師は己自ら六ケしいものに興味を有つて居るものだから。稍もすると其れを直ぐ學生に教へたいと思ふのに、又學生の方も平易しいよりは、六ケしいものを見たい好奇心から其を歡迎する、其が抑も誤つて居る、西洋の諺に『木の眞から登らうとしても其れは不可能である』準備時代の學生に在つては、能く茲に注意して、何でも讀んだものは必ず

咀嚼して、成分の智識の體となるやうにしなければならない。要するに易より難に入り、簡より繁に入るの心懸が必要である

專門學研究方法

次ぎには專門學研究法だが、之を述ぶる前に一二の注意がある、茲にも亦前項に云つた目的の確立、意志の堅固、克己奮勵の必要なことは言ふまでもない。否な專門的學術に入つてこそ、更に一層適切に其の必要を察するのである。凡そ學理の蘊奥を極めんとする者は、其學問に忠實なるのみならず、面白いと思ふ事、即ち興味を以てすることが最も大切な事である。孔子の言に『之を知る者は之を好むものに若かず、之を好む者は之を樂むものに若かず』とある如く、凡そ學問をやるものを大別して見ると左の三種類の者さなる。

第一には嫌いながら學問するもので、此は一番下なる者だ、蓋の如き人は先づ以て進歩の見込がない、次が勉めてやる者、此は言はゞ中にして進歩しない事はないが、未だ上乘なものと言はれない、而して第三者即ち學問が面白くて、止めやうと思ふても止めることの出來ないもの、此は蓋し其の上乘なものである。斯かる人は進歩するのみならず、自分では一向に苦勞に感せず、隨つて休にも障らない、斯う云うと、元と面白いとか嫌だとかいふことは、理窟でなく、感情だから人爲的に奈うとも如何やうがないと思ふ者があるかも知れんが、如何なる事でも自分が之は宜しいと思つて志を立てた以上、或程度まで進歩すれば必ず趣味を解して來る。他人が見て以て如何にも無趣味なやうな事でも、自分が其を專門としてやつて居ると必ず趣味を解する域に達する者である。若し之を解せないとすれば其人は未だ其域に達せないものと言はねばならん。さて然らば研究の方法は如何、之より本問題に參らう。先づ之を大別して

觀察と思考

この二つである。然らば此の觀察とは如何、此は即ち客觀的方法とも云ふべく、自己と外界との關係國家社會の上に生ずる種々の出來事を、或は比較し解剖し、綜合して研究するものにして、思考の方は主觀的に、自分に之を思辨思索するの方法である、と言ふと茲に知識の起源問題が起るが、此等は哲學上二種の宿題となつて、或人は之は先天的に靈妙不可思議なる一のフオームが人間の精神に存在するとし、又他の一方では彼のロツクの唱へた樣に外物が自己に映じて智識を生ずるものであると、二樣の學說があるが、要するに之は哲學上の問題にして、茲に言ふべき必要はあるまいから、暫らく別問題として、兎に角學問をするに當つてこの觀察と思考との二方法あるは否む事が出來まいと思ふ、然らば

如何に觀察すべきか

智識の根原は兎も角として、吾人の智識の進歩發達するは官能が外界の刺戟を受け、之を神經中樞に傳達して茲に初めて一の智識となるのであるから、何時でも眼明に耳聰くなければならぬ。余は法律を專門とする者だから、この見地よりすれば、常に國家や社會の出來事を法の目、法の耳、法の頭を以て觀察するので。新聞を讀んでも法律に關した問題に逢着すれば直ちに其れを取つて研究して見る。例へば長丸抑留事件が起つた、法律專門の者は如何なる理由の下に抑留されたか、而して其論點は何處にあるかと云ふ如く、如何なる事件を問はず、自ら觀察攻究せねばならん、法律學は何時も書物にのみあると思ふと間違ふ。國家の出來事、社會の現象は皆是れ活ける法律書である。社會は一日々々と法律の頁を繰返しつゝあるのだ、然しながら又書物は法律のエツキスにして即ちコンデンスされたものであるから、此を決して忽諸に附し去つてはいけないが、一に唯だ書物にのみ賴ると、頭腦は死んで了ふのである、が此の觀察といふ事に就ても、色眼鏡をかけて物を見る如く、稍もすると觀察を誤るの憂れがある。彼の婆跡が飴を見て、此は實に好いものだ、これは屹度人の家に忍み込む時に音のせぬ爲め戸の下に流し込むのだろうと言つた。然し孔子は又アー、此は老を養ふに好いものだと云ふたといふ話があるが、同じ飴であるのに、見る人に依つて斯の如く零壤の差を生ずるものである、故にこの婆路流の觀察は大に避けんければならぬ。餘りに固執しては物の公平を失ふものである、次ぎは

如何に思考すべきか

讀む、聞く、見る、此は學問するに大切な要件であるが、只之を丸呑み込みにしても何にもならぬ。宜しく消化をさせて自分のものとせねばならん、然かするには思考せねばならん、若し無意味に暗記して居るのみならば、黑板

か蓄音器と異ぶ所はない、彼のニュートンが林檎の落つるを見て、萬古不易なる重力の原理を發見したのも、此は思考の賜である、或る人がニュートンに向つて、貴下はどうして彼の重力の原理を發見せられかと問ふと、氏は只だ余は平生思考しつゝあるのみと答へたといふ事である。又彼の孔子も『學んで思はざれば罔し、思ふて學ばざれば殆し』と云はれた。朱子は之に註釋して『之を心に求めず故に昏うして得ることなし、其事を習はず故に危うして安からず、博學、審問、愼思、明辯、篤行この五つのもの其一つを廢すれば學に非ざる也』と言つて居る。又彼の英國の實理主義哲學中興の祖にして、且つ法律界の泰斗たるベンザムの逸話に彼れが猶學生の頃、當時一世を風靡したるプラツキストンがオツクスフオード大學にて講演した事がある。法學生は雲の如く集り、彼れの講演をば一字一句も殘さざらんと筆記して居つたが、ベンザムは只其を聞いて居るばかりで少しも書かなかつた、其處で友人は彼れに向つて、君は何故に此の大講演を筆記しないのかと、尋ねるとベンザムは徐ろに『余は先生のは若し間違つて居やしないかと考へて居るのだ』と答へたといふ事だ、龍は生れながらにして昇天の氣を有して居る如く、若きベンザムは蓋し此時既に群を拔いて居つたのである。處が間もなく無名の評論が出版せられた、其樣大なる筆力と卓越なる見識とは忽ちにして、當代の思潮を驚絶せしめた。或はエトモントブルクの書いたものだらうと云ひ、何れも當代一流の法律家を以て之 擬したが、爲んぞ知らん是は實にオツクスフオード大學の講演に只默然として聞いて居つた。若きベンザムの著書であつた。

又荀子の勸學の篇に『君子の學は耳より入つて心に著き、四体に布き、動靜に現はる、然るに小人の學は耳より入つて口に出づ、口耳の間四寸、焉んぞ以て体軀を美しうするに足らんや』とあるが、實に大なる著述や學識は決して漫然たる讀書や、只博覽强記では出來ない、總べて思考の賜である。故に法律ならば先づ法律的現象や、社會の法律問題に逢着した場合に、自己の得た經驗と、學識とに照らして種々反覆丁寧に考へ、而して其判決と比較して見るので。斯くして思考の辭を奏成するのである。

研究の態度

『觀察には熱心ならんことを要し
思考には冷靜ならんことを要す』

此が研究的精神唯一の態度である。ベンザムの言つた辭に『學問の工夫は情熱を用ゐざるにあり』と、實に學問研究者は初めから情熱的に、是れ天地の公道なりとか、人道の正理であるとか、彼れは曲學阿世の徒であるとか云ふやうな、感情的な偏斷的な態度は斷じて不可ない。彼のスペンサーが社會學の原理を著す前に『吾人は初めから政治的、社會的又は宗教的偏見を全く拔去つた後ならではいかん』と云つたが、凡ての學問は此の冷靜な、公平な態度が大切である。又『膽は大ならんを要し心は小ならんを要す』と云ふが、又是れ研究的態度の須要なる一條件である。

大言壯語は研學の道具とならず、情熱は屢々學問に障害を與へるものである、故に學者は或一理に就て論ずるにも其の爭ひや君子也で徒らに反對者を罵詈するが如きは斷じて不可、必ずや理の存する處に就かればならぬ。彼の劍客が試合を初むる前に互に禮儀を以て上座を讓り合ひ、愈々劍と劍とを交るや、電光石火最早一分の隙もなでのあるが、而も勝負あるや又互に禮をなして勝敗を明にするが、學問研究も亦斯くならればならぬ理に於ては何處までも相戰ふと雖も、既に理のある處明かになれば、最早其處に感情を交へてはならぬ。熱情は屢々判斷を誤るものである。

學說の研究

先聖の學說を研究するに當つて、注意すべきは大家崇拜の弊である之を敬するは好いが、崇拜するは機れ正當なる攻究を遂ぐる事が出來ない。西洋人の學說だから一も二もなく好いものと考へたり、此は誰某が說いたから間違ひないものとして固執するは宜しくない、又敎ふるものも徒らに鬼面を冠つて兒女を威すが如き事も宜くない、然し實際は之は又有勝ちの事で、學界の爲めには嘆ずべき事である。彼の支那の學問の進歩せざる所以は聖人崇拜が餘かに一の煩をなして居るぢやないかと思ふ、聖人を崇拜するは決して惡るくないのである、けれども學問の研究に向つては、暫らく之を離れて、全く冷靜なる態度になり、批評的に研究せんければならない。

圓智の言に『プラトーは是れ吾が友なり、されど眞理は猶ほ之より大なる友なり』と、此は實に吾人學問するものに取つては常に服膺すべき名言であらう、斯く言ふと心なき青年は、先聖碩學に對して漫然反對するかも知れんが、其は思はざる甚しいものである。苟も數百年數千年を經て、歷史的偉人碩學として後世に喧傳せらるゝに就ては、何等か其處に優れたる處がある に相違ない、故に之には充分の敬意を以て研究的の態度を執れと云ふのである、猶ほ茲に附言 たいのは

古人の學說

に對する注意である。凡そ學說なるものは時代思潮の產物である故に古人の學說を研究するには、是非其の時代を知らんければならぬ、而して周圍の有樣と其人格をも究めなければならない。人は時代と社會と境遇とを離れて決して全人格を見ることは出來ないものである。カント、ヘーゲルを知らんと欲せば其時代と共に獨逸をも知らんければならず、ロツク、ヒユームを知らんと欲せば又其時代と英國とを知らんければならない。同時代の人にして其國を異にするが爲めに學說に非常の差あるは確かな事實である。彼のグロシヤスが萬國公法を考へ出したのも、當時和蘭が、各國に戰爭の中心點となつて、其が爲めに國民は非常なる苦痛を嘗めた結果にして、畢竟時勢の賜である。されば又古人の學說を評するに當つても今日を以て直に古を律してはならぬ。此は明かの理である。

誤解されては困る。余は決して所謂試驗過法を奬勵するの

ではない、然し今日の如く競爭試驗の激しい時に在つては、勿論學問は試驗の爲めにするのではないが、又試驗は學生の爲めには決して忽にすべからざる問題である、されば學生は平常から全く無關係では居られない、故に各方面から研究を重ねて、一寸の隙なき事を期せんければならない、就ては前述のやうな單獨の勉強は充分に固よりやらんければならないが、試驗殊に判檢事や辯護士文官試驗などの學校以外の試驗を受けやうとするものに取つては、特に合同研究が必要である、自分獨りでは最早充分だと思ふ事も、一寸人から質問されると存外分らん事が多いものである、故に同一志望者が四人なり五人なり、一週に一度とか十日に一度とか、寄り合ふて互に問題を出し合ひ、若しくは課題を出して討究して見ると云ふ方法を取るのである。之に就ては自分の家に居る、書生をして數年來實驗させて居るが、何れも成績が好い、尙ほ之は自分一個の經驗のみでなく、他にも屢々此方法を採つて首尾能く級第した實例を聞いた事がある、之は前にも言ふやうに試驗通過の爲めでなく、實力を得る上に於ても又大に實効のあることである。故に法律學生に對しては是非此方法を實行するやうに勸告する。

試驗に對する勉學法

第二　二木謙三博士の學生勉強法

邪念擊攘法と精力の集中法

勉學中氣が散て困るとは、常に聞くところの嘆聲である。精力が勉強の一點に集中しないから理解も記憶も充分でない。どうしたら勉強中注意力を一點に集める事が出來やうかとは余の屢々接する所の質問である。

氣が散ると云ふのにも二種ある。一は神經衰弱症の如き病的作用から來るもの、是れは根本の病を治療しない限り、注意を一點に集中する活力が缺けて居るのであるから、唯だ方法のみによりて之を矯正する事は無理である。第二は習慣によりて、机に向ふと種々な邪念妄想が起る、勉強以外の事彼れこれと頭腦に入つて來て、いつしか腦中の六七分は邪念妄想に支配せられて仕舞ふ、從つて肝腎の勉強の方には頭腦が專らになる事が出來ない。自分でも之に氣が附いて之れでは不可ぬと思ひながら、矢張り一向專念になる事の出來ないのが一般の通弊である。

勉強しやうと思つて机に向つた時は、其目的たる學課以外の事は、どんな事でも一切『邪念』として敵視すべきものである。勉強を妨げるものはこの邪念であるから、邪念を打ちはらふといふ事が即ち注意を勉強の一方に集中する第一要件である。然らば如何にして一切の邪念を打ち拂ふか、余の見る所によれば、邪念の擊攘は精神の働きに關する事ではあるが、併し精神の働きは矢張り肉體の形より之を正して行かねばならぬ。形が頽れると精神もまた頽れる。教師が生徒に訓誨を加へんとする時には先づ嚴然として容を改める、生徒が謹んで教をきく時には先づ肅然として襟を正す胡座をかいたり、足をにぢつたり、臥顚んだりして居ては精力は集中するものでない。

仁王の姿勢を見習へ

そこで勉強中邪念を打ち攘ふ姿勢

かいふと全身の筋肉を張るに在る

坐つて勉強するものはチヤンと端坐して兩の拳に力を入れ、齒を咬ひしばり、眼を活と開き腹にも腰にも力を入れ、足の拇指にも力を入れ、喧嘩腰に立ち上らんとする樣な姿勢をとり、五体は寂ながら火の塊であるかの如き态勢にて机に向ふのである。椅子に腰かけて勉強する場合でも矢張り同じ事である。椅子では何んだか力の入らぬ樣に思ふかも知れぬが、腹に力を入れると總身に力が滿ちて來る。若し從來の習慣上右の如き姿勢をとつても尙力が入らぬ時は、靜かに腹式呼吸を試みて氣をおちつけ、腹に力を入れる樣にして見ると漸次力が入る樣になつて來るものである。

筋肉が張つてないと到底内外の邪念を驅逐する事は出來ない。外邪とは、寒いとか、暑いとか、腰がいたいとか。背中が痒いとかいふ事である。内邪には二種類ある、その一種類は心の散亂である。心が散亂して居ると妄想が後から〳〵と湧いて

來て奬くろと云ふを知らない。モ一つは心の沈晉である。氣が沈みて睡くなるのである。學生はこの二つの內孰れかに覺があるであらう。之れを打ち擴ふのは右に陳べたる姿勢を取るのが最も有効である。諸君は山門の兩側に立つて居る仁王といふ木像を知らぬものはあるまい。世間はあの姿勢を呼んで仁王立ちといふが、あれは何の爲に彼が如き姿勢をとつて居るかといふに即ち邪を降伏せしむる形である。見られよ仁王の姿勢を、眼を活と開き拳に力を籠め足を踏みしばり、下腹にぐつと力を入れ、滿身すべて是れ力の瘤である。あの姿勢でなければ邪は擴へぬのである。不動明王も亦邪念降伏の姿勢を現はしたものである。是れも眼をむき齒を咬ひしばり。右の手に劍を持ち左の手に綱を持ち、滿身に力を籠めて居る。あの姿勢でなければ惡魔を降伏する事はできないのである。彼の姿勢であるから。上から、濕が落ちても背後で火が燃えてもびくともしないのである。鎧櫃を見てもさうである。彼は鬼を降伏せしむる姿勢である。いづれも邪を擴ふ爲に精力を集中した形である。凡そ一心不亂の時は体は固くなるものである。勉強の時も矢張りさうでなくてはならぬ。

尋に是等の偶像皆下腹に力の入つて居る處に眞く注目しなければならぬ。是等は實に巧妙に彫刻せられて居る。古人は精神修養に就いて極めて苦しい經驗を嘗め、而してその經驗の道理から割り出して斯くの如きものを作り出したのである。誠に意味深遠で其の彫刻の跡に微少な精神が現はれて居る。其用意の親切丁寧なる味へば味ふ程妙味があるのであるが、今はそれを偶像として冷笑し其中より何等の教訓を發見する事をせずに頑りに眞い方法はないかと、尋ねまはつて居る。今人の爲に寧ろ氣の毒である。

試驗前後の飲食法

次に學生の試驗前後の勉強法に就いて注意して置きたい事がある。それは學生等が試驗前になると頑りに滋養物を食はぬと勉強が續かぬとか、身心が衰弱するとかいつて、卵子を日に七つも八つも食つたり、又牛肉を盛に食つたりして精を附けると云つて居るが、之れは大變な間違ひである。

余が學生に勸めんと欲する所は全くこの反對である。試驗には滋養物を澤山食つては却つて眞劍の勉強が出來ないのである。試驗前には成るべく胃の負擔を輕くする事が必要なので、場合によつては白粥に梅干でもよいのである。その代り試驗が終了したらうんと食ひ、うんと遊ぶ事がまた必要である。腹の皮張れば目の皮たるむといふ事がある。食ふのと勉強するのとは生理上同時に行ふ事は出來ないのである。食ふのは收入で貯蓄である。勉強は支出で消費である。此二つは別々に行はればならぬ。

動物でも植物でも皆其成長の樣樣を考へて見ると此理がよく分る。大根の根は秋になると大に肥え太くなつて來る、其れは蓄はへる時である。秋にうんと蓄へて置いて、それでもを餘

すのである。春になると芽が出來る。花が咲く大根の爲には忙はしい勉強時間である。此時に至つて根にぢつとやせては仕舞ふ。動物でも同じ事である。動物は春より夏にかけて縱に長く伸び秋より冬にかけて横に肥る。蓄へる時と使ふ時とは異う故なのである。

此理屈によりて人体も貯蓄する時と使ふ時とを眞く考へて食物も加減しなければならぬ。前にもいへる如く試驗前の勉強期は學生に取りては使用の最大時期である。所謂一心不亂專心一意の狀態に身を引き締めなければならぬ時期である。此時に於ては專心一意使用の法に精力を集中するがよい。即ち食物の控目にし、且つ經く質素な食物のみを食して成るべく胃の負擔を輕くする。斯くすれば頭腦は明快となり精神は專念に集中する事が出來る。普時は齋戒沐浴といふ事が行はれた、いざ仕事といふ時には三日間とか十日間とか齋戒沐浴して、其間は肉食もせず、精進潔才として仕事に取り懸る。即ち專心一意精力を集中する事の出來るやうにとの趣意である。是れは前に陳べた貯蓄と使用との理窟にかなつて居る。今日は齋戒沐浴といふ事も唯口にするばかりで之を實行するものは極めて少ないやうであるが學生が試驗前に本氣に勉強しやうと思ふなら所謂精進潔齋の覺悟を以て之に當る事が必要である。併かし之れは試驗前に於ける。飲食法を示したものである。使つた儘で、補充しなければ營養は缺乏して活力は消耗する。此に於てか一方にはまた營養物を取るべき必要が起つてくる。それはどういふときにもれればいゝかといふに試驗の終つた時に違るのである。

試驗前試驗中に於ては右の如き質素の食物で凌ぐを利とするに反し、試驗が終れば出來得るだけ多く食するがよい、且つ此の時は既に貯蓄の方へ移つたのであるから、使用の方は控える頭を使ふ事は少くし、出來得る丈け多く睡るがよい、前には食を控へて心を引き締めたから、今度は心身をゆるめて食を進める。是れで前に使用した精力の補充が出來、更に貯蓄ができるのである。

此の飲食法はすべての生活に應用する事が出來る。例へば遠足等の場合にもさうである。遠足をして居る時は使用の時である故に。その間は美味を食したり大食したりする必要はない、又しない方がよい。握飯で澤庵で充分である。食物の方は少しも心配せずに思ふ存分使用して、歸つてがらうんと食ひ、うんと睡る。之で補充と貯蓄が出來るのである。此の方法を誤らなければ勉強する時にも充分勉強が出來、又身体をも害せずして充分健康を維持する事が出來る。

頭腦の働く時と亂れる時

先づ大体から御話すると今の學生は頭腦の使方に於て根本的の間違ひがある、頭腦の働きは、恰かも電話交換局の仕事と同一である。右から懸けられた話は左に繋ぎ、左から懸けられた話は右に繋げば何の事も無いのである。然るに頭が冷靜でなく、餘計な心配をしたり、話中に他の事を考へたりして居ると、頭は亂れて來る、仕事は間違つて來るの

である。頭腦も亦然り、冷靜で、無邪氣で、自然に任せて置くと必ず正當に働く、學ぶべきを學び、暗記すべきを暗記し、決して之が爲に苦痛を見るべき筈ではないのであるが。恐怖心があつたり、心配があつたり、種々なる妄想に襲はれて居ると、同じく頭の働きが亂れ、根は鈍り、理窟に苦み。記憶力が惡くなつて、追々頭を害するに至るのである。然るに當今學生の勉強方には一の恐怖、心配、煩悶が囑つて居る。故に學生の頭は冷靜なるを得ず、又自然にまかせて正當に働く事はできないのである。吾人の頭腦は同時に二つの主に事ふる事を生理的に嫌なのである。然るに今の學生は勉強の方針に於て二人の主に事ひればならぬ樣な境遇に置かれて居る。

一方に於て智識慾に事へて之を滿足せしめなければならぬ。即ち學問を學問として、暫ひ覺え智識の增進をはかればならぬ同時にまた一方に於ては點數慾に事へて之を滿足せしめなければならぬ。即ち智識の增進は兎も角として、試驗に成るべくよい點數を取りて成るべく上席に就かればならぬ。多數學生は常に此の二つの慾に事へて、其頭の使ひ方を二つに分たればならぬ。

若し智識慾を滿足せしむる事と、點數慾を滿足せしむる事が一致するならば頭の使ひ方を二つに分ける必要もないのであるが不幸にして之が必ずしも一致せぬのである。

學生の考へに依ると試驗には自ら試驗の術がある。試驗に出さうなところをのみよく暗記して置く、先生の氣に入るような呼吸を研究する。口頭試驗、口振り筆記試驗の書き振り、皆それ〴〵秘訣があると思つて居る。又實際さういふ場合がある。眞面目な勉強は點取りから見ると。隨分馬鹿らしく思はれる樣な事もある。學生と雖も試驗學問の研學なる事は知つて居る此んな勉強法に依りて得、學問が世に出でゝ何の役にも立たぬ事を知つて居る。眞面目に勉強をしたいと思ふが點數慾の事を考へるとまた點取り學の研究もしなければならぬ。この兩者が一致せざる爲に煩悶が起る。當今學生の腦の六七分は此煩悶で苦めらして居る。

學生神經衰弱の主因

生理的に云ふと煩悶程頭腦を害する者はない、愉快に勉強して居れば少々度に過ぎても腦を害する事はない、丁度愉快に食事をすれば少々不消化物を過しても胃を害せぬのと同じ理窟である。然るに一方に於て試驗の爲に煩悶しなければならぬ。此の煩悶が甚だしく頭腦を傷める。當今學生間に神經衰弱者の多いのは學課の負擔が多いためだと云ふ人があるが必ずしもさうではない。以前に於ても矢張り今日程の學課はあつたのであるが、試驗に對する煩悶が今日程ではなかつた。神經衰弱の原因は過度、勉強にあらずして、勉強しながらも一種の痛心煩悶が之に伴つて居るからである。

既に胸中一種の心痛あり、頭腦に冷靜なるを得ざるが故に愈々熱中していよ〴〵頭が亂れる。譬へば波驚ぐ水の上には月の影が宿らぬ如く、讀んで理解する事能はず、讀んで記憶する事能はず、相當な刺苦勉強をしながら、其割合に智識の增進を見ないのである。是れは教育制度の關係もあらう。併し制度如何は今茲に述ぶべき場合でないとしても、目下の勉強法としては智識慾と點數慾とを成るだけ一致せしむる外はない。然らば如何にして之を一致せしむべきか余の見る所によれば、下の觀の如き勉強法にて勉強するならば智識增進の目的を達もする事を得、又同時に試驗の成績に於ても決して心配するやうな結果にならぬ。此の理を確信して試驗の事復た憂ふるに足らずといふ樂天的自身を以て冷靜に勉強する事が必要である。

數學に苦しむ學生

さて何の學課を勉強するにも、初めが大事である。余に數學に苦しんで居る幾多の學生を見た。彼等は代數や、幾何を難解と云ひ、面倒といつて、苦悶して居るが試に彼等に就いて、最初の定理公式が眞くのみこめて居るや否やを質問して見ると、斯ういふ學生に限つて初めの部分がよく分つて居ない。第一定理が眞く理解されて居ないから第二定理がよく分らぬ。第一、第二が呑み込めて居ないから第三が分らぬ。斯ういふ次第では其場所だけで幾ら苦悶しても到底分る筈がない。彼等が常に苦んで頭を痛め而かも常に分らぬは之が爲である。

故に天才ならぬ余の如き凡才の勉學法としては此の方法に若しくものはない。即ち第一定理がよく呑み込める迄は第二定理に移らぬ。第一第二が了解された上で初めて第三に移る、さういふ風にして、一皮づゝ剝いて進んで行けば、數學でも少しも難しい事はなく、進めば進む程樂になり、そして又興味が出て來る。然るに多くの學生は一皮剝かぬうちに他の皮へ移るから剝くのに非常に困難を感ずるのである。是れは獨り數學に限らず理論に關する學課でも矢張り同じ事である。一頁をよく了解して然る後次頁に移る。第二、第三、第四、第五と同じ方に依つて進んで行くと。ちやんと頭に秩序が立つて、頭腦が少しも亂れず且充分了解するから興味も出て來るやうになる。

余が神經衰弱中の勉強法

余は曾て第二高等學校にある時激烈な神經衰弱に罹り理解力も記憶力も殆んど全部消失して、事物に接しても頭の中で觀念を作る事が出來なくなつた。そこで暫らく學問廢止の必要が起つた。余は以爲らく、どうせ壞れたる頭ならば人より後れても構はぬ。人が一年懸つてやる所か余は三年も四年も懸つて遣らう。それで尙ほ出來なければ百姓にならうと決心しそれから全く勉強の方針を一變し、一切『いろは』より始める覺悟で案出したのが右に陳べた方法である。

最初は一頁だけを一心不亂に讀んだ。次の日は一頁の復習から始めて、二頁へ進んだ次の日は又一頁二頁の復習より進んで三頁へ進んだ、其の次の日も一頁、二頁、三頁の復習より第四頁に進むといふ風に、遣つて見た一日の分量が少いから頭が痛まず、併し毎日繼續するから思ふたよりは後れず、そして結局以前よりは明確に了解する事が出來て、又よく分る爲に數學の如

きものでも興味津々たるを覺ゆるに至つたのである。
それで人の頭の惡いといふよりは一層惡かつた頭の余も、其後一日も學校を休まず、一年も損をしないで他と同行する事が出來た。腹式呼吸のお陰であるが、又此方法が余に適した爲である。

余は青年の頃甞て平生深く尊信する某先生に頼んで其家に置いて貰つた。運動に就ては何か自分の運動にもなり、掃除の手傳ひになる事もがなと思つて、庭の草取りを初めた事がある。唯だ手當り次第ぞんざいに拔いて居る樣ではいつまで立つても拔きつくす事が出來ない。そこで余は右の勉强法を草取りに應用して、先づ一隅の一尺四方位の所を第一頁と定め初日にはそこの草を一本も剩す處なきまでに綺麗に拔き去る。二日目には其次の一尺四方位の處を同樣に掃除する。そして前日草取した處をも一度檢べて見て一本でも殘つて居れば直ちに之を拔き取り、次の日もまたこの方法でやつて行くと間もなく綺麗に殺り取る事が出來て廣い庭に一本も殘らなくなつた。勉學上にもこの方法を應用したい。

暗記に必要なる四個の要件

學問は咀嚼し、消化し、心會すべきものであつて、暗記すべきものでないとは根本の問題であつて、今日學生の勉强すべき學課のうちには、暗記の必要のあるものも隨分少くはないのである。歴史でも地理でも物學化學の公式でもさてはまた法律の條項でも其他これに類似する事柄皆暗記しなければならぬ。然るに頭腦の明快ならざるときは二度も三度も尙ほ暗記する事が出來ない。是れまた學生の一つの苦しみの種子になる。

暗記に必要なる條件が四つある。第一は頭腦の明快なる時を選ぶ事。第二は精神の愉快なるときを選ぶ事、第三に妄想邪念の侵入せざる時即ち精力集中に便なる時又は場所を選ぶ事、第四には家人または友人等の出入によりて、防害されぬ時又場所を選ぶ事が必要である。

右の四條件が必要であるといふ事だけは學生諸君も、直に首肯するであらう。困難なるは其方法である。殊にこの四つの條件が悉く揃つた時と場所で暗記すると云ふ事は非常にむづかしい。

暗記に必要なる時と場所

例へば今日は頭腦が明快で、精神が愉快であるか、暗記物に取り懸らうと思つても机に向へば兎角妄想邪念が起つて來て、精力を集中する事が出來ない事がある。又精力も幸にして集中して來たと思ふと家人に妨げられたり友人が遊びに來り、手紙が飛び込んで來たり、それ相當の妨害がわいて來て、どうも充分に目的を達する能はざる事がある。其結果つひに追はれ勝ちになつて、後廻しとなつて仕舞ふ。それが次の課業にすぐ必要な事でよもあると、それだけの暗記が出來て居ない爲に、先きの方が能く了解する事が出來ず又先きのものと別に關係連絡なき暗記物であると、試驗場

めてせつぱ詰ると、無理な事をして詰め込まうとする、そういふ事になるのも畢竟暗記の方法宜しきを得ず、即ち右に陳べた四個條の要件たる暗記に必要な時と場所とが見出し得られない爲である。

散歩中暗記する第一効用

余の見る所によれば此四ケ條を添く滿足せしむる暗記方法は散歩しながら暗記するのは最も完全に近いと思ふ。散歩すれば少々頭の惡い時でも頭腦は漸次爽快になるものである。氣がくさ〳〵するから散歩でもして來やうとは眞く人の言ふ所で、實際氣がくさ〳〵する時でも散歩すれば氣が爽やかになるのである。殊に草莊琴にて郊外に出で新鮮なる空氣を呼吸し純清なる田野の景色でも見た時は、頭が洗つたように心地よくなる卽暗記物の第一要件によく適つて居る。室内に重き頭を抱へて苦い顔をして居るのとは雲泥の差違がある。

散歩中暗記する第二効用

次に散歩は妄想邪念を掃して頭腦を空虛にし、注意力を集中する事が出來る古人の詩に物を考へるのは馬上、厠上、枕上の三上に限ると云ふ事がある、馬上と散歩とは先づ同じ狀態と見てよろしい、なぜ此の三つが考へるによいかといふと此の三つの場合に最も眞く精力が集中するからである。といつて今の學生はまさか便所を勉强室にする譯にも行くまい。枕上ならば最も好むところに相違なからうが、之れを今の學生に進めたならば、夜は早寢、朝は朝寢、とても埒は明かぬ。さりとて暗記する爲に學生が馬を喜ぶといふ事もなもす、散歩が最もよいのである。

散歩は一つの心氣轉換法である。室内で机に向ふ時には邪念妄想が入り代り立ち代り心頭に現はれて來る時でも、一度び身を起して散歩に出ると、邪念妄想は忽ち消滅して頭が空虛になる其時何か一つの題目に就て、それを考へ、又暗記せんとする時は考へが其れにのみ集つて來る。尤も新らしい景色が眼前にも來れるけれども、是等は妨害物とはならず、却て邪念妄想を絶えず打ち消して頭腦を明快ならしむる補助者の觀がある。試驗する人の話に、確かに草稿を書き上げて之を暗記するには室内ではどうも早く充分に出來ない。然るに散歩しながら之を試むると半分の時間と半分の勢とで、明快に記憶する事が出來るといつた人がある。

次に散歩中は家人友人または手紙等に依りて妨害せらるゝ事なきは説明するまでもない、從つて豫定の時間内に豫定の暗記を終了せしむる事が出來る。之に依つて考へて見ると暗記は散歩しながら之をやるのが最も適當である。

第三　永井永義博士の頭腦休養法

神經系は全身の働きを調和する爲めのもので、今假りに一身を一國に例へて見れば、神經系は恰かも中央政府の樣なものである

銳敏なる腦髓の活動

つて、全身の器官は悉く其配下に置かれてあるのである、從つて身体の器官の働きが複雜になればなる程、神經系も亦複雜なる高尚なる發達を爲し遂げて居るのである、即ち最も進化の著しき人間に於て、最も大切なる働きを神經系が行ふ樣になつて居るのである。

斯樣な高尚なる働きを爲し遂げる可きものであるから、神經系を形造つてる細胞は、外界の變動に對して最も感じの强いものである。恰かも機械が精巧に出來て居れば、出來てゐる程少しの事でも故障が起つて、其運轉が止ると同じ事である。之等の事は單に理論上から推定し得るのみならず、又實際上之れを確めることが出來るのである。

伊太利の有名なる、大生理學者モッソー氏は曾て、ベルチーノと呼ぶ獵夫で、誤つて頭蓋骨を銃丸で打ち貫き。幸に腦には何等の故障をも受けなかつた者を、被試驗者として種々有益な實驗を行つた。其報告に依ると腦に血液を供給する二對の大なる血管の內、頭の兩側を通つて居る一對丈けを押へ付けて血液の循環を止めると血液の供給が少なくなるから、腦の容積が小さくなり、被試驗者は直ちに失心して了ふことを見た、次ぎに血環を押へた手を放して、循環を好くすると、再び精神狀態が恢復して來る、人間では二對の內の一對丈の血行を止めても、今述べたやうに腦の働きが妨げを起すのであるが、動物であると一對丈の血行を妨げたのでは別に大した障害も起らぬ。然し殘りの一對をも結紮して腦髓に行く全体の血行を妨げると、其瞬間に烈しき症狀が起つて、短時間の內に死を來すものである。或は又、腦神經を取り出して酸素の無い場所におくと、短時間の後其興奮性が衰へて來るが、之れに僅かでも酸素を通ずると其機能が恢復して來る。

腦髓と血液の關係

斯樣な譯であるから、腦髓の營養には最も大なる注意が拂はれてあるのであつて、非常に多くの血管が之に分布し多量の血液を供給する樣になつて居るのである。從つて腦髓の衛生に向つては、格別注意せねばならぬのであつて、少しでも非衛生的の事をすると、最も切實に其害を感ずるのは、腦髓の神經細胞である。元來衛生の大本は規則正しき生活を行ふことにあるのである。即ち働く可べき時に働き、息む時に休むにあるので、其働きをして過不及なからしむる樣に努めねばならぬ。殊に腦髓に於ては其機能が微少である丈それ丈疲れ易いものであるから、此點に向つて十分注意して過勞することのない樣にせねばならぬ。腦髓の休養を充分ならしむることは、新鮮なる空氣の下に適度の運動を行ふことが最も大切である、斯くすれば血行及び呼吸が盛んとなり腦髓の神經細胞に最も大切な酸素の供給が充分に行はれると同時に、腦神經に對して最も恐る可き毒物の炭酸の排除も完全に行はれる。然かのみならず、凡て働きをする場所には血管が擴がつて、多量の血液が其處に赴き、之に反して働きを休んでる器官の血管は收縮して其血液を少くするものであるから、之は實に限りある血液を可成部合よく利用する點に於て、最も巧妙なる遣り方で、恰かも戰術に巧みな將軍が無用な場所の兵力を割き、有用な場所に多數の兵を配布し、限りある兵力を巧みに利用すると同じ關係である。そこで今腦髓が働くと腦の血管が擴がつて、多量の血液が之に向つて集中さるゝもので、此事は前述のモッソー氏の直接實驗に依りて確めた處であるが、今餘り烈しく神經系を働かして居ると、遂に腦に鬱血を起して恰かも水吐けの惡るい下水の樣に、動々もすると腦神經を害する樣な成分が其處に滯滯するものである。斯樣な場合に適度の運動すると、今度は腦髓の血管は縮んで、其代りに全身の筋肉の血管が擴張して腦に鬱滯せる血液が腦を去つて、筋肉に赴きて腦の血液を一新せしめる利益がある。

精神活動の經濟

同じ理由に依り盛んに精神作用を行つて居る時に、他の器官の働きを爲さればならぬことは、可成避ければならぬ。例へば食後直ちに精神を働かす樣な事は、消化器管にも、腦髓にも共に充分なる血液の供給が出來ないから、所謂二兎を追ふ者は一兎を得ずで、共に十分其の働きを爲し遂げることが出來ない、運動するにしても精神を過勞した後は、可成過度の運動を避け殊に柔道撃劍自轉車乘馬等、全く其際に氣を張つてせねばならぬやうな運動は、絶對的に避けねばならぬ。何故かなれば、斯樣な種類の運動を行ふ際には矢張り筋肉の働きのみならず、神經の働きも亦大に其れに加はつて居るからである。冷水浴を行つたり若くは適度の溫度の下に溫浴を行ふことは、精神の休養に頗る利益あるものである、何故かなれば精神作用を働かす場合には、獨り腦髓の血管が擴がるのみならず、內部の臟器の血液も一般に擴がるものである。之に反して手足及び皮膚の血管は縮むものである、溫浴すると丁度其れと正反對で、腦及內臟の血管は縮むで、手足及び皮膚の血管は擴がるものである、冷水浴の場合には、一時寒いと感ずる時には、血管の有樣が丁度精神作用の働かしてる時と同樣であるが然し其の反動として身体が溫かく感ぜられる時分になると、溫浴の時と同じ樣に、腦及び內臟の血管が縮んで、皮膚及び手足の血管が擴がつて、丁度精神作用をする時と反對の有樣になるから腦を休養するに最も効あるのである。但し溫浴の場合には可成溫度を高くしない樣に、又入浴時間を餘り長くない樣に注意することが大切である。精神病者などで烈しく精神が興奮してる場合などには、醫者は之を微溫湯の中に入れて、其興奮を鎭靜せしむるのも全く同一理に基いて居るのである。

精神休養上の注意

次ぎに神經の休養に大切なものは睡眠である事は誰れも知つてる通りである、然し扨に注意せねばならぬことは、睡眠の深さと時間の關係である。多くの人は長くまへ眠れば其れで十分に休養が出來る樣に思つて居るが、之は大した間違である。如何に長く眠つてゐても熟睡することがな

ければ役に立たぬ。之に反して短かくとも非常に深く眠ることが出來れば其効力は著しいものである。睡眠前に食物を攝つたり、其他過度に神經を使つたりすると、兎角夢ばかり見て熟睡することが出來ぬものであるが、斯樣な睡眠は如何に長くとも休養の効が少いものである。猶又書間でも神經を過勞した際に一寸でも眠ることが出來る樣な習慣を養成しておけば、休養に著しい効果があるものである、元來睡眠は習慣に依つて左右することが出來るもので、彼のナポレオン大帝が僅か二三時間睡つて烈しい仕事に從事したのは、何人も其精力の絶倫なのに驚くのであるが、然し之は一面から云へば、習慣の力で奏効は此短時間の間に十分熟睡して他人の六七時間も睡ると同一の休養を爲し遂げたものと察せらるゝのである。

飲酒の節用と心氣轉換

次に神經系に對して最も大切なる事はアルコール節用である、元來酒精が覺醒作用を施すのは、細胞の中に酒精とよく混ぜることの出來る成分があつて、其爲めに酒精が細胞内に容易く入り得る結果である。所で吾々の身体細胞の内、神經細胞就中大腦の神經細胞位此成分に富んでゐるものはないのである、從つて極めて微量の酒精で他の休細胞には覺醒作用を起さぬ場合でも、最も大切なる大腦の神經細胞には働き得るものである。此事を考へて見ても如何に酒精の濫用に注意せねばならぬ事が思ひやられるのである。

尙神經系の休養に就いては、一の仕事に熱中してゐる時に疲れた心が起つたならば、可成それと違つた方面の仕事に氣を轉ずる事が大切である、英國の有名なる英國の宰相たりしグラツトストーン氏は非常なる精力家で、獨り政治上に於て大手腕があつたのみならず、文學の上にも頗る造詣の深かつた人であるが。氏の書齋には數多くの机が並べて在つて、夫々違つた方面の仕事が各その机の上で爲される樣に配列されてあつて、一の机に就いて仕事して疲れた時は、直ぐ他の机に向つて違つた方面の仕事に取掛つて居たといふことであるが、之は殊に精力主義者の模範とすべき遣り方である、蓋し腦に於て爲し遂げらるゝ仕事は夫々之を擔任する部分が定まつてゐるのであるから、一の仕事を受持つてる部分が疲れても、尙他の部分は活動する餘力を存してゐるから、斯樣な事が出來るのである。其他尙ほ一般の衛生上の規則は、腦髓の休養の上にも無論少ながらざる利益のあることは云ふ迄もないことであるが、茲には特別に腦の衛生に關して、必要と認めた事柄の二三を述べたに過ぎないのである。

第三編　處世齊家論

第一章　人生處世論

第一　大隈老侯の處世精神論

優勝劣敗の原則は大自然律

社會には善と惡とが併存して居る。そこで當然の結果として衝突が起り競爭が起る。故に優勝劣敗自然淘汰は人間の處世に免るべからざる數理にして、また社會進歩の原則と爲つて居る。是故に奮鬪的元氣猛烈にして活動の精神潑溂たるものにあらざれば、この競爭の社會に立つて有ゆる運命に對抗して、己れの生存の目的を遂行することは出來ないものと思はなくてはならぬ。

古來の歷史を見るに活動的國家は起り、活動的國民は榮えて居るが、之に反して非活動的國家、非活動的國民は滅亡の非運に陷つて居る文中子の言に『詩書盛秦國亡焉非孔子之罪。講談長晉國亡焉非老莊之罪。佛敎盛梁國亡焉非釋迦之罪』と云つて居るが、之正に余が茲に言はんと欲する所以のものである。抑々佛敎は高遠なる人生觀を攻究して活動する爲の敎である。然るにその敎徒が徒らにそ

の弊に陷つて枯木死灰となり活動を中止するに至つて、梁國は終に滅亡するの外なき非運に陷つたのである。周時代の文明は實　世界に誇るべきもので、之を希臘の文明に比するも劣ることなき程のものであるがその國民はこの文明の精華を徒らに詩文を弄する具として取扱ふに至つて、周の天下は終に滅亡するに至つて居る。その他希臘羅馬の興亡の歴史を調べても皆同一轍を踏んで居るではないか。

すべて活動は人類がこの宇宙に生存する所以の大自然律である。啻に人類のみならず、活きとし活けるものは皆働くべき運命を持つて居る。かの下等動物すら、自ら働いて生存して居るではないか況んや靈妙なる知能を有して、進歩發達すべき運命を與へられたる人類が、活動を怠るべき道理が何處にあるか。

予の現實主義と處世の精神

日露戰爭の當時、歐洲の一新聞に日本の神樣に就てのお伽噺の書いてあるものがあつた。余は之を讀んで非常に面白く感じた事がある。そのお伽譚といふは、或靈地に露國の有ゆる神々が集つて戰捷を祈つて居る事柄であつて、其處には日本の神樣が一つも見えない、何故日本の神は此地に來つて戰捷を祈らないかと世界中の人が不審に思つて居るけれども、日本の神樣は既でに殘らず戰地に行つて居る。軍人と一緒になつて戰つて居る安閑と御祈りを爲て居る樣な神はないといふ意味が書いてある。余は之を讀んで、凡て人間が活社會に處するも之れでなくてはならんと思つた。予は宗教家に對して個人としてはその道德の高い點に就ては尊敬するけれども、彼等の說く所、即ち未來には天國ありと考ふる說に就ては決して信服する事は出來ない。畢竟天國說は彼等の空想にすぎないと思ふ。

予は徹頭徹尾現實主義である。予の魂魄は永へに斯土に留るべきことを確信して居る故に予の精力予の氣魄の存する限りは、如何なる艱難も、如何なる障碍も悉く粉碎して進むこと、之れ予が年來取り來れる處世上一貫の精神である。

予唯一の誇たるべき反撥力

抑々予は生來非常な反撥力に富んで居る點を以て自ら誇とするに足るとして居る。幾多の艱難幾多の逆運が來つて我輩を壓倒しやうと爲た場合にこの反撥力の强さがその度を增して之れと鬪ふ、余が今日まであらゆる境遇に堪えて來たのも、また今日尙社會的生命を有して居るのも、全くこの反撥力の賜である。

現に世の多くの人が年老ゆれば活社會より退けらるゝ所以は畢竟反撥力の乏しくなつた事に歸するもの多いではないか、何人にもこの反撥力は有るべき者であるが、唯だその强弱の度の違ひによつて、堅忍なるか、薄志なるか、劣夫たるかに分れて來る、人々がこの反撥力に依つて非常な決心を起した時には如何なる勇氣も起る。如何なる才智も湧く、如何なる奮鬪も出來る。かの天災の事變に出遭つた瞬間に、婦人女子の靈妙、不思議の智慧、勇氣、力を出してその天災事變を避くる如き

例を見るも、人間は何人にもその決心覺悟の如何によつては、如何なる事をも成しとげ得る靈妙なる能力を有して居ることは爭はれぬ。この能力を充分に發揮して活社會の勝利者となるか、或はこれをなし得ずに薄志弱行の徒で終るか否やは、畢竟その人の反撥力の強いか弱いかの問題である。

予の年來一貫せる處世主義

今日の國民の通弊として、徒らに理想高く希望大きく、常に一時的榮華を夢みて而かも實行力は伴はず、奮鬪元氣の缺如して居ることを見て、予は甚だ遺憾に思ふ。甚だしきに至つては、社會の競爭場裡に進み入つて一度び激烈なる競爭に出遭つた爲に忽ちに元氣沮喪し、遂に再び立つの勇氣を振ふことの出來ない者も少なくない、之れ其人の薄志弱行に基く所以もあるが、又一つには處世の心得に就て考へ違いしたるに因る點も多いと思ふ。

予の年來取り來れる最も確實なる處世道は、先づ『自己』を十分に自覺することである。之れは何人にも通用せらるべき要道と思ふ。自分の能力、自分の資力、長所、短所、嗜好特性に就て十分に省みて、然る後自分にとつて最も的確なる方法を立てゝ、それに向つて急がず、焦らず、着々と一歩づゝ近よるべく努力する事である。而して其手段としては場合に應じては車を引くも宜しい、牛乳配達も宜しい、丁稚小僧も少しも構ふことはない。唯だ自分の現在の運命に安んじて力の限り努力し、その間に智識と精力と資財とを蓄積して一歩〳〵に目的に近寄る事をつとむべきである。この意味に於て勞働は神聖である。何の恥ずべく厭ふべき事があるか、予が年來の處世の覺悟は要するにこの外はなかつたのである、故に此の辛抱の出來る人ならば必ずその目的を達して社會の勝利者たるべき事を予は茲に證言する。

かの一世の傑物たる豐太閤すら草履取りから擧つて行つたではないか、また天授の英才を抱いて歐洲を蹂躪せし那破翁もその初めは一士官ではなかつたか、若し彼等の最初の希望をいふたならば或は唯一國の大名になりたいとか、或は聯隊長までは進みたいと云ふ位に過ぎなかつたであらう。それが一歩一歩、進むに從つてその希望は益々大きくなり、終にあれ程の大成業に到着したものである。凡ての偉人の道程は皆斯くの如き者であつて、之れが何人も學ぶべき處世の道である。

第二　福來友吉博士の武士道的處世論

人生活動の眞精神と生活難

熱々近頃の世態人情を觀察するに、唯々一般に泰西の物質的文明のみが最近數十年に於ける短日月の間に、獨り遽に長足の進歩を遂げた結果多くの製造工業品は從來の家庭から離れて、その大部分を機械工場に奪はれ、この影響は延いて社會の有らゆる方面に生活難の聲を高めしむるに至つた。從つてこれまでの如く容易に一定の業務に有りつくことの出來ない憂は、無節操なる娼婦の如く、唯理由もなく徒ら

に其れからそれへと轉々して、僅かに其日の口を糊するに是れ急なる果敢なき有樣で、遂には相當に教育を受けた者までが、等しくその就職難に苦しみ、果ては幾多の高等遊民を出すに至つた。ところが、一方ではまた皮相的歐化主義の惡弊として、生きたる人間を全然一個の機械視するに至つた結果、人その者の活動に眞の生命を見出すことが出來なくなつて來た、これといふのも一般社會の多くが何れも生活に追はれるところから、自然と今日主義に陷り明日は又明日の風が吹くとばかりで、今日甲の仕事を爲て居るかと見れば、明日はその時の都合で乙の業務を執るといふやうに、此れで行かなければ彼れ、それでも駄目なら今度は勘ふと、色々の方面に手を出すのであつて、殆んど自己の全力を傾注し、その生命を賭してまでも一事業に熱注する。所謂鐵石心を有した武士的人物が如何にも乏しくなつてきたのは、我邦將來の發展に對し、返すがへすも遺憾の極みである。

人生は眞劍也
社會は戰場也

人生は眞劍である。決して遊戯ではない。『光陰は百代の過客、天地は萬物の逆旅、浮生夢の如し、歡を爲す幾何ぞ』とばかり、燭をとりて夜遊ぶ底の所謂支那流の遊戯的氣分を以て、絶對に此の世に處すべき筈のものではない、社會は戰場である、從つて人の社會に出づるや、必ず娯樂場に入るの思ひをなして居つてはならない、されば男子一たび志を立て、或る一事を成し遂んとする場合には、先づ須らく武士が戰場に臨むが如き覺悟が無くてはならぬ。戰場には方畧の必要がある、魚鱗鶴翼の陣地も時に取つては頗る大切なものには相違無かろうが、時の勝負を一擧に決しやうとする、所謂一か八かの運試しの戰鬪天下分目の關ヶ原には何うしても項羽が背水の陣を學ばなければ到底その目的を充分に達することが難かしいのである。人生も亦その通りで、あの手で行かなければこの手、それもだめなら次ぎには斯ふとそんな生温いことでは迚も大事を仕遂げらるゝものではない、忠義の前には何物も怖れず、只管進んで退くを知らぬ我が武士的精神は、やがて吾々が日常生活の上に取つて以て範とすべきものである。

凡そ人の此の世に生れ來るや、それと同時に豫じめ、その人特有の運命を生みつけられてゐるものとすれば、その當時に於て既に、その人の取つて以て進むべき路は、整然と定まつて居らなければならない筈のものである。而もその路たるや決して幾筋も在るものではない。必ず一ト筋でなければならない筈の理屈である。それは全く一種の神學であつて、人力の如何ともすることの出來ないところのものである。二兎を逐ふものは遂にその一兎を得ざる場合と同一理論で、すべて人間がこの世に處して、一旦何事か爲さんと企たなら、最早決して其他を顧みず、宜しく馬車馬的に驀進し其れが善かれ惡かれ、すでにその志た事に對しては、總て我生命の全体を打ち込んで懸つて、一意その爲め努力奮勵しなければ到底徹底的に成効するものでない、その手段方法に至つては、如何に種々樣々なる妙案奇策を廻らさうとも、それは今姑らく措いて敢て事々しく問ふところでない、詮

するところは、結局それが或る一つの活々した生命ある力に成つて、最初その目的と定めたる或る點に向つて働いて行つてさへすれば、其處にその事業に對する充分の意義あり、又價値が存するのである。この點から云ふときは、何うしても人生に於て爲すべき仕事はその手段としては兎も角、窮極するところは共和的ではなくて、必ず君主的で行かなければ駄目なものである。亞米利加であるとか、若しくは獨逸の如き、只管物質的文明にのみ心醉し、全然人間を一個の機械視してゐる國はイザ知らず、どこ迄もその精神を尊重する我が神州正氣の國に在つては、殊にその然る所以を痛切に感ずるのである。

人生處世に必要な背水の陣

今更敢て武士道の眞髄を說き起そうと云ふ譯ではないが、彼の有名な濃ケ嶽七本槍の隨一人、鬼將軍としてその威名を鵜林八道にまで轟かした加藤清正が、その寶藏院流の一本槍を扱く時は、既にその槍先に清正の全生命が籠つてゐたのである、されば清正が一度起つて戰に臨むや此れで失敗つたら彼れ、それでも不可なければ次は何うと、決してそんな不徹底なことは毛頭なく、唯々その一本槍に己が生死を托して居つたのである。その位であるから彼れの到る處、宛ら草の風に、靡くが如くであつたのも寔に所以なきにあらずと謂ふべきである。『人の一心は岩をも徹す』と云ふが、實際人が一心になつた時ほど驚くべき功を奏するものはないのである。又彼の高田の馬場の仇討で、末代までも忠臣藏にその名を謳はれる堀部安兵衛は何うであつたかと云ふに、突然眞つ甲から斫り冠るか、さなくば肩先から襷十字に切り下げるか、この二つより他には何にも知らなかつたものであるが、イザと云ふ場合、何時でも彼れの生命は全く此の二タ手に籠つて、能くその功を收めたといふのも、一にその刀の切り先きに凝集されたる精神の偉大なる働きに由るからである。此等は能く一槍を提げ、一刀を揮つた場合の例であるが、尙ほ又劍道の達人にして、兩刀使ひの名人として後世にその名を殘した、宮本武藏は何うかと云ふに、これは或る人に云はせると大いに非難する向きもあるが、仔細に研究すれば、それとても全く根本的に非難するの方が誤りで、成る程左右の兩手に各々一刀宛持つて居るのであるから、その形式から見れば、萬一右手の一刀が仕損じた場合は、直ちに左の一刀を以てこれに代るといふやうに宛ら兩刀使ひ分けの觀があるものゝ、それは全然皮相の見解と稱すべきもので、彼れの使つた兩刀は決して、そんな理由、卑怯未練がましいものではない、その一刀か主で、他の一刀は謂はゞ從なのである。兩刀等しく五分々々の働きを見せると云ふのではなくて、主としてその生命の籠るところのものは常にその一刀にあつて、他の一刀は其の一刀を補佐するに過ぎないのである。されば、その手にしたる形式は兩刀の如くなれども、精神の働く處はその一刀にあつて、能くその勝ちを制してゐるのである。これは唯その一二の例を上げたまでに過ぎないが、一事が萬事、世の中の總てが皆斯の如き理窟のもので、吾人が眞實生命の活躍は、常に或一點に凝られた人、その人の

全體の精神の力の働きに在つて存するものである。

更に之れを吾人が見聞するところの卑近な一例を取り來つて説明するならば年々歳々五月雨の頃に於て、誰しも田舍に聞くところの、彼の節面白き田植唄である。これも亦或る人の説に從へば、動々ともするとその

眞に生命ある事業とは何ぞ

唄にのみ心奪はれて、自然手の方が疎かになりがちのものであるから、仕事の上に於て非常に損だといふ結論であるが、これは全く一を知りて二を知らぬ愚論といはなければならない。何故かと云へば、その實、あの無邪氣が唄のある爲めに、知らず識らずの裡に、殆んど無意識に、自然と調子が乘つて來て、どの位捗々しく仕事を運ぶものだか知れない上に、如何ばかり疲勞の感を薄らげるか知らない、其れは獨り此の田植唄とのみ限らず、吾人が些細の仕事に就ても屢々經驗するところのことで、唯默々としてその事に携はつて居るよりは寧ろ小唄交りか何かで其れを行つた方が、仕事の捗取つた上に、却つて比較的疲勞を覺ゆることも少いといふことは、經驗上既に爭ふべからざる事實である。是れその場合は全く仕事に對する觀念と、唄に對する意識とが混然一つに融和して仕事を進むる上に就いて結局一つの力となつて表はれて來るのみか、而かも、其處に尊き精神の活力が籠つてゐるからである、これを又吾々人間の生理作用から説明するも亦同じことで例へば吾人が今物を視るといふ作用も、これを生理的に云へば、成る程多くの細胞の相集つて出來た一つの働

きには違ひないが、その一つ〳〵の細胞が、等しくこれを視るといふ一點に集注した作用をなすから、それで充分の用を辨ずるものゝ、若しその細胞の中の何れでもが、俺はそんな樣の下の力持ちは厭だと云ふ風に駄々を捏ね出し、等しくその視るといふ作用に向つて働かなかつた場合には、忽ち視覺に故障を生じて來るやうなもので、何んでも社會萬般の事は、多くは組織なるものが、同じ目的、換言すれば同じ一つの或る點に向つて積極的に働くところに眞の生命が籠つてゐると見なければならないのである。

右手では圓形左手では三角

兩手使用論に就いてもさうであるが、凡そ如何なる人でも普通の生理狀態に在る場合は、何うしたつて右手で圓形を書くと同時に、左手で三角を描くと云ふことは、如何程心を用ゐても到底不可能なことである。試みに各々行つてみても分る通り、三角なら兩方とも三角、又圓形なら何れも圓形といふ風に、同じ物を同時に兩手で書くことは出來るが之れと反對に同時に各別の形體を兩手で描くといふ技は、迚も其れは出來ない相談である、これから推して見ても、人生は一つの目的に向つて驀進せねばならぬもので、決して左顧右眄を許さぬといふことは明かに分るのである。尤も催眠術に由つて故意にその人の精神を分離させた場合は別の話しで、その場合は片手で圓を書き、片手で三角を描くことの出來るばかりでなく、一方に讀書しながら、猶且つ暗算をも併せ行ふことさへ出來るものであるが、それは全く格別の場合

で、今茲に論ずべき性質のものではない、たとへ眞に意義ある人生は、必ずその人の爲す事ごとにその人の生命が籠つて居らなければならぬものである。それが況してや古來精神を尊び來れる我國民に於てをやである。要するに人間が營みつゝある事業の死活は、その精神の充分に籠ると否とに由つて定まるものであることを知らなくてはならない。

第三　加藤咄堂氏の至誠一貫處世法

金も大切なれど誠は人の道

人が生れてこの世に處してゆくには、第一食はねばならぬ。衣ねばならぬ、また住居を要する、この衣食住の三は實に人間の缺くべからざる必要なもので、此うち一でも缺けては一日も人として世に在ることは出來ぬ。さてその衣食住は何に依つて得られるかといふに、それは金の力による、即ち人世最も大切なものはといふと、金でなければならぬ。金が敵の世の中で、金の無いものは粗食を喰ひ水を飲むも尙飽くを得ず、襤褸僅に身を掩ひ、肱を曲げ膝を屈するの小室にも窮するといふ憐むべき境遇に墜ちるを免れぬ。しかし又金ほど重寶なものはないので、金さへあれば、口常に山海の珍味に飽くことが出來る。身常に綾羅錦繡に包まれ、居るに金殿玉樓、出づるに駟馬安車、榮華を極むるといふのも、實に金の力に外ならぬ。金はかく人世に貴い大切なものであるが、以て人世貴いものゝ最上とするには足らぬ。然らば其の最も貴いものは何か曰く『人の道である』。古の聖人が『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』と言はれたのも實に人世此の道の最も貴いことを敎へられたものである。然らばその道とは如何なるものかといふと中庸に『誠は天の道なりこれを誠にするは人の道なり』とある通り、春としなれば百花爛漫秋としなれば千山紅葉四時運行、萬物生成する所以のものは天の誠である。君に忠義を致し、父母に孝に兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じてゆく所以のものは人の誠である。倫理といひ道德といひ宗敎といふも歸するところは一誠の外にはない、軍隊に御示しになつた勅諭の忠節、禮義、武勇、信義、質素の五ケ條の御精神も亦一誠に外ならぬ。近世倫理學に於て眞我といふものを立て『眞の我を見よ僞りのない飾りない自己を見出せと』說き古歌にも

心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神やまもらむ

とあり、また佛法の大海は信を以て能入と爲すとあり、この信も亦誠といふことに外ならず誠なくして百千の經文を讀んだとて何の役にも立たぬ、吾々の心は誠を本としてのみ眞なるを得るので人の道は誠なくしては立たぬものである。實に誠は天の道で、柳は綠、花は紅、鳥はカア〳〵、雀はチウ〳〵、天道曾て僞り飾るといふことはない。吾々がこの天の誠を心の奥に本づけてゆく所に、

人の誠があるので所謂これを誠にするは人の道となる、されば誠なき忠は忠でなく誠なき孝は孝でない、すべて誠なき行は人の道に外れたものと謂はねばならぬ。楠正成の歌に

身の爲に君を思へばふた心
君の爲には身をも思はじ

とある。即ち臣となつては君の爲に命を棄てゝ顧みない、子となつては父母の爲には命を惜まぬ。人としてこの道の爲には命を惜まぬ。人生金にあらず、命にあらず、只道あるのみ道とは天の誠なる道理之れを誠にするは人の道であることを知らねばならぬ。

敷島の大和魂の精髓は誠也

外國人が日本人を評していふに、第一感服するのは、軍人の規律の正しいこと、武勇節義に富めることであるといふ。而して惡口云ふのは日本商人の信用がないこと無規律なことであると言ふ、何故日本の軍人は賞められ商人は惡く云はれるか、日本には古來特有の武士道があつて、武士たるものは、君の御爲に命をすてゝ忠節を勵む、これは即ち僞り飾る心なく理窟以上の強い力による即ち心の誠から出て居るのである。さきの楠正成の意味で唯誠心誠意に出づるもの君の爲には名も要らぬ金も要らぬたゞ誠心誠意君の御爲を思ふ爲めに、一身を鴻毛の如く輕んじて自分の力の限を盡す。この心を本として働くからは些の私がないからして、規律を嚴正にし、命令よく行はれ眞に股肱となつて働くことが出來る。この心を本とするから、勇氣は眞の勇氣となつて、如何なる場合でも懼れず、敢行して身を顧みないのである。

佐藤繼信の壇の浦討死の事

昔源義經が壇の浦の戰に、平家に聞えた豪勇無双の能登守教經が必死となつて義經を射止めやうとし強弓を取つて狂ひ廻り、義經既に危く見えし時、佐藤繼信が教經の矢表に立ち義經の身代りとなつて斃れた、義經泣然として淚を滿へ繼信の手を取つて言ふには『互に主となり從となつてより死なばもろ共と日頃誓ひしに、今吾が爲に御身は斯く命を落したること義經終天の恨おん身の節義は義經永く忘れじ、』と繼信また義經の手を取つて言ふには『一たび君の家來となりしより君の馬前に人命を捨つることのみ心に誓ひしに今日一命を君に代ることを得たりしは臣としてこの上の願は莫し、』と、寛に瞑目したいふ、これが即ち誠心誠意より出でたる眞の忠節義勇である。この眞心を基として之れよりして發して、平常人に接し、事に當るならば、そこに信義と現はれ禮義とも現はれて所謂人の道を完うすることが出來るのである。

聖德太子の御語に『信は義の本』とあるが義は宜なりで、その分に從ひ、その事の正しきを行ふことである。即ち信義は人に對して僞はらぬ。自ら欺き人を欺くやうなことをせぬといふことで古武士が一諾の信義を重んじた精神は實にこの虛僞なき誠心誠意の現れに外ならぬ、されば三百年前に於ける武士の金子借用證書の文言に『何日何日までに返濟致さざる時は、人前にて御笑ひ下され度候』といふのを見たが、金を借りて何日までに返すと言つて、その言に違ふことあつては武士に取つて絶大な恥辱とせられたもので、昔の武士が如何に信義を重んじたかがわかる。

禮義を知らざれば人に非ず

禮義は上下の分を明にし相互の權利を尊重し、互に相敬し相愛するの道

で弓矢取る身には、殊にこの道を嚴しく言つたもので苟も禮義を失ふのは武士の風上に置けぬとせられたものである。

稻藁一徹使節の事

昔、織田信長が紀州の雜賀孫一郎を攻めたときに、道理を說き降伏せしめんと欲して使者を立てゝ雜賀の城に致らしめた。所が數日を經てその使が歸つて來ない。そこで更に稻藁一徹を使者として遣はした。すると雜賀は遂に降伏して稻藁と共に軍門に來て信長に謁した、信長が言ふには『數日前に使者を遣はしたに何の返事もなければ使者も歸つて來ない、而して今稻藁を遣つたら早速出で來たといふのは如何なるわけか』と雜賀曰く『數日前何者とも知らず、城外に來り、高聲に呼はりて曰ふには『吾は織田殿の使なり。雜賀孫一郎速に出でゝ降伏せよ』と拙者考へるに斯かる傲慢無禮なものは織田殿の名を騙るものにして、武士の振舞として許すべからざる不埒な奴であるとたゞ一刀に斬り棄てました。然るにこの度稻藁殿を遣はされしに、稻藁殿は實に禮義正しく義理に明で如何にも立派な武士たる体面を以て遣によつて覗かれしにより、早速出て軍門に降りし次第で御座る』と述べたといふことである。

これは一の例であるが、昔の武士が如何に禮義を重んじたかを見ることができる。蓋し禮義とは誠の心が外にあらはれて形式となつたもので、形式のみでは眞の禮義でない、禮義は亦心の奥の誠から出たのでなければ虛である。

質素は美德君子は財を惜む

既に禮義を正し、信義を厚うして、以て君に忠節を致し、道の爲に盡さんとするには勢ひ質素儉約を旨とせねばならぬ。そこで質素といふことが亦一の武士の精神となつたのである、質素の反對は華美で華美は上飾りのものであるから心の奥の誠から出た道と相去るやうになることは當然である。而して質素は上べを飾るといふ、虛僞的のものに反して、上べは兎に角實質を確にするといふので、僞はらぬ、飾らぬといふ道を行ふ所以である。

眞田昌幸の眞田組の事

眞田昌幸が紀州の高野に在つたとき刀の柄絲に木綿の組末なものを用ゐて居た、或人嘲つて言ふには「苟も一國一城の主と謂はれた御身分として、武士の魂たる刀の柄絲に木綿とは、あまりに吝嗇に過ぎるではござらぬか」と、すると昌幸が言ふには「昌幸の刀は柄絲は木綿であれど、中身は大小共に正宗の刀でござる。今の世の人多くは、上べを飾つて中身を大切にせざるが我に上べよりも中身を大事にする」と答へたといふ。これは眞の質素儉約の精神である。佛源禪師は『君子は財を惜む。之を用ふるに道あればなり』と云はれたが、財は天下の寶として惜み蓄へるべきである。たゞ惜むのは所謂吝嗇で、之を蓄ふるに道あり道によつて之を善用する、これが即ち質素であるので要は僞り飾らぬ誠心を以て之を處置することを忘れてはならぬ。

日常生活に於ける誠心誠意

忠節、禮義、武勇、信義、質素の五は昔の武士道の美しい點で所謂敷島の大和魂として精華を發し來れる所である。而も之れらの美しい德は昔その本は一誠より出で居るので、その根本精神は誠に外ならぬと謂はねばならぬ。

日本の古武士は、この一の誠を本として、所謂武士道を琢いたものである、一旦緩急ある時には、それが發して大和魂の美しい華となつて現はれたのである。しかるに今は、一旦緩急ある時に臨み『義勇公に奉ずる』といふことは武士なる一

階級に限れらて居らぬ。何となれば今日では國民皆兵で、日本臣民たるものは、悉く武士道の精神により一旦緩急ある時に當つては、何人も大和魂の美しい花を發しなければならぬ。所で此の精神は一旦緩急あるに際し、俄に出來るものではない、平常事無き時に於て此の心を以て軍隊に下されたる、五ケ條の勅諭の御精神に本き、何人も皆修養を怠つてはならぬ。外國人に惡口いはれる所の日本商人は、こゝに省みる所なくてはならぬ、今前云つた、五ケ條を商人の道に當てゝ考へて見るに、第一忠節とは、若し戰時にありては義勇奉公で、彈丸雨霰と飛びちがふ中をものともせず、身命を顧みずして立ち働くの覺悟が無くてはならぬが、平時に於ては『戊申詔書』に御示しになつた通り、忠實業に服する即ち日々の本務を完うするといふことが、やがて君に仕へて忠節を致すことになり、愛國の精神を實現する所以となるのである。社會の組織は複雜で、人々の仕事も別々である。その別々なる所に共同生活の意義があるので、これを一身に譬へて言ふならば、耳目手足が、各々別々のはたらきをし、目が如何に忙しいからとて、耳之を助けず、手が忙しいからとて足が手の仕事をするといふことはないが、その別々なのが一つになつて、人間一身の活動が出來る、更にこれを譬ふるならば、此の手足耳目は、別々の働を爲すものではあるが、假に足の爪先に蚊がとまるとする、直ちに之を腦に通ひ、腦はこれを目に命じて視せしめ、手に命じて打たしめる。之れと同じ關係で、農業家は農業家、商人は商人、教育家、宗教家、凡て各自の事務に忠實なることがやがて社會の爲めとなり、國に盡し、君に奉ずることになる。即ち別々に各々の働を胡麻化し無しに務めることが、直に共同一致の意義となるのである。

忠實業に服し 勤儉産を治め

戊申詔書の『忠實業ニ服ス』の下に『勤儉産ヲ治メ』とあるがこの勤といふのは、一生懸命に家業大事と働くことで、農業家が農業に商人は商業に、各々一生懸命に働くことは、丁度兵士が戰場に臨み、硝煙彈雨を冒して身命を惜まずに、働くのと異ることなく、即ち武勇に當るのである。儉は儉約と續く字で、前の五ケ條のうちでは質素に當る。更に語を換へて言ふならば、勤とは時間を無駄につかはぬことである。儉とは金を無駄につかはぬことである。澤庵禪師の歌に

思へば日々のわかれかな
昨日の今日に又もあはねば

とあるが、此日一たび去つては、千生萬劫にも復た逢へない、實に惜ひべきは光陰で、古來東洋では『尺璧は寶に非ず、寸陰是れ競ふ』といひ西洋人は『時は黄金なり』と言つて居る。一たび失ふた金は復た得られるが。時はこれを過ごしては、如何にするも取り回すことは出來ぬ。そこで其貴い時間を大切にし、これを有益につかふといふのが、即ち勤となる。而して金は、さきにも言つた通り、之れに使ふ可き道ある金であるから、決して無益に費さぬといふのが即ち儉となるので、こ

の勤と儉とは恰も左右の足のやうなもので、人が道を歩くには、一足進みては、一足止り、一歩一歩左右交る〳〵進んで、前へ行くのである。若し兩方同時に進まんとするも進むことは出來ず、兩方同時に止れば勿論進まれない、それと同樣に勤に左足を進むれば儉と右足が止り、互に進み互に止り、而もよく前進して無事に人の道を行くことが出來るのである。若し勤のみなりて儉が無かつたならば恰も底のない桶に水を入れるやうなもので桶の内はいつまでたつても滿つることがない、又儉のみありて勤が無かつたならば、新しい水を入れることをせぬ桶水の如く遂に腐敗を免れないのである。されば吾人の日常生活に於て、この勤儉の二は恰も車の兩輪の如く鳥の双翼の如く缺くべからざる大事なことである。

商人の信用も至誠より生ず

これは僞り飾りなき誠の心を以て、自分が業に服し產を治める上のことなるが、更に他人に對するに當つては、これが信義となり、禮義となるのである。商人に一番必要なものは信用であつて信用は實に商人の財產と言はる、信用といふことは彼の武士一諾を重んずるといふ精神と同じで虛僞を言はぬ一時的の目の前の利益の爲に、自ら欺き人を欺くやうなことはせぬ。すべて誠心を以て人に接する。爰に所謂信用なるものが出來るので。この心を以て商業をするものは遂に最後の勝利を得る者。誠心を缺き一時を籠絡して巨利を博するが如きは。一時成功の如く見ゆるも結局は失敗に終るを免れぬものと知らねばならぬのである。されば二宮尊德翁は『商人の道は、賣り手よろこび、買ひ手よろこぶやうにすべし』と、言ふて居る。商人たる者のよく味ふべき格言なりと思ふ。

禮義といふのも矢張りこの道理から出て來るので、客を敬ひ、得意を大切にして無理なことを言つたり爲たりせぬといふことが、信用の種となるのである。少し話變るが、

芭蕉、其角を戒むる事

昔、松尾芭蕉が或る大名の前へ召されたことがあつた。芭蕉は非常に煙草が好であるのに、その日一日は好な煙草を全く喫まなかつた。後で門人の其角が『師は平素あれ程煙草を好で喫むのに、今日大名の前では一日一服喫まなかつたのは大名を憚つたものと思はれますが、滑稽調戯を旨とする俳人として高貴の人の前なりしとて遠慮するは、聊か高貴に阿るに似たり』と言うた芭蕉叱つて言ふに『俳諧は未技であるが亦以て道とするに足るものあり、吾れ今日大名の前に於て煙草を喫まざりしは、禮といふものである。阿るのではない。汝が輩若し禮を廢して放逸を旨と心得なばそは吾道の賊なり』と其角大に愧ぢて師に謝せしといふ。

俳諧の如きに於ても尙斯くの如く禮の重んずべきをいふ。況して直接種々の人につきあふ商人等にして禮を缺くやうにては、一日も其道を完うすることが出來ず、家業の繁昌は決して望まれぬことである、之れらのことも其本づくところは一誠あるのみ若し禮を爲して、內に誠の心無からばそは虛禮にして、以て人の信用を得る事は出來ないのである。

二宮尊德は、至誠勤勞、推讓分度を敎條として立てられたが、この勤勞と云ふのは即ち忠實來に服することで、推讓は、先を思ひ遣つて迷惑をかけぬやうにする、先に言つた賣り手悅び買ひ手悅ぶやうにすることも、この推讓から出て來るのである。分度とは分を守り、足ることを知つて簡易の

生活すること、即ち質素もこの内に含められるのである。この勤勞推讓分度の三の前に至誠を置いたのは、この三は皆至誠を根本としなければならぬ。すべての道は至誠から出た行でなければ眞でないことを表明して居るのである。

眞我は心の奥で誠心良心也

人間の氣質はそれ〳〵違つてゐる。氣の強い人もあれば、氣の弱い人もあり、氣の早い者もあれば遲い者もある、理窟に勝つ人もあり、人情に脆い人もあつて、決して一樣ではない。『その心の異ること猶その面の異るが如し』と、古人も言つて居つて、實に各人名異十人十種であるが、それらの異れる人々の心の奥底には、また萬人共通の一致點があるのである、萬人共通の一致したものとは即ち誠である。更に之を自分一人の心に就いて考へ見るに、互の心は一日一時の中には何度變るかわからぬが、その移り變り定めなき心の中に亦變らぬ部分がある、何ぞ、即ち誠である。この誠の心のみは如何なる時と雖も心の奥に在つて動かぬもので、たゞそれが有雜無雜變化流轉の心情に煩はされて光を掩はれて居るのである。『上下心を一にせよ』『億兆心を一にせよ』と仰せられた勅語の御意味はこの誠の心を以て、すべての人民が一致するやうにとの仰せに外ならぬ。佛敎では、我なるものを假我と眞我とに別ける、假我といふのは喜怒哀樂愛惡欲の移り變るところの日常吾人の心を指したもので眞我とは天地の眞理と自分とが一致したる眞の我であつて即ち心の奥の院の心である。佛敎の修行は眞の我を見出すにあるので佛性といひ、本來の面目といふのも皆この眞の我を指したに外ないものである。『人は欺くを得べし、世は僞るを得べし、而も心に問はゞ何と答ふべき。』この心の奥の御主人の前で、立派に耻ずることなく立ち居振舞が出來るならば、即ち眞に誠を竭し得たものである誠とは自ら僞らぬこと自ら僞はらぬとは自分の言行に表裏のないことである。表から見て如何に立派にうつくしくても、裏から見て汚れてゐたならば、それは誠でないのである。八面玲瓏人に與へて見せしめるといふのが眞の誠でなければならぬのである。

自ら誠を守り他に誠を盡せ

自ら誠をつくすと共に、他に對して亦誠をつくすのが人の道である。世に人を動かす强い力は何かと云へば、今の人は、それは金なりと云ふならん、然し、一寸位動かすことは金で出來やうが、眞に人を動かすといふことは金では出來ぬのである。孟子が梁の惠王に初て見えたとき、『王亦何ぞ利を言はむ仁義あるのみ』と對へたが、利即ち金の力で人を動かさんと欲する者は亦人の爲に金で動かされるものである。左う云ふ者は心から自分の味方にすることは出來ぬのである。味方として太だ心細い者と謂はねばならぬのである。眞に人を動かし精神的一致を見るに至らしめる强い力は一誠あるのみ誠心誠意でなくんば、決して眞に人を動かすことは出來ぬものである。

釋迦耶院日輝上人の弟子に物を盜む癖のある坊さんがあつた。相弟子の某、其の人は學問もあり、德も修つた立派な坊さんなり

日輝上人の高徳の事

しが、上人に申すには『あの盗賊坊主如何しても手緒の悪いのが直らぬ、どうか早速放逐して給はれ』と願つたが、その後幾日たつても日輝上人はその悪僧を處罰しないで、今のお弟子は幾回も放逐を願つたが、依然として打ち棄てゝあるので、遂にそのお弟子は上人の前へ出て『師があの賊僧をそれ程までかばふなら如何にも仕方ありません。私は最早一日もあんな盗賊坊主と床釜を共にするわけには參ねりませぬ故、此上は私がお暇を頂いて出るより外はありませぬ』といふと上人は『さうか、それでは仕方がないお前に出て貰ふことにしよう』と云はれた。お弟子は更に聞くに『師はなぜそれほどまでにあの一賊僧を惜みなさるか』といふと、上人の言はれるには『お前は既に學問も徳樂も就り何處へ勝手に行かうとも立派に人の上に立つて行けるが、あの坊さんは我が膝下に置いてこそ、網目の尋を逸れて居るが、こゝを去り出づれば、直ちに一身を措く所に窮する人間なる故、不便であるからあれは我が所に置いてやらればならぬ』とそこで、そのお弟子は大に自分の不徳を愧ぢ、その失言を謝してまた止り修業をつゞけ、大徳となつたといふ面して彼の賊僧もこの話を聞き、心から先非を悔ひ改めて、一心に修業を重れ亦立派な坊さんに成つたといふ話がある。この一例によつて見ても誠が如何に人を動かすかといふことがわかる。

これを以て見れば、誠心誠意を以て人に對せんには、如何に獰猛凶悪な者でも遂によくこれを感化することが出來るのである。況んや、それほどでない多くの世の人々に接するに、若し眞の誠心を以て對するならば、虚偽詐謀は迹を絶ち、互の人格を尊重し、互の權利を侵害するやうなことなく左するも、右するも、自分の周圍は常に春風駘蕩、和氣藹々の天の樂園に遊ぶが如き觀がある。是に至つて即ち『所謂誠は天の道なり』といふ。その偽りなき道をば克く之れを誠にし得たるこそ取りも直さず人たる道を完うし得たる者と謂ふべきである。故に吾人が日對生活に於て一貫の道は至誠に外ならぬものであると謂ばねばならぬのである。

第四　一木喜徳郎博士の人生の根本義

永遠の生命か醉生の夢死か

抑々我々人類は、何の爲めにこの社會に生れて來たのであるか、何の爲めに日々營々と眞黑になつて働かなければならないのであるか、この人生の意義目的の何たるかを明確に了解して置くことが、青年の身を立て世に處する根本要件であると思ふ。社會上の多くの墮落、多くの罪惡、多くの不心得は、要するに人生社會の何たるかに就いて明確なる了解なきことに基づいて居るではないか、假令非常なる奮闘努力に依つて、功名榮達を極むることが出來たとしても、人生の眞意義の何たるかを明確に了解せざるに於ては、その生涯たるや畢竟空々漠々、何等の意義なく、何等の價値なき泡沫夢幻の生涯に過ぎざる結果に終るのである。假令如何に短い壽命であつたにもせよ。又甚だ卑賤なる業務に從事せるものであつたにもせよ、その人が健全なる人生觀、社會觀の所信の上に立つて居たとすれば、その勤勞苦心はその人の生命と共に消滅せず、永遠に永續すべき生命あり、光あるものとなるのである。

庭園の草花の蝶を呼ぶ原理

さて然らば我々人類の生存の意義目的は何であるか、この問題を考ふるに就いては、先づ宇宙間に活きとし活ける有ゆる生物の存在の意義目的

の何たるかの點に考へて見なければならない。例令へば庭園の草花は何の爲めに存在して居るかと問ふて、之は人の目を樂ましむる爲めといふのは、我々より勝手に之をいふことであつて、草花その物にいはしむれば、自分は決して人間の爲めに花を咲するのではないといふかも知れない。或は又犬や猫は何の爲めに生存して居るかと問ふて、之は人間の爲めに泥坊を防ぎ、鼠を捕ふる爲めであるといふのは、我々の勝手にいふことであつて、犬や猫その物の意見としては、我々は決して人間に勞力を捧ぐる爲めに生存して居るのではないといふかも知れない。之と同樣に人間は斯ういふ目的の爲めに生存して居るのであると、之を倫理的道德的に斷定して仕舞うことは、神樣は之をなさるかも知らない、けれども神樣が之を決めたことに對して、我々は果して異存なきことが出來るか、恰度我々が草花や犬猫に對して、我々の目を樂ましめ心を樂ましめ或は我々の有用に働く爲めに存在して居ると決めて仕舞つても、草花や犬猫は決してそれを承知しないと同樣に、我々には我々自身の意見がなくてはならない、然らば如何なる意見があるかといふに、本より各人各位の意見が違つて居るから、それに構はずに一般的の標準を立てゝ斷定することは出來ない。唯だ事實に依つて事實のまゝに推考する外はないのである。

私の考ふる所では、更に人類のみならず、總べての活きとし活けるもの、皆歷史の產物であつて、歷史に依つて生じ來り、歷史に依つて去り行く者たることは、事實上疑ひを容れない。この故に當

に人間のみならず、總ての生物は己れの種族を續ける事が生存の根本義となつて居る。庭園の草花が馥郁爛熳と咲き亂れて居る、それは人間の目を樂しましむる爲めでは決してない。それを以て蝶を呼んで實を結ばんが爲めであるから、その目的を達すれば枯れて仕舞ふ。動物でもその通りで、卵から虫になつて、それが更らに蝶になつて卵を產み付くれば、最早や生存上の要件は終つたから直ぐに死んで仕舞ふ。この狀態は下等の生物ほど簡單で、判然して居るが、仔細に吟味すれば、如何なる生物でも、その種族を續くることが生存の根本義となつて居ることは何うしても疑ひ得ない

然れば人間が如何に高尙であり、靈智靈能を有して居るとはいふものゝ、この自然の大原則を離れて別に生存の理由ありといふことは出來ないと思ふ。

この故に人間も種族を續けることが生存の根本義たることは疑ひ得ないのであるが、然るに人間は下等の生物の如く單に種族を產み離してそれで本分を盡せりといふ譯には行かない。自ら健全にし完全にし以て種族をして益々繁殖せしめ發達せしむるやうに努力奮鬪を要するのである、それは我々が自分等の種族を永久に續くる要義であり、同時に我々自身の生命をして永からしむる要義である。故にその方法として人類は社會國家を組織する。此社會國家の機關に依つて我々はその生命を安全にして、且つ幾分永くするのみならず、他の一面からいへば精神的生命が之に依つて永久に活きることが出來る。若し我々が一個人として、單獨に宇宙に生存せるものならば、我々の生命は直

〻に消滅し極めて果敢ないものであらうが、社會ある爲めに永久に生きることが出來る。

現世の樂土と生存競爭壕裡

然るに若しこの社會が強くなければ忽ちに外の生物から壓倒されて仕舞う、そこで我々は自分の生命を永くし、種族を續ける爲めにこの社會を完全にし、發達せしむることが我々の生存上の要義となつて居る。是に於てか社會には、自然淘汰生存競爭なるものがあつて遊惰なるものを排斥して、勤勉なるものゝみを以て社會を組織するといふ仕掛けが自然に出來て居る。

抑々我々が不十分ながらも。餓えることなく、凍ゆることなく暮らして行くことの出來るのは元來誰れのお蔭であるかを考へて見なければならない。自分銘々の力だけで出來る譯のものでなく、さりとて、又現在の周圍の人の力のみでなく、幾千年來の大勢の祖先の少しづゝの勤勞が積り積つた結果に外ならない。我々の太古の祖先は穴居木棲の狀態にあつたといふのであるが、それに較ぶれば今日我々の生活は、如何に便利であるか、如何に幸福であるか、單に物質上のみならず精神上に於ても我々が今日斯くの如くにして生存し得る所以のものは、皆一つとして祖先の非常なる努力苦心の結果に外ならない。例へば雨降る時に我々は下駄を穿く、傘をさす、何でもないやうであるけれども、祖先の或者が下駄を工夫爲出すには少なからぬ苦心を爲たに違ひない、傘を發明せるにも非常な骨折りを爲たであらう或は着物を織ることを發明して子孫に殘した人もあり、或は一本の針を發明して子孫に遺した人もあり、或は鎌、或は鍬、筆墨薪炭、食料醫藥、苟くも手に觸れ口に味はひ、纏ひ。心に樂しむ有らゆるもの、一つとして祖先の非常なる苦心努力に依つてなれる賜ならざるはないのである。この大なる恩意に日々浴しつゝある我々が默つて之れを過ごすことが出來るか幾分にても物質上に又は精神上に人類社會の幸福を附け加へて之れを子孫に傳ふることが、我々がこの社會に生存するに就ての當然の本分ではないか、斯くして我々の子孫はその上にまた幾分の幸福を附け加へて、更らにその子孫に傳へ終に幾百代幾千代の後には、この社會をして完全圓滿の樂土にすること是れ人生一貫の目的であると思ふ、宗教家は來世に於て、淨土を說き天國を說くけれども、私は現在のこの社會を完全圓滿の樂土にする爲めに、我々は日々努力奮鬪する所以に外ならぬと思ふ。

考へて見るに我々の一生は、遠き祖先より永き子孫に傳はる所の中間の一連鎖に過ぎない。私が人間は歷史の產物であつて、歷史に依つて生じ來り、歷史に依つて去り行くものであるといつたのは畢竟此處のことである。故に人生の何たるか、我々の奮鬪の本分の何たるかを知らんとするには、先づこの中間の一連鎖といふ點に考へ至らなければならない、即ち我々が一生の中に努めたことが子孫に傳はつて社會の發達人生の幸福に幾分の貢獻を爲すことが出來れば、以て人生の本分を盡したといふ點に於てこの上なき滿足であるとの考へは此處から起る。

然るに若し我々が、社會の爲め或は人類の爲めに、自分の全能全力を傾倒して事に當つたにも拘はらず、その事が絶對の失敗に終つて仕舞つたといふ如き場合は何うであらう。人間本來の愚痴な性分よりして、それに對し果して不平なきことが出來やうか。この點が又人世社會に對する健全なる確信を持つや否やに就いて重要な點である。然るに私の所信を以て之をいへば、若し自分が社會の罪惡或は非道に對して闘つて、自分の力はそれに對抗し得ずに終に打ち倒されて仕舞つたとしても、私はその爲めに悲觀し、失望し、自暴自棄に陷る如きことは決してない、縱令自分は闘つて負けたにしても、自分が對抗しただけ敵の勢力の幾分を惱ますことが出來て居る、そうすれば敵は自分から惱まされたいけ、その非道を縱いまゝにする範圍を縮められた譯であるから、自分は縱令負けたにしても、自分の勤勞は決して無駄でなかつたと思ふから愉快である。この故に敵の勢力が極めて強く、味方の勢力が甚だ微々として、如何に闘つても到底勝算のないといふ場合にも、私は全力を揮つて敵に爭うことを厭はない。縱令敗北して身は斃るゝとも、善の一員として働らいたと思へば愉快であり、滿足である。蓋し思ふにかの楠公の如きは畢竟この精神を以て世に立つて居られたに違ひない、而して彼れの勤勞は決して無駄ではなかつた。明治維新の革命の如き、多くの志士の靈力に依るもの多きは無論であるが、その源は遠く楠公の精忠に基づけるものが多いのであつた。斯くの如く、勤勞

窮厄非運と因果應報の道理

の種子は決して無意義に消え失せない、何時かは必ず生へ出るものであることを見れば、事の失敗と成功との如何に係はらず、自分の骨折りに對して常に愉快の心持ちで居ることが出來るではないか。

抑々人生の吉凶禍福は、必ずしも定規で定めたやうに輪廻して來るものとは限らないやうに見える善因必ずしも善果を產まず、惡因必ずしも惡果を生せぬやうに見える。この故に煩悶も起る。罪惡も起る、けれども私は世態人事の如何なる狀態を當て嵌められても、因果應報の道理は動かすべからざる大原則たることを確信して疑はない。私は必ずしも佛敎の如く、三世に亘つて之を解釋するのではなく唯だこの現世に於て之れを解釋し之れを確信して居る。假令今日の善因が明日直ぐに善果を持ち來たさないとしても、何時かは必ずその結果を現はすことがなくてはならない。今日の惡因は明日直ぐに惡果を持ち來たさないにしても、必ず何時かは惡果を結ぶべきを疑ふことはない。斯樣に確信して居るから、自分に全分の誠を盡してをつたことに對して、直ぐに相當の結果が現はれないにしても、それを以て無駄骨折りを爲たとの感を抱くことは毫もない、常にそれに滿足し、安心して日々全力を盡して事に當ることが出來る。例へば奇麗な花の咲く草の種子を庭園に蒔いたとして見よ、目前にその種子が芽を吹き出さないにしても後日には芽を出して花を咲かすものと思へば、種子を蒔いたゞけでも樂しみではないか。これと同じ道理で、自分が今日善行を爲したこと

に對して、明日になつても明後日になつても、その結果を見ないにしても、併し何時かは必ず善果を現はすものと思へば、それだけで愉快である。故に私は自分の聊かの勤勞に對して縱令直接の結果を得ないにしても、その爲めに不平の感を抱いたことは一度もない。

以上は私の人生社會に對する所信の大要であるが、私はこの所信の上に立つて、日々の努力に滿足し、假令自分の日々爲しつゝある所の勤勞は甚だ微々たるものではあるけれども、決して無駄ではない、泡沫の如く消え行くものではないと信じて、愉快に働くことが出來て居る。之より活社會に出て事を爲さんとする青年は、先づ人生宇宙社會に對する自分の位置の何たるかを顧みて、その勤勞をして價値あらしめ、その生涯をして無意義のものたらしめざる覺悟を持つこと、是れ活青年が世に處し身を立る所以の根本要件であると思ふ。

第五　浮田和民博士の新道德論

新道德は人格を基礎となす

社會即ち共同生活は道德なしには一日も成立たぬ。而して此共同生活の組織が變化するときには、其道德も自然に變化するものである。若し社會の變化に應じて道德が變化せざるときは、其社會を破壞するの虞がある。西洋は佛蘭西大革命以來、日本は維新以來、社會の組織一變して舊道德にては間に合はずこゝに新道德を發生し、又之を要求する事となつた。

そこで今日は君臣、父子、兄弟、朋友、夫婦等の關係以外如何なる人に接しても道德を行ひ得る樣な精神狀態を養生するの必要がある。故に新道德に於ては先づ人格の概念を第一に標榜して、假令血族に非ず又は平生特殊の關係を有せざる人にても、一旦相接する以上は即ち人と人との關係であると云ふことを認めて互に人たるの道を實行するやうになさんければならぬ。そこで如何なる人に接しても、我も人である彼も又人であると云ふことを自覺して、其人格を敬重するの必要がある。故に新道德は舊道德の根抵に横はつて居つた人格の概念を表面に出し、之を眞向に掲げて各人に臨む可きことを要求するのである。而して其人格概念を理解することが最も緊要の事となつた。

(一)　人格の第一義。人は萬物の靈であると云ふことは舊道德の時代にも能く人の言ふことであつたが、さて其萬物の靈たる人の資格は何であるかと云ふことは明白でなかつた。此意義を明白に最も眞く解說したのは獨逸のカントである。カントの解釋に因れば理性を有するものは自己目的たるの價値を有す。故に如何なる場合に於ても他の意志に因つて專に方便として使用せらるべきものでない。同時に目的として敬重せらるべき價値あるものである。これ人格と事物の異なる所である事物はそれ自身に於て獨立の價値を有するものにあらず。人間に關係して始めて何等かの價値を生ずるものである。故に事物(物質及び下等動物を云ふ)のは方便としてのみ之を使用することが出來る。固より道德上之を濫用することは惡であるけれども見に角事物を取扱ふのと人格あるものを取扱ふのとは大に異なる所がある。故にカントは人格に絕對的價値がある。事物には相對的價値あるのみと言つて居る。一は利用すべく、一は尊敬すべきものである。人間は社會的動物であるからして固より互に沒し沒せられるは當然の事である。即ち或點までは何人も他人に沒せられることを厭ふべからず。社會の爲めに一分を盡

きなければならぬものである。併し乍ら、人間は他の意志に全く奴隷的服從を爲す事を許さぬ。何處までも道德上に於ては自己目的となり事物の主となればならぬ資格を有するものである。故に人格なるものは如何なる場合に於ても單に他の意志の方便のみとなつて盲從すべきものでない。人格の第一義は、即ち何處までも自己目的として事物の主となるべきことを意味するものである。

人間は、萬物の尺度なりとは古代の哲學者プロタゴラスの言であるが、この人間と云ふを唯單に個人又は動物としての人間と解釋しては不都合であるが、併し理性を備へ共同生活をなす所の人間と云ふ意味で云へば。人は實に今も昔も萬物の尺度である。即ち事物の大小長短、事物の利害得失即ち事物の價値は總て人間に因つて定まるのである。人間は萬物の價値を定むるのみならず、其價値を造るものである。人間を離れては如何なる高貴大樓も何の價値あらんや、人間を離れては百花爛漫も何の意義あらんや、殊に經濟上の價値は總て人間に因つて造られるのである。人間は實に事物の目的にして、一切の價値は人間より生ずるものである。

(二) 人格の第二義、人格と事物と異なる第一點は事物は自己目的たる能はず、人格は自己目的にして絶對的價値を有するにある。これは人間に自由意志を存して居ると云ふことを意味するものである。凡そ理性を有する者は必ず自由意思を具備しなければならない。即ち道理の存する所を發見するには聰明なる意志の力を要するものである。又道理の存する所に從つて活動をなさんとするには確實なる意志の力なくては出來ない事である。故に理性を有すると云ふ事は、一面に自由意志を實現すると云ふことである。されば人格ある者の必要條件は自由意志を養生し之を實現することである。人間も或點までは物質であり又多くの點までは下等動物と共通の本能を有つて居る。故に其物質の法則や動物の性質に從ふ事は必然又當然の事である。併しながら、之に從ふにしても。人間の行動は自から下等動物と異なる所ある為要す。物質は自然の法則に必然的に服從するものである。又下等動物も其本能に從ふの外自由の能力なき物である。併しながら人間は教育の結果、其本能に超越するの能力を有して居る。即ち本能に全く支配せられる事なく、本能以上に立つて自から之を支配する力を有するものである。少なくとも教育の結果之を有することの出來るものである。

人間の威嚴は實にこゝにある。即ち人間は自主自治の資格を有する者である。人間が自己目的たるの能力を有すると云ふ意義も此所に存するものである。然るに舊道德に依ると、習慣に服從することを以て唯一の善となし、習慣に背くことを以て唯一の惡とする傾向がある所からして、動もすると人の此意義に反する弊害があつた。今日は自由を主とする世の中であるから此弊害は少ない。併し乍ら自由を濫用して矢張り人格の第一義に背かんとするの傾向は、却つて舊道德時代よりも多くある。それで益々此人格の第二義たる自由の意義を正當に解釋して之を濫用せぬ樣にせんければならぬ。凡そ自由と云ふことの必要は、自主たらんとするの目的を有するからである。他人の奴隷として生活する者は自由を有せず又自由を要しない。けれども自主獨立せんとするには、實に自由が必要である。即ち之れは理性の根本的要求に出るものである。他人の道理を道理として居る間は、未だ其の道理は自分に理解する事の出來ぬものである。他人の良心に依つて善惡邪正を判別する間は、自分には未だ善惡邪正の別が分らぬのである。總て道理と道德とは自由を以て其必要條件と爲すものである。舊道德は習慣に從ふを以て其標準となしたから自由の必要も明白でなかつたけれども、新道德の根本は何處までも人格を尊重するといふことであれば、其人格の必要條件たる自由を實現せしめんければならぬ。即ち新道德は如何なる關係にある人に對しても之れを獨立的價値を有する人格者として取扱ひ又道德上の法則を規定する場合には、他人の命令を俟たず自己の指揮命令

に依るべきものなりとして外より壓制的に服從を要求してはならぬ。舊道德にては道德上の立法者は自己の上より命令を下だす事であつたが、新道德に於ては道德的法則の立法者は自己であり自己自から立法者たり又行法者たる地位に立つものである。即ち道德の義務責任は各人自己に存する事となすのである。輿論にても、習慣にても、唯輿論である、唯習慣であると云ふので服從するのは人格の意義に反するものである。此習慣は是である、此輿論は正であると云ふことを自ら判斷確信せざれば、其習慣に從ひ、其輿論に服すべきでないといふ事になる。されば新道德は舊道德と違つて、總ての事に批判を下すものである。即ち批評的道德である。而して決して現在の程度で滿足しない道德である。故に新道德は科學的道德であり、又進步的道德である。何となれば、現在の道德を批評し其缺點を改め改新を圖ると云ふには、科學の知識が必要である。而して新道德は批評的であり科學的であるから自然に進步的道德たることを得るものである。

人格の成立は社會共同生活

かくの如く新道德は個人的道德であり、各人の人格に絕對的道德であり各自の人格に絕對的價値を置くものであるが、さて夫れならば團體を無視し、殊に協同生活を輕視するかと云ふに決して然らず、人格の成立及發展は一に社會協同生活による事を認識するものである。唯自然の儘にては人間も下等動物と異なる所はない、殊に人間は下等動物よりも根本的に協同生活を必要とするものである。下等動物は生長の後は概して他の動物に獨立して生活をなし得るものであるが、人間は肉體上の生活をなすにも他人の協力なしには出來ぬものである。殊に其精神的生活に至つては全く協同生活の賜物であると云ふべきである。單獨孤立にては人間は富もなく、知識もなく、美術もなく、又恐らくは道德も自覺する能はざる事であらうと思はれる。他の動物は單獨孤立の生活をしても、又は同類群居しても、其動物たるの性格に變動は無いのである。然れども人間の性格は單獨孤立の場合と協同生活をなす場合とは、全く其性格を異にするものである。人間が生來單獨孤立無人島に成長するとしたならば、其性格は唯人類と云ふ高等動物に過ぎざるのみで今日の意味で云ふ人又は人間たるの資格は無いのである。思ふに人間は自然の產物ではないのである。家族を組織し又種々なる協同生活をなす事に因つて始めて人間の性格を實現するものである。故に人を生むものは自然であるが人を造るものは社會だりといふ事が出來る。古代の大哲學者アリストテレスは、今より二千二百年以前によく此眞理を言ひ表はしたのである。彼れは『社會に生活する能はず又は自から足れりとして他に俟つ所なきものは禽獸か然らざれば神なり』と言つて居る。されば新道德は個人的であると同時に社會的である。唯一部の社會を重んずるのみならず、總ての社會を道德上平等に價値あるものとして尊敬するのである。苟くも人格の爲に害をなさゞる以上、凡ての團體を尊重し、其發達を希ふものである。唯だ團體の組織は道德上自由組織であつて、個人を壓迫し强制的に團體に屈從せしめざる